VOYAGE EN MONGOLIE ORIENTALE

PAR

R. TORII.

Chargé du Cours d'Anthropologie à l'Université Impérial de Tokyo.

鳥居龍藏著

東京 博文館藏版

京古報行

外交

292.26
To554m

中國國會
40.10.-4
圖書館藏書

677732

古文目

677732

序

朝鮮を除いて日本と關係の最も深いのは東蒙古である、故に東蒙古は政治上、學術上最も注意すべき所である、今更言ふまでも無いが、殊に人種學上から觀察すると、一層此感を深くするのである。元來東蒙古は古より烏丸、鮮卑の如き東胡族が雄飛の舞臺で、彼等は遂に拓跋氏となり、慕容氏等となり、北魏、契丹(遼)等の文化を形成した。また蒙古人も是から出て、夫の匈奴族も亦是と親族的關係を有して居る。彼等東胡族は實に極東に於ける夫餘、渤海、金、滿洲等を形成したツングースの女眞族と相對比すべきものである。而して彼等鮮卑、烏丸の活動した中心點は、其興安嶺方面、シラム

レン流域であることを忘るべからず。然し此方面たる、此の如く學問上最も多趣味なる地點なるに拘はらず、未だ實地調査の及ばざるは、平素我輩が私かに遺憾とする所で、誰か我が學者界に其人が出るであらうと、久しく希望を嘱して居つたのである。

鳥居君は人種學者である、夙に興安嶺、シラムレン附近の斯學上尚ほ闇黑界裡に在るを憂へ、率先して自ら其研究に當らんとして、曩きに東蒙古に赴かれた。此行たる、我輩多年の考と望とに一致したから、甚だ之を壯とし、且つ君の爲に學術上其前途を祝し、併せて其有益なる研究の結果を齎し歸らんことを切望した。然るに今や君は其目的地方を探檢し、

斯學上の研究を了へて歸朝し、先づ其當時の探檢紀行を世に公にし、更に續いて學界に其研究論文を發表するといふことである。

今此紀行を讀むに、君が幾多の困難を排したる苦心の記念たるを知るのみならず、而も此行や鳥居氏夫人の愛子を携へつゝ、萬艱千苦を犯して熱誠なる内助のあつたことは、我輩の殊に最も同情の感に堪へざる所である。此探檢が他に類例なき光彩を放つて、世間普通の物と同日に語るべからざることは、是を以ても知るべきである。

要するに、鳥居氏夫妻が此行たる、東蒙古に於ける不明未知の人種、言語、歴史、古物、遺跡、風俗、地理等に就て光

明を與へたものである。就中東胡族の研究結果の如きは、斯學上に最も有益なる發見たるを疑はない。而して君が其發表順序として、茲に其探檢紀行を公表するのは、頗る適當の處置である。

今や蒙古は政治其他に於て正に多事である、蒙古に志あるもの、否東洋に志あるものは固より、世間一般の人士も亦此多趣味にして有益なる書に接するは甚だ必要である、是れ我輩が本書を推薦するに吝ならざる所以である。

伯爵　大隈重信

專門的學術に關する論文の如きは、之を專攻する者に利益を與ふること大なりと雖も、門外者は之を讀むも其の眞義を解するに難く、索然として恰も蠟を嚙むが如き感を懷くこと少からず。然るに探檢旅行者の紀行に至りては、一般讀書家に未開地の知識を得せしむると同時に興味を感ぜしむること深きを以て、其の好奇心を挑發し、企業心を奮興せしめ、特に青年に冒險敢爲の氣象を鼓吹すること極めて大なり。

均しく旅行と稱すと雖も、充分の便宜を有するものは、其の土地の天眞を詳察するに於て、却りて遺憾の點少なからずとせず。之に反して其便宜を缺き、困難益々加はれば、其の得る所愈々多大にして、且有益なるものあるを例とす。

友人鳥居君は深く蒙古未開地に入り、備さに辛酸を嘗めて精察細査し、同行の内君は君と觀察の方面を異にし、彼是相應じ内外相俟ちて以て完璧を成せり。故を以て其の研究の詳密にして、且多方面に亘ること、尋常旅行者の到底企及すべからざる所のものあり。

此の書や讀者をして自ら其の地を蹈み、親しく其の風物に接するの感あらしめ、後進者を奮發せしむるに於て益すること巨大なるべきを信ず、これ余が喜んで玆に一言する所以なり。

明治四十四年四月三日

福島安正

自序

東蒙古、殊に興安嶺方面及び潢河(シラムレン)流域は、人類學上未だ闇黑界裡に屬す。されば若し是等地方に於て、斯學上の探撿調査をなしたらんには、其得べき結果は頗る大なりと云ふ可し。予等の蒙古に行きしは、全くこの目的を達せんが爲なりき。

予及び妻は最初一ヶ年許、喀喇沁王府にて蒙古語を學ぶと共に其附近を實踐し、更に予等は幼女幸子を携へ、北部諸地方を探撿調査し、斯學上聊か得る所ありたり。予等は是等の任務を全ふする爲めに、寒氣風雪を犯し、前後三ヶ年の歳月を之に費したり。

予等の東蒙古に於て調査なしたる事項は、第一、是等地方に住する蒙古人の身體測定を行ひ。第二、彼等の言語を精査し。第三、其風俗習慣。第四、俚歌、童謠、童話。第五、古物遺跡等に及びたり。就中、考

古學上の調査としては、古くは鮮卑、烏丸等の東胡民族の遺跡遺物、降て契丹の其れの如きは、世界の學問上に向て、自から其發見たるを誇るものなり。

本書は單に、予等の東蒙古を探撿せし旅行日記のみにして、たゞ僅かに日々の出來事、出會せし地方、人物等を記せしものなり。其調査研究せし以上の事項に至ては、更に論文として、『東京帝國大學理科大學紀要』に於て佛蘭西文を以て發表せんとす。由來歐洲の學者は、最初自からの旅行日記を出版し、後其研究論文を發表するを普通なりとす。予はこの例にならゐ、茲に先づ今回始めて『東蒙古旅行記』を出版なしたる所以なり。されど一般世人に利益を與へ、而かも其趣味あるは探撿旅行記にして、其論文の如きは、僅かなる同學者の間に熟讀批評せらるゝのみ。況んや東蒙古の如き、種々の點に於て我が國人に、直接の利害を有する方面なるに於てをや。

予は實に我が妻及び幼女と共に、幾多の天然人爲の困難と相戰ひ、斯學調査の爲め、東蒙古に幾多の歳月を費したり。今にして思へば轉た戰慄すべき事も少なからず。されど予等當初の目的任務の或部分を行ゐたりとせば、又自から其苦を慰するに足る。この旅行記は誠に當時の紀念にして、予等はこれに鑑み、尚ほ將來も一層之れに耻ぢざる事業を爲し遂げんとす。聊か記して自序とす。

明治四十三年十二月十九日須磨、明石を望み臺北丸の船中に於て

鳥居龍藏

PRÉFACE.

La Mongolie Orientale (région du fleuve Shira-mouren et des monts Khingan) n'a pas encore été étudiée jusqu'ici au point de vue anthropologique.

Cette étude offrait cependant un grand intérêt. J'ai essayé de combler cette lacune.

En 1906, le Prince de Khara-chin en Mongolie nous fit demander par le directeur de ses écoles, si nous voulions accepter, ma femme et moi, d'assurer l'instruction des enfants mongols, pour la durée d'une année.

Jugeant l'occasion excellente, nous partîmes au printemps de 1906 pour la Mongolie.

Tout en instruisant les enfants mongols, nous avons appris la langue mongole et fait aussi, dans le pays, des recherches anthropologiques.

Retournés pour quelque temps au Japon en Janvier 1907, nous en repartîmes en Mars de la même année, après la naissance d'une petite fille

" Saki-ko," que nous avons emmenée avec nous en Mongolie.

Nous sommes restés jusqu'en décembre dans le palais du Prince de Khara-chin. Nous en sommes partis à la fin de décembre pour Chi-Fung, en Chine, (à une distance d'environ 200 ri[1] de Khara-chin), où nous avons séjourné jusqu'au printemps de l'année suivante.

En Mars 1908, nous avons alors commencé, avec l'enfant, un voyage en Mongolie.

Nous avons visité l'Onyout, passé le fleuve Shira-mouren, traversé le Barin, l'Ar-Khor-chin, franchi les monts Khingan, et pénétré dans l'Ouchimouchin occidental. De l'Ouchimouchin occidental, nous sommes entrés dans la Mongolie extérieure, dans l'Aïmak de Tsetsen-khan (partie la plus orientale du Khalkha), avons franchi ensuite deux fois les monts Khingan, parcouru l'Ouchimouchin Oriental, l'Ar-Khor-chin, le Barin, l'Onyout oriental, l'Onyout occidental, le Khara-chin, et sommes retournés par Péking.

Repartis de Péking pour le Dolon-nor, nous sommes arrivés à Chao-yang,

1. Le ri chinois équivant à 654 mètres 60.

après avoir traversé le Gheshikten, l'Onyout Oriental, le Barin, l'Ar-Khor-chin, le Naïman, l'Ohan, l'Onyout occidental, le Tomdo.

Retournés de là sur Péking, en passant par Ching-Chao (King-Tcheou-Fou), nous sommes alors rentrés au Japon, en décembre 1908.

Au cours de ce voyage, nous avons fait des études anthropologiques sur le peuple mongol, dont nous avons étudié les caractères physiques, la linguistique, l'ethnographie, l'archéologie. Au point de vue spécialement archéologique, nous avons découvert des vestiges du peuple Tung-Hu (東胡), remontant à une époque très reculée, et rapporté des objets et des ustensiles de différentes sortes ; nous avons aussi fait des recherches dans les ruines de " Kitan—."

De ce " Voyage en Mongolie Orientale," je n'ai encore écrit que ce qui a trait à l'itinéraire ; j'ai l'intention de faire paraitre dans le " Journal of the College of science " de l'Université Impériale de Tōkyō, le résultat de nos différentes recherches.

1r Octobre 1910,

R. TORII.

女　男　の　古　裝　外

（沁稜珠烏西）人婦貴の古蒙

（沁稜珠烏西）女男の人古蒙

孔雀明王像

凡例

本篇はもと殆んど二ヶ年にわたり雑誌『世界』に掲載せし東蒙古旅行を、自から更に増補訂正せしものなり。日記は旅行中日々余及妻との各自に記載なしたるが、本篇は即ち余の日記にして、妻の其れは尚ほ不日別に之れを出版せんと欲す。

本篇はもと日記なるを以て、參考書などを引用することを避け、單に日々余の眼に映じ、耳に聞きたるものを其儘に記したり。

余等の旅行は一人の通辯を伴なはず、不充分ながら余等の學修せし蒙古語を以てせり。この點に於て、本日記は他の旅行者の其と趣を異にせり。而して余は妻と共にせしを以て、比較的多く蒙古婦女と接近する機會を得たり。之亦この旅行が他と大に性質を異にする所なりとす。

蒙古語には、文語と口語との二種あり。余の本篇に記する地名、人名、

物名等は悉く口語に係れり。されば文語の Aghola (山)は Ola となり、Khumun=hümün (人)は Khum=hüm となれり。而して内蒙古の方は其方言に從ひ、外蒙古の方は又其方言に從ひたり。

蒙古語中、内外蒙古に於て各々方言の差を形成す、而して外蒙古語の方言は最も文語に近く、内蒙古語の方は稍や之に遠ざかれり。尙ほ其發音に於ても、二者又聊か相異する所あり。假令ば外蒙古語の kh 音は、内蒙古語にては h に變化し、e 音は ö, ü, ü, 等の如き ö に近き音になり來れり。即ち Khara (黑)の Hára に於ける、Gher (家)の Ghür に於けるが如し。されば余は之に因て記せり。

蒙古語には他のツラルアルタイ語派に行はるゝが如き、嚴然たるボカルハルモニーの規則あり。而してこは明確に文語口語の上に及べり。假令ば本篇多く出づる『村』の Ail は Ail-a となり、『泉』の Hótok は Hótok-a となり、『河』の kol は kol-o となり居るが如き是なり。是等は蒙古語の一種の特色なれば玆に一言す。

本篇中の寫眞は、悉く余等の撮影せしものなれども、長途の旅行中寫眞機の破壞せしと、極寒風雪等を犯して爲したれば、固より不完全たるを免れず。されど是等の寫眞は、東蒙古人研究に向てオリジナルの好材料たるを疑はざるなり。

本篇中に出したる寫眞は、最も蒙古の古風を保存せる地方の人物のみにして、南邊の蒙古人の寫眞は之を除きたり。西烏珠穆沁附近の風俗を示したるは之が爲めにして、同地方は現今内蒙古に於て最も蒙古の固有風俗の殘り居る所なり。

溫度は寒暖計の紛失なき日時の部は悉く之が溫度數を記したり。而して土地の標高は、バロメートルを以て驗したるが、不幸にして前の旅

行の分は北京より此器の到着せざりしを以て、其土地の標高を記す能はざりしは、余の最も遺憾とする所なりとす。

余等は自から專門の調査の餘暇、又植物、動物、岩石などを聊か採集せり。植物の方は目今朔北植物の專門家、矢部理學士の手にて研究せられ居れば、氏の論文中に發表せらるゝならんと信ず。

附錄の地圖は旅行中、自から日々作製せしものにして、要はただ旅行順路の方向を示したるに過ぎず。而して地圖中の地名は、主として蒙古內地の方を精密に記し、蒙古外の地名は省略せり。

本篇中の一淸里とは、我が凡そ六町程なれば、讀者は豫かじめ記憶ありたし。

余等の東蒙古旅行に就ては、直接間接に受けたる幾多朝野紳士、學者等の補助頗る多し、是等諸氏の尊名は、今都合を以て明記せざれども、

余等の研究結果は是等同情ある諸氏の厚き賜なれば、玆に記して以て、大に敬意を表し併せて深謝す。

本書表紙の紋樣は、外蒙古車臣汗部喀爾喀蒙古人天幕內使用毛氈の敷物に駱駝の毛絲にて縫取りをなし、周圍に赤布を附したるものにて、蒙古人の美術的意匠として面白きものなれば、これを畫くことゝせり。

是等の縫取紋樣は內外蒙古人一般に行はるゝ所にして、何づれも其家の婦女の手になり、互に競爭する風あり。內蒙古にて古風の存せざる地方にてはこの俗なし。而して表紙裏面の紋樣は、西烏珠穆沁蒙古婦人上衣の後なる切れ目の上に縫取せられたるものなり。

雜誌『世界』及び本書の出版、校正其他に就ては、二宮熊次郎氏はじめ加藤房藏、山田孝雄、新屋茂樹、中村長等の諸氏の手を煩はしたる事頗る多し、玆に深謝の意を表す。

蒙古旅行目次

第一　蒙古旅行の動機……一
一　喀喇沁王の招聘……一
二　喀喇沁に於ける余等の生活……二
第二　喀喇沁及び赤峰……四
一　喀喇沁の地勢……四
二　現今の喀喇沁……五
三　往時の喀喇沁……六
四　喀喇沁を去り赤峯に越年す……八
五　赤峯及其附近……九
六　英金河畔遺跡遺物……一二
第三　遼の中京を訪ふ……一三
一　赤峯より喀喇沁王府に到る……一三

二　石虎の遺跡を調査す……一九
三　遼の中京を訪ふ……二一
四　赤峯に歸る……三六

第四　赤峰以北翁牛特間……四一
一　北方旅行の期節……四一
二　蒙古旅行通辯の不完全……四二
三　旅行準備……四四
四　赤峰を出發す……四五
五　蒙古宿驛の狀態……四七
六　招素河流域……四八
七　卜羅科河流域……四九
八　國公攻の古跡を訪ふ……五五
九　烏丹城……六二
十　東翁牛特……六四

十一　再び國公攻を調査す……六六
十二　東翁牛特王府に歸る……七〇
十三　出發に臨み故障を生ず……七三

第五　翁牛特より潢河……七五
一　旅行漸く蒙古的となる……七五
二　東弋壁の砂漠地に入る……八〇
三　潢河解氷の爲め當初の旅程を變ず……八三
四　潢河々畔に於ける石器時代の遺物……八五
五　潢河渡渉の困難……九二
六　潢河を渡る……九九
七　潢水石橋……一〇一

第六　大巴林より阿嚕科爾沁……一〇四
一　潢河より大巴林王府に向ふ……一〇四
二　慶州古城に向ふ……一二三

三　慶州古城の調査……一三四
四　小巴林王府に到る……一五二
五　小巴林よりウルヂムレン……一五九
六　遼の上京及び其の附近遺跡の研究……一六五
七　阿嚕科爾沁に入る……一八四

第七　阿嚕科爾沁より烏珠穆沁……一八九
一　白城調査に向ふ……一九二
二　興安嶺山中に入る……一九六
三　興安嶺の脊梁を踰ゆ……二〇一
四　興安嶺の名稱研究……二〇九
五

第八　西烏珠穆沁……二一一
一　西烏珠穆沁と其の風俗……二一二
二　烏珠穆沁王府……二二九

三　王府出發……二三三
四　鹽湖及び其の附近……二四〇
五　外蒙古に向ふ……二四六

第九　外蒙古喀爾喀王府に到る……二五六
一　初めて外蒙古に入る……二五六
二　外蒙古の研究……二六二
三　世に知られざる長城……二七〇
四　喀爾喀王府に到る途上……二七六
五　喀爾喀王府……二八五

第十　喀爾喀王府より内蒙古東烏珠穆沁……二八九
一　王府以北の困難なる旅程……二八九
二　ヴュルノール湖……二九四
三　各國製地圖の誤謬……二九八
四　巴爾喀民族の部落を旅行す……三〇〇

五　ソロン探檢の失敗……三一〇
六　デッタバイシン領……三二八
第十一　東烏珠穆沁……三三八
一　東烏珠穆沁領に入る……三三九
二　興安嶺特有の動物タルバガ……三五二
三　蒙古人の卜占……三五七
四　東烏珠穆沁王府……三六三
五　王府出發……三七〇
第十二　東西扎嚕特……三七五
一　東扎嚕特に入る……三七五
二　興安嶺の峻坂を攀づ……三八六
三　東扎嚕特王府……三九六
四　西扎嚕特……四〇〇
五　シャーマン教研究……四〇三

第十三　阿嚕科爾沁より赤峰……四一四
一　再び阿嚕科爾沁領に入る……四一四
二　蒙古相撲の調査……四二〇
三　巴林に向ふ……四二二
四　潢河を渡る……四二九
五　東翁牛特王府より赤峯……四三七
第十四　赤峰より北京……四四〇
一　第二回の旅行を始む……四四〇
二　喀喇沁王府……四四二
三　熱河より長城……四五〇
四　萬里の長城を見る……四六〇
五　北京に入る……四六六
第十五　北京より張家口……四六七
一　北京より長城南口……四六七

二　南口より懐來河……四七二
三　懐來河より宣化府……四七七
四　張家口……四八四
第十六　張家口より多倫諾爾……四八五
一　旅行漸く蒙古的となる……四八五
二　上都河流域……四九三
三　多倫諾爾……四九六
第十七　多倫諾爾より經棚……五〇〇
一　上都古城に向ふ……五〇〇
二　上都古城の研究……五〇三
三　經棚に向ふ……五〇七
四　ダライノール附近……五一八
五　再び經棚に歸る……五二三
第十八　經棚より土城子潢河間……五二六

一　潢河上源地の旅行……五二六
二　土城子に於ける奇禍……五三三
第十九　潢水石橋より大板身……五四四
一　潢水石橋を渡る……五四四
二　大板身に入る……五四九
第二十　小巴林より阿嚕科爾沁……五五三
一　小巴林王府附近……五五三
二　阿嚕科爾沁王府に入る……五五五
第二十一　阿嚕科爾沁より老哈河……五五七
一　阿嚕科爾沁王府出發……五五七
二　狼水を渡る……五六〇
三　老哈河に向ふ……五六五
第二十二　奈曼領に入る……五六八
一　老哈河を渡る……五六八

旅行の紀念

目次

二　奈曼王府……五七五
三　敖漢に向ふ……五七八
第二十三　敖漢より赤峰……五八二
一　敖漢王府……五八二
二　赤峯に歸着す……五八八
第二十四　赤峰より朝陽……五九一
一　巴奇阿嶺を越ゆ……五九一
二　朝陽に入る……五九七
第二十五　朝陽より錦州北京……六〇一
一　大凌河流域……六〇一
二　支那旅宿の狀態……六〇四
三　錦州より北京……六〇六

目次終

東蒙古探檢圖

里本日

0 20 40 60里

黑龍江省

外蒙古

興安

西蒙古

內蒙古

東戈壁沙漠

西戈壁沙漠

沙漠

古陸

領

上都河

白河

金山

熱河

北古

京北

津天

沽太

張家口

綏遠

歸綏

包頭

州錦

關海山

府德成

記號

探檢實測路

古長城跡

廟

崩

山

長城頂

長城

蒙古旅行

東京帝國大學理科大學講師　鳥居龍藏著

第一　余が蒙古旅行の動機

一、喀喇沁王の招聘

最初の蒙古旅行

蒙古研究の希望

余は日露戰爭の際、東京帝國大學より人類學調査の爲め、滿洲に出張を命ぜられ、滿洲より蒙古科爾沁（コルチン）の二三旗賓圖王（ピントロン）、游王（ヨウワン）管下等に至り多少得る所ありしが、此の時より、人類學研究上東蒙古の頗る興味あるを感じ、此の調査旅行より歸り來ると共に、好んで蒙古に關する旅行記其他の著書を讀み、研究、調査せんとの念切なりし際、端なくも絶好の機會に際會せり、其は蒙古の南端、喀喇沁右旗王の日本教師を求められし事なり。

此の喇喀沁王は、日本教育の非常に進歩せるを見、自國にも此の有樣を移したしとの希望を有せられしが、曾て大阪博覽會の開催せられたる際日本に來遊し、歸途當時の上海領事小田切萬壽之助氏の手を經て河原操子女史を聘し、男子の方は支那人を以て之に當てたるが、之等の人々は二ヶ年の約束にて、王府附近に建てられたる學校にて、蒙古子女の教育に從ひしが、期滿ち河原女史は日本に歸りしを以て、北京駐劄の內田公使を經て服部博士に適任者の相談ありたれば、服部博士は更に日本に居らゝ市村博士及び安井小太郎氏に適任者の周旋を依頼したり。年限は一ヶ年にして成る可く夫婦者とは先方の希望なりし。市村博士は、余の再び蒙古に行くの希望を有し居る事、及び少しく蒙古の事に關して調査しつゝあるを知り居られしかば、先づ余に此事を相談せられたるを以て、余は直ちに之を承諾し、給料の如何等は論ぜず、蒙古を調査する豫ての希望を果さんとの考を以て、余の妻と共に喀喇沁に向ふ事とせしは明治三十九年の春なり。

教師として赴任す

二、喀喇沁に於ける余等の生活

余は當時、『苗族調査報告』の起草中なりしを以て、先づ妻をば三月に出發せしめ、　は四月に至りて漸く出發せり。

教ゆるより教はる

喀喇沁にて余は男子の學堂を、妻は女子の學堂を教へしが、余は兒童の爲に白墨を執りし經驗無きが上、又元來教師たるを好まざれば、約束に隨ひて教授の任には當れるものゝ、寧ろ日語と蒙語との交換的教授なりしも、双方語學の發達は案外速かなりき。若蒙早々、ボーと呼ぶ蒙古人の教師を傭ひて、妻と共に日々蒙古語の研究に從ひ、又た學堂にて教授する際も、出來得る丈け蒙古語を以てすることとしたれば、蒙古語練習の機會多く、得る處多かりき。

喀喇沁に於ける余等の日課

又た其の餘暇には、妻と共に蒙古人の身體測定を始めとし、俚歌、童謠、童語。等の蒐集に從ひ、時間の餘裕あれば王府附近を巡りて、諸種の調査に從事せしが、四十年一月、喀喇沁王と同行して北京に趣き、余等は一時日本へ歸り、四十年春三月、妻は女子を分娩し、全六月赤兒幸子を伴なひ再び喀喇沁に至り、同年十二月まで、蒙古語、其他を研究しつゝ府王に留まれり。今喀喇沁及其附近の事情に就て二三を記さんとす。

第二　喀喇沁及び赤峰

一、喀喇沁の地勢

喀喇沁の區劃及び位置

喀喇沁の地勢

西伯河

英金河

喀喇沁は三旗に分る、左旗、右旗、中旗、之なり。右旗とは蒙古語にて云ふバラゴン（西）カラチンにして、左旗はチュグン（東）ガラチン、中旗はトムドカラチンなり。余等の聘せられたるは、即ち此の右旗なり。三旗の地形は、中旗は中央に位し、其の西は右旗にして、東は左旗なり。元來蒙古には左右の語なく、只東西を以て區別す。

西喀喇沁は山中に位し、即ち南西には高き陰山々脈あり。毛金嶺の峠よりは、東北に向つて西伯河流れ出づ。西伯河は蒙古語にして、シバは天然に生えたる木の生墻の如きを指し、コロは河の意味なり。即ち河の中に樹木多く生ゆるを以て此の名ありと云ふ。西伯河は東北に流れ、赤峰に至りて英金河に注ぐ。又老哈河は喀喇沁の南方に源を發し、英金河を併せて東流し、潢河の流れに合す。

西喀喇沁王府は、西伯河の上源地に位し、其の高さ一千米突、毛金嶺より低き事五百米突なり。即ち喀喇沁は老哈河の上源地にありと言ふを得べく、内蒙古に於ける最高地なり。

西伯河上源地には松柏科の植物生じ、其の以下には柳、楡の類多し。今は濫伐せられたるも他の蒙古地方に比して、尚ほ頗る多く、且つ地は高山の中に位するを以て、此の附近の住民は盛に炭燒きに從事す。

二　現今の喀喇沁

喀喇沁附近の風俗支那化す

男女の服裝

家屋

喀喇沁の中旗、右旗、左旗は勿論、其の附近なる土默特、翁牛特右旗、左旗等の蒙古人は、殆んど同一狀態の生活を營み、其言語風俗の如きは大方支那化せられ、殊に男子に於て然るを見る。即ち其の風俗を見るに、頭は固より辮髮にして、衣服は足の下迄達する長きものを着し、稀に漢人の如き腰部迄の短かき衣服を用ふるものあれど、概して滿人風なり。帶は兵兒帶の如きを結び、その前部に喫煙草入の袋をさぐ。女子の風俗も亦、概ね滿洲風にして、頭には。リヤンバトー（兩把頭）と稱する髻を結び、衣服は足迄達する長き、廣き袖のものを用ひ、靴には種々の美麗なる繡を施し、其の足は大なり、要するに風俗は男女共滿洲人風なり。

家屋は、天幕の制全く廢れ、盡く支那風のものなり。金滿家は煉瓦にて建築し、富まざるものは、土を以て煉瓦の如き壁を造りて住居す。貧富共オンドルにて暖を取るの方法を用

生業

ふ。

この地方の生活狀態は既に牧畜の時代を過ぎ、今や全く農業の時代なり。即ち中流及び中流以下の蒙古人より見て、既に農業の時代に入れるが如し。

宗教

宗教は悉く喇嘛教徒にして、一般の佛教を信ずるものなく、喇嘛教の寺院は所々に見る可く、各家々より僧侶を出せり。

風俗の變遷

三、往時の喀喇沁

現今の喀喇沁附近は土俗學上、蒙古の研究としては、多大の風俗の變遷をなし、價値ありとも侭えず。然れども、遡りて清の高宗皇帝（百年前）の時には尚ほ天幕を用ひ、駱駝、馬、牛、羊等を飼養せる狀は、乾隆帝の此附近を行幸せられたる際の詩に見るも明かなり。

列帳沿岡道左迎。羊群馬駱各將滅。親瀋漿逮堪同例。外域羈縻豈近情。漫擬星辰環北極。也知稼穡望西成。百年化育皆光德。繼緒心殷惕捧盈。

此俚今や見るべからず。僅々一百年餘にして斯の如き變化を來せるなり。

言語

言語は、未だ土俗上の變化迄には至らず、尚盛んに蒙古語を用ふれども、蒙古語中に漢語の混ずる事頗る多く、兒童等の用ふる名詞の如きは、自らその蒙古語なるか支那語なるか、殆んど判別に苦しむが如きを、往々にして聞く。又支那語より變化して、蒙古語となれるが如きも多く、例へば蒙古語にて花の事を、ホワラーと稱するは、支那語のホワーより轉化したるものにして、斯の如き例頗る多し。

漢人と蒙古人との關係

現今、喀喇沁附近に居住する支那人の數多しと雖、蒙古人は支那人と居を共にせず、蒙古人は蒙古人のみ相集まり、支那人は支那人の部落をなす。抑も此の地方に、支那人の入り始めたるは乾隆年間前後にして、今は蒙古の王に少額の租稅を納めて居住し、蒙古人の手にては如何ともすべからざる狀態にあり。

喀喇沁附近は昔時爰民族の盛んに居住せる土地なるが、遼の聖宗の時全く之を征服し、喀喇沁右旗の東方に始めて中京を建設せり。中京の地位は老哈河の上流地にして、喀喇沁より約二三日行程計り東方に在り。今尚ほ土城を存じ、其の中には古塔等の殘るあり。以上の關係上、この附近同時代の一小土城各地に存在す。

喀喇沁の西伯河畔には、最も舊き有史以前即ち石器時代の遺物も存在す、こは東胡民族の手になりしものならん。而して此處の石器の特色は石庖丁にあり。

最も古き昔は、この邊一體に樹木蓊蔚尚ほ暗き所にして、現今の王府は樹木を伐りつゝ遂に東方より茲に移り來りしと云ふ。

喀喇沁王府を辭し赤峰に越年す

四、喀喇心を去り赤峰に越年す

この時は既に約束の年限を經過せる後なれば、余等夫妻及幼兒の三人は客分として王府に滯在しつゝありしが、四十年十二月下旬、愈々王府を辭することゝなり、余等は蒙古語の教師を伴ひて出發し、西伯河に沿ひて赤峰に出て此處に越年せり。

公爺府

喀喇沁王府より赤峰迄は百八十清里にして、道西伯河に沿ひ、喀喇沁を去る事約四五十清里。赤峰に至る中間に、公爺府と稱する處あり。戸數百、蒙古人も集まり、漢人の商賈も居住し稍見る可きの地なり。此の公爺府の山上に、龍泉寺と稱する廟あり、今は喇嘛廟となり、蒙古人の喇嘛僧之に居れども、元時代には龍泉寺と稱する寺にして盛なりし處なり。今も此の古寺には元時代の碑文も有り、山麓には一對の石獅子を存す。その本堂は山上十四五町の高所にあり。公爺府附近は、地形よく、且つ水も豐富なれば、昔時より開けたる事明かにして、地形上最も樞要の地なり。

龍泉寺

喀喇沁王府より公爺府に至る道は、谷間を行くと稱すべきものにして、公爺府より赤峰に至るにも亦然り。又此途中にに峠の横はるあり、此峠を越ゆれば即ち赤峰なり。

赤峰

五、赤峰及び其附近

赤峰の商業

赤峰は、西伯河と英金河との合する點にして、英金河畔に臨む。戸數二三千。悉く漢民族なり。此の地は、西翁牛特の領地にして、漢民族は現に、翁牛特衙門に租稅を納めつゝあり。今は知縣衙門あり。熱河以北の市街地として、最も商業殷盛なるものなり。地勢は、北方巴林、東翁牛特、敖漢等の蒙古地は勿論、其他、朝陽、平泉、熱河等に通ずるを以て、最も必要なる位地を占む。現今、興安嶺、漠河方面に於て、漢民族の有する大市街中、極北のものなり。

此地に住する漢民族は、主として直隸、山東、山西等の者なるが、其の始めて此の地に入り込みしは、乾隆年間前後の事に屬し、其の以前は總て蒙古人のみにして、天幕を張りて生活せる處なりしが、漢民族の侵入するに隨ひ、遂に斯の如き市街地を爲すに至れるなり。漢民族の始めて移住せるは、乾隆年間なりと言ふは、現に赤峰の關帝廟に存する、當時の碑文に據

りて明らかなり。

赤峰の主なる商業は穀物、毛皮類の集散なり。即ち其の附近に於て産出する大豆、高粱、其の他の穀物を集散するものにして、毛皮は蒙古内地より運ばる、尚又雑貨類の如きも一度赤峰を經て、更に附近住民の需要を充しつゝあり。

次に注意すべきは、石炭産出の事なり。赤峰を去る事、東方五十清里弱の地にして、盛に之を採掘し、日々馬背に依りて赤峰の市に運び、此處に販賣するを以て、此附近の燃料は概ね之を用ふ。

赤峰の名古

赤峰は將來有望なる地にして、近時日本及び歐羅巴風の警察制度を實施し、市街も漸次整頓しつゝあるものゝ如し。

赤峰の名稱は、元蒙古語を漢譯したるものにして、蒙古語にてはオーランハタと稱す。其の地形は四方圍らすに山を以てし、英金河前面を流る。其の南方には、大小の兩オボ山あり。又た河の北方に當りて赤色の岩山を見る、此れ即ちオーランハタにして、同地附近の目標たり。蓋し赤峰の名稱も、之れより出たるなり。斯の如く全く山間の凹地なれども、東の方河に沿ひて下り行けば、山間ながらも土地次第に濶く、平泉方面より流れ來る老哈河と、

ハラモトの樹林

英金河との合する附近より、更に老哈河に沿ひて下り行けば、土地益々廣し。

此の附近往時は山上其他に樹木多かりしも、今は殆んど禿山にて、唯だ河流の附近に於て柳、楡等を見るのみ。昔時樹木多かりし名殘として見る可きは、赤峰の東、百二三十清里を距つる英金河と老哈河との合するハラモトと稱する處なり。此處には今も尚ほ樹木鬱蒼として繁茂し、人家は樹木の間にあるが如き有樣なれば、附近一帯の樹木無き地に比して、奇異の感を生ずる位なるが、昔時此附近に樹木多かりしを證す可し。ハラモトなる名稱は蒙古語にして、ハラは黑を意味しモトは木の事なり。即ち樹木多くして尚ほ暗きを以つて、ハラモトと稱したるなり。然るに一帯禿山のみとなり樹木乏しければ、住民等燃料無きに困しみ、止むを得ず高粱を用ふ。石炭を用ふるに至れるは近來の事にして、昔時は之れ無かりしなり。高粱は頗る便利なるものにして、即ち秋期其の實を收獲したる後、幹は薪として需要せらるゝなり。此の高粱の薪を以て、此の附近の住民は一ヶ年を支ふるなり。又た野生の雜草中燃料に適するもの二三種あり。住民は落葉掻きの如きものにて之れを掻き集め、以て燃料に供す。赤峰以外の農家は今尚ほ此の燃料を用ふ。此外馬糞も亦燃料に供せられ、即ち彼等は馬の過ぎたる後を追ひつゝ、其の糞を集むるに忙はしく歩き居るもおかし。

赤峰地方の燃料

生活狀態及び風俗

生活狀態は、赤峰市街以外の地方にては、住民等は悉く百姓にして、農を以つて生業とす。赤峰附近の蒙古人は西翁牛特の民なるが、既に支那化せられ、其の風俗習慣等の如きは喀喇沁と全く同樣なり。殊に其の性質の如きも漢人風にして、純粹なる蒙古人の質朴なる風は見るべからず。

考古學上の遺跡

六、英金河畔の遺跡

此處には吾等にとりて興味ある研究多かりき、即ち英金河畔に於ける考古學上の遺跡之なり。喀喇沁の條に於て記したる如く、英金河畔にも亦最も古き時代の民族の遺跡あり。斯の遺跡は、河に接したる小高き處に必ず存すと言ふも不可なく、其の遺物の種類は石斧、石鏃、石包丁及び土器の類にして、其何民族の遺したる者なるかは、人種學上最も興味ある研究にして、之等は東胡民族の手になりし事は明かなり。其他彼等の遺跡の中には砦趾の如きものあり、其の形恰も北海道、千島等のアイヌの作れるチャシコッの如し。これに困て見るも赤峰附近、殊に黃金河畔は、古きアボリジンスの住居せし所たるや明かなりとす。又た更に降りて遼、金、元等の遺跡も多く、遼時代の土城の如き、余等の見たるものゝみにても數ヶ所あり。何れも尙ほ其の土壁等を存し、內部には瓦、磚、陶器、磁器、古錢等殘れり、又建築物の跡等も存するを見たるが、之等の遺物、遺跡は歷史上最も注意すべき事ならん。

余等は赤峰滯在中、蒙古語を研究する傍ら、赤峰を中心として、其附近の地に付き種々の調査に從ひ、斯くして四十一年二月頃迄滯在せり。

余等の赤峰滯在中、特に記すべきは、彼の老哈河上流、遼の中京を訪へる事なり、こは學問上最も價値あるものと信ずれば、左にこれに就て記する所あらんとす。

一面の銀世界

第三　遼の中京を訪ふ

一、赤峰より喀喇沁王府に到る

一月二十一日、余は豫てより、一度遼の中京の遺跡を訪ひて、之が調査を遂げんと思ひ居りしも、諸種の調査に忙しくして、未だ其の期を得ざりしが、朔北旅行に出發するも一箇月の後に迫りしかば、今の中に之が調査を爲さゞる可からずとて、余等の蒙古語の敎師なるボンスク及び赤峰縣の馬勇一名を伴ひ、余の妻子は宿舍に殘し置きて、愈々調査の途に上る事とせり。

朝早く起き出て見れば、前日來の雪は地上に積りて恰かも白妙の布を敷けるが如し。余及

びボンスクは馬車に乗り、馬勇は騎馬にて午前七時出發す。今日は晴天なるも、寒さ猶堪え難きものあり。

シバ河

赤峰の町を出でたるは、店舗の漸く戸を開かんとする頃なりき。町を出でゝよりは、積雪を蹈み、南西に向ひて進む事十清里許りにして始めてシバ河々畔に達せり。常には水量非常に多き河なるも、今日は全く結氷して流を見ず。此の河の氷は二月半頃より釋け初むると云ふ。

新地

喀喇沁と翁牛特との境界

楊家營子

勇ましき蒙古人

余等は河を渡り、其の右岸に沿ひて進みしが、道漸く山と山との谷間に入る、行く事更に十清里にして新地に達せり。此の地は漢人蒙古人雜居の村落にして、又た喀喇沁と翁牛特との境に位す。即ち此より北は西翁牛特王の管轄にして、之より南は西喀喇沁王の領地なり。新地を出てゝよりは猶も谷間の道を傳ひ、二十清里にして楊家營子に達し、此處に下車中食せり、時に午後十二時過なりき。

楊家營子を出で、更にシバ河を左にして進みしが、河と道とは遠く隔りて道よりは河流を見るを得ず。暫らくして復た山間の道に入る。途中東翁牛特の蒙古人六名計り、各々馬に跨り、此方に向ひて勇ましく走り來るに會す。彼等は又た別に一頭づゝの換馬を牽き居れるが、之れ乘馬疲るれば之に乘り換へんとの用意にして、自ら換馬の手綱を執るあり、或は其の前方を走らしむるあり、以て蒙古人の勇ましき風習の一端を知る可し。彼等は本日早朝喀喇沁王府附近を出發せるものなるが、今夜は赤峰に一泊し、明日は赤峰を出發して烏丹城に到らんと言ひ居れり。即ち彼等は、余等の二日行程を一日にて驅くるなり。又た途上、木炭木材等を車に載せて、南より赤峰に向ふ蒙古人と會へるが、此木材はシバ河上流より伐り出すものなりと。之等に見るもシバ河上流地に樹木多く、以て赤峰一帶の地に供給し居るを知らん。

蒙古人の快速力

シバ河上流に樹木多し

東札噜特人の風俗

余等一行は尙も進み行く中に、東札噜特の蒙古人二十人許の各々駱駝に乘りて進み來たるに會せり。彼等は何れも蒙古風の裝立をなし、卽ち頭には毛の帽子を戴き、身には蒙古服を纏ひ、小刀を帶び、長靴を穿てる等、此の附近の蒙古人とは全く其の趣を異にせり。同行のボンクス彼等に對してモンドーと呼びたるに、彼等亦駱駝の上よりモンドーと答へぬ。彼等は其荷物をも駱駝に着け居れるが、之を注意するに、主として鐵爐、鐵鍋、木箱等蒙古人の生活に必要なる器具なりき。殊に余の最も驚けるは彼等の駱駝を御するの巧なる事なり。

白塔西溝

楊家營子より三十清里にして白塔西溝に達す、西方一小塔を見る。更に十清里にしてルイン

小嶺子

トロガイハタに到着せり。此處は此の附近に於ける峠にして、巖石より成れり。ポンスクの書に據れば、此處は康熙帝の時に開鑿せられたるものにして、其の以前は此の東方を流るゝシバ河沿岸を歩めるものなりと。漢人は開鑿後、此處を小嶺子と命名せり。

木匠營子

小嶺子を下り、五清里にして木匠營子に達せる時は、日も西山に呑かんとしつゝありしかば、即ち此處に一泊するに決せり。此の村には大なる旅舍二軒ありしが、余等は其の一に入れり。本日の行程は八十清里許。途上の積雪は赤峰方面より進むに隨ひて其の量少きが如し。

一月二十二日、午前五時頃木匠營子の客舍を出發す。天空高く澄れる月光、地上の積雪を照らして物凄し。

道は等しく河に沿へる山道なるが、途上相會ふものは、南方より來れる牛車馬車の類のみ。道山間なるに加へて、未だ朝早き頃なれば寒氣頗る酷し、余は車中に在りて羊毛服を着し、尚ほ其上に裏毛のマントを被りしかば、身體は僅かに寒氣を防ぎ得たるも、顏面部殊に鼻の

慄く可き寒氣

寒きには大に閉口せり。口鼻より吐き出す息は忽ち凍りてうるさき事限りなし。然れども山間の雪景色は頗る美しく、又た一入の眺めなりき。

シバ河を幾度か渡りて行を續く、人家未だ眠より覺めず、鷄犬の聲も絶えて天地全く寂々たり。二十清里計り進み、太陽漸く出てんとし、東天紅なる頃公爺府に達せり。此の時民家漸く起き出て、彼方此方に竈の煙の立ち昇るを見たり。朝北の地にて朝まだき炊煙の立ち昇るを見るは實に心地よきものなり。

公爺府

余等は新たに建てられたる客舍に入りしに、此の家の主人は余等を見て急ぎ起き出て、余等に挨拶し又た種々の談話をなせり。彼は四十近き男にして學者らしき風あり、近き頃官吏登用試驗に及第せしものと見え、其の事を筆太に記して家の表に貼り付け居れり。

龍泉寺

余は此處にて朝餐をとり、猶ほ今日は時間に餘裕もあれば、此の附近なる龍泉寺を訪はんと、車に乘りて此の家を出づ。こは蒙古人の喇嘛寺にして、余は曾て二三回も之を訪へる事あり、其の麓より寺の在る處迄は十五町も上らざる可からず。此の寺は元朝の建立に係り當時の碑文等をも存せり。余は之等の調査を了りて下山し、直ちに本日の行を續く。

シバ河は此の邊屈曲最も甚しく、遙かに赤峯の方に向つて流れ去るを望めば景色最も佳なり。此處を出てし處にて、久し振りに兩把頭を結へる蒙古婦人を見しが、彼等は寒む相に其兩袖を搔き合はせ居れり。又た道端に大なる喇嘛廟あり、僧侶二十人位居ると云ふ。

之れよりは道漸く廣し、即ち左右に山を控へたるシバ河畔の平地なり。途上漢人の手に成

れる「泰山石敢當」の建ち居るあり、又た處々に樹木の殘れるあり、蒙古人漢人の家屋亦彼方此方に見ゆ。斯くして午後七時頃、喀喇沁王府附近に達せしが、日は既に沒したる後なりき。本日の行程七十清里許。

喀喇沁王府附近

蒙古語の教師の宅に入る

余は此處にてはボンスクの家に一泊する事となり居りしかば、即ち其の家に案内せらる、然るに家人は豫め余の到着を知り歡待大に努めたり。余は此處に達する前、喀喇沁王の伯父君に見へ、種々の談話を交へたる後ち其の邸を辭せり。

喀喇沁王の伯父君に見ゆ

一月二十三日、滯在。種々の調査に從ふ。

喀喇沁の士族町

此の附近は喀喇沁王府の役人の住居にして、恰かも日本の士族町の如し。余の滯在を聞きて、蒙古人の知己多く訪れ來れり。此の時、喀喇沁王及び王妃は、北京に行きたる留守なりしかば、余は王府へは立ち寄らざりき。

王府の歴史的變遷

此の地今は王府の所在地として、蒙古人の住居も多けれど、彼等のシバ河下流より此の地方に入り込めるは、極めて近き時代に屬せり。蒙古人等の語る處に據れば、古き時代にはクキルと稱する民族、此の地に住み居りしが、今は何地へ去りしや全く其の影を留めず、而も彼等の遺せる物は、時々土中より掘り出さるゝ事ありと。

クキル民族の遺物

此の家の飯焚釜も凡そ百年前、家の傍なる山の麓、アヂルガと稱する處より掘り出したるものゝ由なるが、鐵製のものにして、上部の周圍四尺五寸、深さ七寸、底になるに隨ひて窄まり、其底は尖れり、又た其の緣には六個の突起あるを見る。之等によりて考ふるも、古き時代より此の地に住民ありしを知る可し。

喀喇沁の回憶

二、石虎の遺跡を調査す

一月二十四日。午前十時出發す。發するに臨みボンスクは、其の老母及び妻君と頻りに訣れを惜めり。

此の家を出で、王府の前を通過し、再びシバ河流域に沿ひて進む。此の道は余の屢々往來せるものなりしが、當時青々たりし楡の葉は、今や悉く凋落し、坐ろ感慨に堪えざりき。途上の光景は滿目たゞ銀世界にして、蒙古人漢人の家屋處々に在るのみ。此の時道漸く爪先上りとなり來れり。

王府を距る凡二十清里許りの處より、樹木俄かに多くなりしが、ボンスクの言に據れば、往時は樹木一層多かりしと、之等は多く楡及び柳の一種なるホンダルと云へるものなるが、

又た高き處には松樹の生ゆるあり。二十清里にして上瓦房に達す、時に一蒙古婦人と道に遇へるが、此はボンスクの親戚なりと見え、互に懐しげに語を交し、婦人は頻りにボンスクの家の事等を尋ね居れり。更に幾多の村落と疎々たる林とを過ぎ、又た凍れる河を幾度か渡りたる後ち王爺店に到着し、直ちに下車して一客舍に投ぜり。時に午後四時。

王爺府

王爺店の位置は、王府を距る五十清里にして、又た此の附近の分水嶺たる毛金嶺（モチンレー）迄は三十清里の處に在り、戸數一百、稅關の設もあり。町の周圍には壁を廻らし、民家は其の中に存在す。余等の入れる客舍には、又た巴林（バリン）の蒙古人も五六人宿泊し居りしかば、余は竊かに其の爲す處を注意せしに、彼等は宿屋よりは唯茶を貰ひ、彼等は各々携帶せる袋の中よりモンゴルアムを取り出し、之を携帶の木の椀に盛り、之に茶を掛けて飲むのみ。此の簡單なる食事の後ち、彼等は相集まり而白く語り合ひて興じ居れり。此の地の漢人は巴林地方の蒙古人を輕蔑する事甚しく、彼等より多額の金錢を貪りて、而も待遇最も疎略なり。

巴林人の旅行

余等本日の行程は五十清里許り、道はシバ河の流域なり。此の附近は喀喇沁中にても樹木最も多き處なれば、途中炭燒場の設けあるを見たり、而して之等の處にて燒ける炭は多く赤峯へ送らるゝなり。又た途中麻の油を馬に積み、河下方面より來るものに多く會へるが、此麻油製造の最も盛なる赤峯より熱河方面に赴くなり。又た此の附近より材木を多く出すを以て、途上之を積み行く車とも會へり。又た途中駱駝に乘りて旅行する蒙古人と三度會へるが、即ち阿嚕爾沁人二人、東翁牛特人二人、巴林二人等にて、彼等は何れも北京より歸り來れるなり。

毛金嶺一帶の山脈を越ゆ

一月二十五日。 前夜は溫床の火餘りに强かりし爲め却て閉口せり。同宿の巴林人等は朝三時より起き出で、外に繫ぎ置ける駱駝馬等に秣を與へたる後ち家に入り、例の蒙古黍の茶を飲み、四時出發せり。余等も彼等に續いて起き出でたるを以て、旅裝を整へしかど、夜の明るを暫らく待ち、五時過此家を出發せり。而も月尙ほ山の端に懸り居りしが、間も無く夜はほの〳〵と明け初めたり。

等しくシバ河に沿ひ西南方に向ひて進む。此の道は毛金嶺に到るものなれば、余等は十清里計り進める處より方向を轉じ、毛金嶺に續ける左方の山路に向つて進めり。道は次第に高く、雪の山路を東南の間に向ひて進む。途中點々たる家屋と處々の樹木とを見るのみ、四圍の景漸く深山に入るの感を生ぜしむ。五清里計りにして山巔に達せしが、此處には山神を祭れる祠あり。山巔に立ちて過ぎ來し方を顧るに、山又山の重疊するを見る、東南方亦然り。此

廟前營子

家屋の構造

鬱蒼なる森林

の峰は附近にて最も高きものなるは、四顧の山々悉く其の眼下に在るを見ても明かなり。

余等は更に峠を下り始めたるが、此の道は先に上り來れる側より遙かに急にて、途中の水凍り、車を行るに危險にして、余等の車、馬も屢々轉べり。此の間處々に人家を見る。下る事二十清里計り午前十一時頃初めて廟前營子に達す。此處には山神の廟あり、而して人家は其の前にあるを以て、此の名を得たるものならん。ボンスク幼かりし頃、父に伴はれて此の地に來れるを語る。當時此處には一軒の人家も無く、全く淋しき森林なりしと。余又た此の地の古老に尋ねたるに、此處に人家の建てるは十年前よりにして、今は漢人の家四十戸ありと答へたり。唯だ此の山神廟は古くより此處に在りたるもの〻如く、即ちボンスクの幼時既に此處に在りしを記憶すと。

此の地一帶は樹木非常に多きを以て、此の附近の家屋は、門と無く垣となく、多くは木にて作り、又た其の屋上には風除けの千木を置き、門には日本の鳥居の如きものを造り頗る興趣あり。之等は彼の鴨綠江上流、森林地住民の家屋に似たれども、此の地には蒙古人一人も無く悉く漢人なり。而して此の邊の樹木は低地に見ざる松、樺等多し。宋時代に契丹の中京を訪へる漢人の紀行文にも、樹木非常に多く、家、垣、門等總て木もて造るを記し居れるが、今親しく此の地に來り、當時の記述の眞なるを知れり。殊に今を去る事遠き遼の當時に於ては、樹木一層多かりしを想像せしむ。

喀喇沁の富源

黑里河

三塊留周

漢人の侵入蒙古人を驅逐す

喀喇沁の富は此の山林にあり、而も濫伐して植付を爲さずんば、忽にして禿山たるに到らん。此の附近に於て其の傾向を示すものあるに於ておや、之れ大に注意を要する事なり。

余等は廟前營子にて中食せる後ち更に行を續け、黑里河に沿ひて下る事となれり、此の河は此の山脈に源を發し、南々東に流るゝ事一百清里にして、老哈河に注ぐものなるが。今は河水結氷し居れり。余等河を左にして谷間の道を歩み、幾多の村落を經過し、三十五清里計りにして、午後五時頃三塊留周に達す。今夜は此處に一泊する事となれり。

此の村は黑里河の右岸に位し、戸數五十計りあり。河の左岸は巖石屹立し、又た河に臨みて樹木多く風景絶佳なり。此の附近にて黑里河は唯一の便利をなし居るを以て、之に沿ひて村落多く、殊に此の村の如きは附近に於ける樞要の地をなし、日用品の如きは概ね此の地にて整ふるを得べし。此處に漢人の移住し來れるは、今より一百年計り以前の事なるが、蒙古人は現今此の地より東方三十清里なる偬偬鋪、東方六十清里の頭道營子及び東方七十清里の二道營子等に居住すと云ふ。

廟前營子

家屋の構造

鬱蒼なる森林

の峰は附近にて最も高きものなるは、四顧の山々悉く其の眼下に在るを見ても明かなり。

余等は更に峠を下り始めたるが、此の道は先に上り來れる側より遙かに急にて、途中の水凍り、車を行るに危險にして、余等の車、馬も屢々轉べり。此の間處々に人家を見る。下る事二十清里計り午前十一時頃初めて廟前營子に達す。此處には山神の廟あり、而して人家は其の前にあるを以て、此の名を得たるものならん。ボンスク幼かりし頃、父に伴はれて此の地に來れるを語る。當時此處には一軒の人家も無く、全く淋しき森林なりしと。余又た此の地の古老に尋ねたるに、此處に人家の建てるは十年前よりにして、今は漢人の家四十戸ありと答へたり。唯だ此の山神廟は古くより此處に在りたるもの〻如く、即ちボンスクの幼時既に此處に在りしを記憶すと。

此の地一帶は樹木非常に多きを以て、此の附近の家屋は、門と無く垣となく、多くは木にて作り、又た其の屋上には風除けの千木を置き、門には日本の鳥居の如きものを造り頗る興趣あり。之等は彼の鴨綠江上流、森林地住民の家屋に似たれども、此の地には蒙古人一人も無く悉く漢人なり。而して此の邊の樹木は低地に見ざる松、樺等多し。宋時代に契丹の中京を訪へる漢人の紀行文にも、樹木非常に多く、家、垣、門等總て木もて造るを記し居れる

喀喇沁の財源

黑里河

三塊留周

漢人の侵入蒙古人を驅逐す

が、今親しく此の地に來り、當時の記述の眞なるを知れり。殊に今を去る事遠き遼の當時に於ては、樹木一層多かりしを想像せしむ。

喀喇沁の富は此の山林にあり、而も濫伐して植付を爲さずんば、忽にして禿山たるに到らん。此の附近に於て其の傾向を示すものあるに於ておや、之れ大に注意を要する事なり。

余等は廟前營子にて中食せる後ち更に行を續け、黑里河に沿ひて下る事となれり、此の河は此の山脈に源を發し、南々東に流るゝ事一百清里にして、老哈河に注ぐものなるが。今は河水結氷し居れり。余等河を左にして谷間の道を歩み、幾多の村落を經過し、三十五清里計りにして、午後五時頃三塊留周に達す。今夜は此處に一泊する事となれり。

此の村は黑里河の右岸に位し、戸數五十計りあり。河の左岸は岩石屹立し、又た河に臨みて樹木多く風景絶佳なり。此の附近にて黑里河は唯一の便利をなし居るを以て、之に沿ひて村落多く、殊に此の村の如きは附近に於ける樞要の地をなし、日用品の如きは概ね此の地に整ふるを得べし。此處に漢人の移住し來れるは、今より一百年計り以前の事なるが、蒙古人は現今此の地より東方三十清里なる偷偷鋪、東方六十清里の頭道營子及び東方七十清里の二道營子等に居住すと云ふ。

石虎の遺跡に向ふ

余の此處を訪へるは、此の附近なる石虎と稱する地に存する石人を見んが爲なり。喀喇沁王も竹て石人を見んとて石虎に趣けるを語れり。即ち余等は明日石虎を訪はんとするに、道事を行るに適せざれば、騎馬にて行かんとて、馬を求めたるに村民敢て應ぜず、余止む無く護照及び名刺を取り出し、彼等に示したるに初めて承諾せり。此の夜即ち馬二頭馬夫一人を雇ひ、明日出發の準備を爲せり。

今日經過し來れる道は、毛金嶺一帶の山脈を越えたる後ち、老哈河に注ぐ可き黑里河を下れるものにして、行程合計七十清里許。

八道子嶺

一月二十六日、石虎迄の距離非常に遠しとの事なりしかば、前夜の中に馬二頭及び馬夫一人を雇ひて余等の旅宿に泊らしめたるが、今日は愈々石人調査に向はんと、雞鳴曉を告ぐる頃より起き出て、旅裝を整へ、余及びボンスクは馬に跨り、午前六時宿舍を出發す、馬勇及び案内者の馬夫隨行せり。

黑里河に注ぐ溝道子溝に沿ひて進む中に道漸く上りとなれり、人家兩三戸許りなる貧村を經過する事七八、十五清里にして坂路の頂上八道子嶺に達せり。一小山神廟あり。此の峠に立ちて南北の方を眺むれば、群山相疊して眼下に展開するを見る。余等更に南に向ひて峠を下りしが、道急にして馬最も困しめり。五清里許りにして一老爺廟の前に出づ、此處に一溪流南に向ひて走るあり、之れ八道子嶺に源を發するものにして、暖河と稱するものなり。余等更に此の河に沿ひて下る事となれり。初めは全く結氷し居りて水無かりしが、漸く下るに隨ひては氷の下に流水あるを見、又た河幅も漸く廣く、山の景色と相對して凄絶なる眺めを呈せり。

暖河

峠を下りてよりは岩石露出し、殊に其上に松樹の生ゆるなど面白し。途上樺松柏等の樹木多く、木炭を燒き居る家も二三戸あり、而も此の邊の木炭は、燒き方惡き爲め燻る事甚し。又た此の附近には木多ければ、住民木を焚く事非常に奢澤にして、赤峰の如き木の不自由なる處より來れる余等には、一層其の感を深からしめぬ。老爺廟より廿五清里にして石虎に達す。

樹木多し

時に午前十一時頃なりしが、余等は直ちに馬を降りて調査を始めたり。

石虎の地勢

石虎は今は人家三四戸に過ぎざる小村にして、其地勢は全く山の間に包まれ居れり。即ち少しく打ち開けたる北方には、岩石露出せる石虎山の聳ゆるあり。南方及び其の前方の山と共に石虎の四周を圍み、暖河は其の南方の山麓に沿ひて流れ居るなり。而も之等諸山嶽の間は平坦なる地にして、其處に石人等を存し居るなり。

石虎遺物の調査

此の地に存する石造遺物は石人、石虎、石羊の三種にして石馬、石獅子等は之を見ず。石人石虎は相並びて存在せり。石人は首の土中より現はれ居るもの、首無く體部のみ現はれ居るもの、袖の處の壞れ居るもの、首は打ち落され體部のみ依然直立し居るもの、各一個づゝあり。之等は何れも衣冠束帶して笏を持てり。而して其の容貌は眉濃く髭あり、頭には頭巾の如きものを冠り居れり。石虎は現に存するもの七個計りあり、形式皆同一にして、即ち其の前足を立て後足は座れるものなり。而して之等の中には、全身地上に現はるゝもあり。或は首のみ地上に出て居るもあり。石羊は四個にして何れも地上に在り。之等石羊の彫刻中其の角の非常に曲線なるは注意を要する點なり。而して之等の存在する有樣は一列には石虎、一列には石羊と互に相對せり。

石塚

又石羊石虎の完全に並び立てる者の、後方二十五歩計りの處に、高さ十尺周圍六十歩計りの石塚（ケイヅカ）を存し居れるが、其の傍に礎の如き趾もあり。石人の破片等も散亂せり。昔此處に殿堂等の建てられたる者と思はる。又た礎石には花瓣形の彫刻をなし居れり。之等礎石に據りて考ふるに、此處には四本の柱を建てありしが如くなるが、兎に角研究の價値ある者なり。又た石塚の處より山に接して一段小高くなれる處あり、此處にも何等かの建築ありしが如し。

石虎の遺跡と遼の中京との關係

此等の遺跡に就ては、此處の村人に何等の口碑も無く、且つ雪の降り居る際なれば、資料となる可きものも得る能はざりき。ボンスクは之等は唐時代の遺物なりと語れるも、余の考を以てすれば遼時代のものならん。何となれば、此の地を流るゝ暖河は、之より五十清里、八里汗點子に到りて、老哈河に注ぐものにして、此處より河に沿ひて進む事一百八十清里にて遼の中京に達するを以てなり。即ち之等石人石虎等は遼の中京と深き關係を有するものなるを思はしむ。之等は考古學上、史學上、最も注意すべき事に屬す。

福壽溝

余等は種々の調査を爲せる後ち、午後二時頃此の地を去り、元の道を歸る事五清里にして福壽溝に達し、此處に初めて朝餐を喫する事とせり。此の地は農家十五六戸計りに過ぎざる山間の僻村にして、別に往來にも當り居らず、余の如き殊更に石虎を見物に來るものに非れば、要も無き地なるを以て飲食店も無し。余等即ち一民家に入りて食を求めたるも、之亦頗る不自由なる處なれば、僅かに蕎麥粉の餅を扁平にして燒けるものと、米の粉に湯を掛けたるものを持ち來れるのみなりし。

食事後馬を駈けて元の道を歸りしに、老爺廟にて日既に沒し、峙に差しかゝれる時には全く闇を迎るの有樣なり。之より道は愈々暗く、寒氣亦襲ひ來り大に困難せり。午後七時頃漸

夜道を辿りて三塊留周に歸る

く三塊留周の客舍に歸れり。

余は非常に疲れたるも、今日調査せる石虎の研究等を清書なし、午後十一頃漸く寢に就けり。

黑里河の奇巖

一月二十七日。 午前七時出發、全く黑里河畔を傳ひ行く。黑里河の兩岸は恰かも山を下より見上るが如き巖石屹立し傾斜亦急なり。河床亦此の附近に於ては、最も深く喰ひ込み居れり。殊に土壤少しも無く、殆んど巖骨を露出せる上に松樹の生ゆる等、曾て旅行せる四川省蜀の風景を回想するを禁ぜざりき。之等に見るも、此の地の老哈河上流地方なるを知る可し。

蜀中の風光を想ばしむ

余等は屢々河の氷上を渡り、或は河を右にし或は之を左にして進みしが、途上相會するは、馬に荷を積み行く馬夫等のみ。二十清里にして西泉に達す、此の地には人家二十四五戸あり。今日は昨日に比して大に暖し。

黑里河の蒙古名

抑も黑里河の名は、蒙古語のヘルフより來れるものゝ如し。即ちヘルフとはハザマの意味にして、此河の兩岸高く聳え河水其のハザマを流るゝより、蒙古人等は斯く名けたるなり。

西泉

三塊留周より西泉迄は、全く石ころ路なりしが、西泉より二三清里にして、平坦なる道に出づ、此の邊は畑も能く耕され居れり。而も少時にして再び石ころ路に出て、行く事三十

金銘堡

清里、午前十一時半頃金銘堡に達せり。此處には人家十七戸計りあり。余等は一民家に入りて、中食しつゝありしに、二人の蒙古人亦此の家に入り來れり。彼等は此處より東方十五清里計りの地に住むものなりと言へり。

漢蒙雜居の村落五家子

中食後此處を出發し、東方に向ひて進む、暫らくして石ころ路も盡き、平坦なる土地に出て道亦漸く廣くなり來り、左右の山は次第に遠ざかりしが、此の時右方遙かに高峰の延長するを望む、之昨日峠の上より東方に最も遠く望みし山ならん。十五清里計りにして一村落に入れり。此地は漢蒙人の雜居にして、漢人は村の東に、蒙古人は西部に住めり。蒙古人の家は二十四戸にして何れも門構の建築なり。其等の家の門口には喇嘛僧等の出で居れるあり、又た或家よりは、卅四五歳計りの妻君正月の晶物を手にして出て來れるを見たり。此の村を五家子と稱するは、往時は人家五戸なりしに起れるならん。又た漢人の部落は四五十戸許りの、一筋町にして一小市街をなし、其の家の軒には樹木を植ゑ。此の村端れにて見たる別莊樣の大なる家には其周圍に砦を築き、其の門内には多くの木を植ゑ居れり。

春近づけり

此の村を五六町隔りたる右方の山麓に一喇嘛廟あり、此の廟の後ろなる山に登れば、幽かに遼の中京の塔を望み得べしとボンスクは語れり。此の邊土地廣く風景極めて佳し。之れよ

中京一帶の平原

り山愈々遠ざかり、土地益々廣く、地は赤土色を呈せる平原となり來りしが、遂には山全く絶え、只左方丘陵の如きものを見るのみ、久し振りにて大陸に來れる心地せり。之れ遼の中京一帶の平原にして、老哈河本流の流域に入れるを證するものなり。

漢人の門松

今日は陰曆十二月二十四日にして正月も近ければ、此邊の漢人の家にては、各一本の木を高く門内に立て、其の上に松を縛り付けたるもの及び、途上松を購ひ行くもの等を見たるが、之れ日本の門松と何等かの關係あるものと思はる。此の地は山間の僻村なれども、正月近き爲め何と無く賑はしく、余等旅行者の眼にも恭近づけるを感ぜしむ。

八里汗點子

喇嘛廟より三十五清里にして、午後四時頃八里汗點子に到着し、此處に一泊する事となれり。本日の行程一百清里。

八里汗點子は黑里河と暖河と合流して老哈河に注ぐ所に當るを以て、住地頗る宜しく商業盛なり。市街は老哈河に臨みて存在し、戶數百五十許りあり、今日しも此の地に市立ち、正月の賣り物をなし居れば、人出最も多かりき。

一月二十八日、午前七時半出發。老哈河に沿ひ東方に向つて進む。此の邊の老哈河は幅最も廣く水亦多し。道は凸凹無き赤土色の平原なるが、途中經過せる村落は人家集合し、蒙古人の雜居し居るあり。即ち札藍營子には五戶、石頭老爺廟には十戶計りの蒙古人あり、其の他三關營子にも住居せり。彼等は斯く漢人と雜居し居るも、其の村の入口にはオボを作り居り、殊に石頭老爺廟には喇嘛廟あり。

蒙古人の村には必ずオボあり

家屋の構造一變す

又た三關營子附近より、漢人の家屋の構造形式一變せるを見る。即ち之より以後は全く草葺の屋根を見ず、恰かも汽車の屋根の如き形をなせるものにして、其の上に泥を塗りたるものとなり來れり。此は南滿洲等に於ても多く見る處なるが、之迄余等の經過し來れる地には曾て之れ無かりしなり。八里汗點子より四十清里計りにして石頭老廟に達し、此處に下車して中食を取れり。

石頭老爺廟

ガールス營子

中京の高塔を望む

石頭老爺廟には土地愈々大陸的となり、途中經過する村落も大村となり來れり、五清里にしてガールス營子に達す、此處に到り前方初めて中京高塔の頭形を認む。此處よりは土地愈々廣く、十五清里計りにして漸く遼の中京に達せり。

遼の中京

白塔子

遼の中京は蒙古名チャガンサバラガと云ふ、即ち白塔の義なり。蓋し此處に存する塔の白きを以てなり。漢人は又た此處の地名を白塔子と稱し居れり。

中京の位置

古城は老哈河に臨みて存在し、城壁より河迄は三清里にして、又老哈河より山麓迄の距離

古城の築造狀態

も三清里あり。城は正方形にして正しく東西南北に面せり。城壁は土を煉瓦の如く作りて積み上げたるものなるが、其の南壁は老哈河に面し、流を挾みて紅廟山と相對す。其の間六清里なり。東壁と其の東方雙馬山とは二十清里を距つ、北壁は十五清里を距てゝ首頭山と相對し、西壁は五官營子山に面せり。而して城より之等四圍の山に到る間は全く平地なり。以て中京の地の如何に廣き平原なるかを知るに足らん。土人の言に據れば、南方紅廟山上には七個の燧臺ありと、又た城の西南隅に近く小丘陵あり、城壁は殆んと之に接せり。

城壁は土城にして、即ち土を磚の如くし積み重ね、高さ一丈八尺、壁の厚さ今日にて五尺餘、而して城の一面十清里宛、即ち周邊四十清里、城の外に濠の跡あり、城内は三部に區劃せらるが如し。

城内の調査

城内中央部に別に一城あり、中城と稱す、周回六清里。又後方即ち北部の區劃には北城、棺材城、花園城の三城あり、中城を挾み、其の東西には相對せる十三重の塔あり、又た南壁外の最西方にも壁に接して境れたる古塔を存す。(此古塔は巴林にある遼の行宮の古塔と同一形式なり)。此の城は明朝より以後全く用ひざりしかば、城内は今や高粱畑と化し、人家とては喇嘛僧の小舍の如き者二三あるのみ、畑の中に散亂する屋根瓦、陶器等に空しく往時榮華の

城内高粱畑となる

當年榮華の跡

名殘を留む。中城内には石獅子を存せる外、昔時宮殿の跡と思はるゝもの處々に殘れり。

古塔の研究

十三重塔の中、東方に存するものは高さ三十二丈、周廻三百二十尺と稱し、非常に大なるものなるが、今尚ほ完全に存し、殊に近頃喇嘛廟の保護せる關係上、赤、青等にて美しく彩色せられ居るも、西方のものは近頃彩色せし跡方なく昔の儘なり。西塔共に其の形式稍ゝ相似たるものにして、殊に其西塔の形式は、余の曾て滿洲柳木城にて見たるものに異ならず。塔の八面には各々中央に佛像を置き、其の上には各々飲食を佛に献げつゝ天人の飛ぶあり、又た佛の左右には、脇士を相配せり。又た佛の臺坐は、金剛力士の脊にて支へ上げ居る所にして、其の臺座の下には、音樂を奏し居る多くの菩薩を彫刻し、又た其の下には石獅子あり。

鐵匠營子

余等は此の城内に於て種々の調査を爲し、暮れ近き頃城外に出で鐵匠營子の村に入る。此の村は處々に散在せる、百戸許りの人家より成れるが、内四十戸計りは蒙古人の家屋なり。元より僻村の事なれば宿屋とても無し。余等即ち一民家に頼みて一泊する事とせしも、食物亦甚だ乏しく、百姓の食ふものにて一夜の饑を凌げり。此夜城内より得たる古錢を携へ來りて、余に購はん事を求むるもの非常に多かりしが、余は其の大部分を買ひ取れり。本日の行程八十清里。

城内に古錢多し

一月二十九日。 尚も中京の調査を爲さんとて、朝夙く起き出て城に到る。先づ其の東壁に上りて城内の有樣を見るに、城壁の長く走り居る樣殆んど眼界の達せざる程なり。余は此處にて種々の寫眞を撮影せる後ち、更らに城内に入りて、調査を試みたる後再び鐵匠營子に歸り、其より村内の石佛寺と云ふを訪ひ、此處に存する乾隆道光頃の碑文を見たり。

石佛寺

中京の創造

中京の歴史的價値

中京は遼の聖宗の時建てたるものにして、遼は此の時迄潢河流域に上京を置きしが、其勢力漸く南方に振ふに及び、此處に都を築きしにて、此の地は元、東胡の一派たる奚民族の王の居れる處なりしを、遼は之を征服せるなり。即ち遼の都は此の時潢河流域より、老哈河流域に遷されたるにて、此は遼史及び東胡民族發展史の上に於て、最も注意を要すべき處なり。

廣漠たる大平原

余は此の村の調査も了りしかば午後二時頃出發し、主として中京の東壁に沿ひ北方に向ひて進む。城の北壁を離れてよりは凸凹なき平原なりしが、十五清里にして初めて丘陵に會せり。余等は之を左に眺めつゝ尚も北に向ひて進む程に、丘陵全く盡き、再び大平原に出でしが、實に廣漠たるものにして、地平線の何處にあるかを知らざる位なり。此の道より山迄東方は二十清里にして、西は昨日通過せし如く、南方亦八清里計りもあらん。斯る平原は多く其の比を見ず、北京附近にも比較するを得べし。爰に於て余は遼の中京の地の廣濶なるを一層深く感ぜり。

白塔子

地形斯の如くなれば、此の遼村落の各々群を爲して、存在し居る樣全く大陸的なるが、此の地勢は昨日通過せる、八里汗點子附近より起り居るものゝ如し。途中樹木を見ず、唯だ村落附近に柳樹を植ゑ居るを見るのみ、此の地方の家屋も亦氣車屋根的のものなり。土地は概ね畑にして能く耕され居るを見る、今は總ての收穫を終り、畑には何物をも認め得ざれども、夏秋の交には、高粱粟等を一面に植ゑ居るを見るなり。

高粱を燃料とす

古城を出でゝよりは、泊る可き處も無かりしが、五十清里にして漸く白塔子に達し、此處に一泊する事とせり。白塔子は戸數五十計り、客舍の大なるもありしが、廣漠たる平原中の孤村なれば、冬枯の景色と相對し、一種物淋しき感を起せり。此の村内には二十戸計りの蒙古人ありと。

此の地方には樹木全く無ければ、高粱を焚きて炭となし、之にて暖を取り又物を煑る、其の不自由言ふ計りなし。前日通過せる山中にては、惜しげも無く木を焚き居りしに、今此の地に於ては木炭の代りに高粱を焚く、以て兩者生活狀態の異なるを知るべし。

余等は前日の八里汗點子を出でゝより今日迄は、主として老哈河に沿ひて歩めるものにし

て、此の地も亦老哈河流域の中なれども、河迄は五十清里を距たれり。

四　赤峰に還る

一月三十日。午前七時出發。昨夜は非常に寒かりしかば、雪にても降るならんと思ひ居りしに、幸に雪は降らざりしも、非常の濃霧にして遠くは望む可からず。又た霜の置けるを見る。

霜梨花の如し

道は昨日と同じく赤土の平原を北に向ひて進むなり。暫らくにして日出て、木々の枝にかゝれる霜の白きと相映じ、時ならず陽春梨花を見るが如く美はしかりき。平原の道を進む中に、時に一小丘陵のあるあり、或は上り或は下り行くに、地と言はず家と言はず總てカーキ色を呈せり。七清里計りにして一小河に出づ、今は結氷し居りしも、此は東流して老哈河に注ぐものなり。

和碩金營子

河を渡れば和碩金營子と稱する村なり。漢蒙雜居にして戸數四十許り、兩側に立ち並びて一筋町をなせり、村内一廟あり。此の村を出て一小オボのある處を通過し、十清里計り進めば興龍街に達す。此處も亦戸數五六十許り、一筋町の市街的村落にして飲食店もあり、亦漢

興龍街

蒙雜居にして、蒙古人の家は二三戸ありと云ふ。更に五清里計り進める頃左方に山を望む、此は喀喇沁のシバ河流域なる、公爺府の南に在る山にして、此處より公爺府迄は一百清里なり。此山より此地に向ひて、押頭河と稱する一河の流れ來るあり、此は八十清里にして老哈河に注ぐと云ふ、今は結氷し居りて水無し、之を渡れば直ちに西橋頭の村なり。

押頭河

西頭河

西橋頭は戸數百五六十計りありて一市街を爲し商業盛なり、町の周圍は土壁を以て圍む。余等は其の小南門より町に入りしに、各戸共正月を迎ふる用意に忙しく、家の人口には種々の芽出度き文句を書き聯ねたる紅紙を貼り居れり。余等は一飯店に入りて中食せしが時に午前十時なりき。此の日途中にて見たる人家も、多くは瀝車屋根的のものなりき。

西橋頭各戸迎春の用意に忙し

家屋の形式又た一變す

今日は陰曆十二月二十七日なれば、此の町の商人は露店を開きて、正月用の物品を販ぎ居りしが、近村より買物に出て來れるもの非常に賑はひ、余等の馬車は辛うじて群集の間を進めり。町の北門を出てゝよりは、再び平原を北に向ひて進む。暫らくして西方より西北に當りて、山の走り居るを見たり。此は西喀喇沁方面の山なるが、此の山脈の北方は即ちシバ河にして、公爺府は實に此の山の後方に在り、又た押頭河を境として西橋頭の西北方は、西喀喇沁王の管下となり居るなり。此處に到る迄は人家の構造多くは瀝車屋根的なりしが、此處より

は形式俄かに一變し、全部草屋根の家のみとなれり、之等は風俗上面白き事と云ふ可し。

西橋頭より五清里にして孟津溝に到る。戸數四五十あり。更に少時にして上營子に達す。

孟津溝
上營子

漢族雜居の村落にして戸數二十許りあり、更に五清里計りも行きし頃、喀喇沁方面の山より東流し來れる白河の畔に出づ、今は結氷し居れり、之を渡れば人家四十戸計りの一村あり。又た其の西に當りて三十戸計りの一村あり。

白河

白河を渡りてよりは地勢漸く一變し、丘陵次第に高くなり來りしが、暫らくにして大坦梁と稱する峠に差しかゝれり。此の峠は左迄急ならず、赤土の一大丘陵を成し居れり、余等の馬車は此の丘陵の凹地を進み行きしが、二十清里にして其の頂上に達し、更に之を下り、二三の小村落を經過して喀腦河に出づ。此の河は左方の山より流れ來り、三十清里計りにして老哈河に注ぐものなり。余等は此の河に沿ひ、少しく西に向ひて進みしが、二十清里計りにして午後四時頃上燒鍋に達し一客舍に投ぜり。上燒鍋は喀腦河畔の山間に位する一村落にして、余等の入れる旅宿にては、正月の近づきし爲め、紅紙に種々の對句を書きたるものを門、其の他の處に貼るに忙しげなり。

大坦梁

喀腦河

上燒鍋

今日經過し來れる道は次第に上りになり居れるが、中京より此處に到る途中に就て考ふるに、中京は其後方に山を控へて要害最も堅固なるを知る可し。本日の行程八十清里。

梁底

老爺梁

一月三十一日、今日は赤峠に歸る日なれば、朝夙く起き出て、旅裝を整へ、午前四時出發せるに、夜は未だ明けやらず、空には星輝けるも道頗る暗し。

丘陵の間を行く事十五清里梁底に達せる頃、夜は漸く明け初めたり。此處は人家僅かに五六戸計りの荒村にして、民家は未だ眠より覺めざりき。之より又た峠路に差しかゝり左迄急ならざる赤土色の丘陵を上る事五清里計りにして頂上に達せり。此の峠を老爺梁と稱す。頂上に立ちて西方を望めば、シバ河の流域の山脈は北より西南に走り、河水其間を流るゝを見る。公爺府より赤峰に往來する道は、此の河の沿岸を通じ居るなり。ボンスクは彼方を指し、彼處は木匠營子にやあらん。此方は楊家營子にやあらんなど語れり。又た此の峠の東北は丘陵にして其の中央に道路の通じ居るを見る。

塘房營子

余等は峠を下り始め、五清里にして塘房營子に達せり、人家僅かに十戸計りの小村落なるが飯店もあり。而して此の飯店の壁に、之より赤峯縣にして同地に至る五十五里と筆太に記し居れり。之より後は幾多の起伏せる丘陵を或は上り或は下りて進み行き、十清里にして毛家臥舖に達せり。人家三十計。更に十五清里計りにして午前十一時頃、三眼井に到着せり。

毛家臥舖

三眼井

本日行程の大觀

赤峰歸る

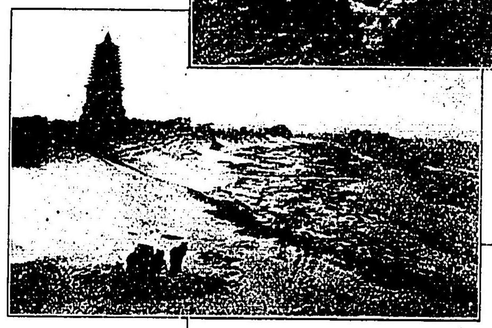
此處には客舍三四軒あり。出發以來此地迄の行程五十清里。

本日經過し來れる地方は殆んど丘陵のみにして、而も之等丘陵は幾多の大なる波動をなし居りしが、余等は其の上を專ら北方に向ひて進み來れるなり。又た道の西南方にはシバ河流域の山脈走り居り、東方は老哈河流域となり居れり、而して此の峠より北は西翁牛特王の管下にして、此れより以南、昨日逗留せし河水以北は、西喀喇沁王の領地となり居るなり。即ち彼の喀喇沁王のシバ河流域地方の、全く山間なるは之によりて推知するを得べし。而して人家の構造は峠を下りてよりは、復た前日の如き流車屋根的のものを見ず、何れも草屋根のものなりき。

午後一時、三眼井を出で等しく丘陵の上を北方に向ひて進む。十五清里計りの間は二三の小村落を見るのみなりしが、之よりは地勢漸く廣く、右方に丘陵の終りとしてオボガ山を望みてよりは、遂に全く山及び丘陵を見ざるに到れり。此の處より北方を眺むれば、地は平坦にして、村落樹木等のセピヤ色をなして點々存在するを見る。

更に進む亜七清里にして、前方初めて紅巖山(オーカンヘ)を望み、東の方にも又た一山脈の横はるを見る。途上正月の買物をなして歸るものに多く逢へり。行く事暫らくにして、赤峰の市街に入

跡遺の攻公國



遼の中京

跡遺の攻公國

石虎地方の遺跡(遼の中京附近)

る。今日は清暦十二月の二十八日なれば、市街は正月の買物をなす人々にて、非常に賑はひ居れり、此の雜踏を押し分け〳〵、漸く余等の寓居に歸り着けるは、午後三時頃なりき。

之迄の旅行記は即ち老哈河の上源地方、遼の中京を訪へる際の紀行なり。

第四　赤峰以北翁牛特（オーニュート）間

一、北方旅行の好期節

余等は明治四十年十二月下旬より翌四十一年三月初旬迄赤峰に滯在し、赤峰を中心として其附近の調査に從ひつゝありしが、漸く北方を旅行するに適する期節も近づけり。此の時迄は寒氣甚しくして、北地の旅行に困難なりしが、今や氣候も溫くなり來りしを以て、愈々赤峰以北の旅程に上る事とせり。

而も尙未だ朔風吹き荒み、河上の氷未だ解けやらず、恰かも日本の極寒とも云ふ可き寒さなれども、北方の旅程に上るには此の頃より始めざる可からざるを以て、愈々出發する事とせるなり。

余等は最初北方の旅行には、余等の蒙古語の敎師たるボンスクを同伴する約なりし、彼も最

親子三人北の旅程に上る

初は余等と行を共にする事を承諾せしが、愈々發程する際に當り、俄かに同行を謝絶せり。彼が其理由とする處は、第一には北方の寒氣甚しき事にして、第二は北方の蒙古人は南方の蒙古人に比し頗る獰惡なる事、第三は北方の旅行は途中賊群の横行する事にして、第四には彼の身體の健康ならざりし事等なりしを以て、余等は止むを得ず、親子唯三人、北地の旅程に上る事とせり。

二、蒙古旅行通辯の不完全

通辯の二種

從來日本人及び外國人の蒙古に旅行せし人々は、皆通辯を雇ひ、之に據りて其の旅行をなしたるものなるが、是等の通辯は如何なる種類の人間なるかと云ふに、多くは年少の頃より蒙古地方に行商を爲しつゝある支那人なり。即ち彼等は其少年時代より、蒙古の内地に入り居るを以て、下品ながらも多少蒙古語を解し、若し旅行者にして支那語に通じ居る人なれば、彼等を伴ひ行く事は最も便宜多し。然れども彼等とても其の數多からず、且つ彼等を傭はんとするには、蒙古の入口にある商業殷盛なる處に於てせざる可からず。且つ又彼等はその品性下劣なる人間のみなれば、旅行中蒙古人の家に宿泊せる際の如き、旅行者より贈る謝禮金等は半ば己の懐を肥やし、僅かに其の半を先方に渡すが如き事往々にして之れあり。又物を尋ぬる際に於ても、其の通譯多くは正しからざるが如きものあり。又南方の蒙古人にして、支那語に通ずる者をも通辯として傭ひ得らるれど、支那語に通ずる蒙古人は、概して其の性質既に支那化せられたるもののみにして、餘り快き同伴者には非るなり。即ち蒙古の旅行をなさんとするものは、之等二種の通辯中孰れかを撰ばざる可からざるものなれども、蒙古通の人に非れば彼等を傭ふ事は非常に困難なるを以て、普通は北京若しくは滿洲方面にて、支那人を傭ひ之と共に旅行するもの多し。又或種の人は其の支那語に通ずるに任せ、單獨旅行を試みるものあれども、北方の蒙古地方は支那語の行はれざる區域なれば、之等の人々は啞の旅行をなすものにして、只目に見る物以外には、聞く事も知る事も得ざるなり。

單獨旅行の困難

余等研究の蒙古語を活用す

余等は最初より此の事情を知悉せしを以て、自己の旅行には、出來得る限り通辯を伴はざる事と決したり。こは研究上又た經濟上、種々の點に於て利する處多きを以てなり。余等の喀喇沁到着後、直ちに蒙古語の研究に從事せしも、畢竟此の意に外ならず、今赤峰より此地の旅程に上らんとする際には、蒙古語にて日常の談話には差支無き程度に達せしかば、今此の教師に同行を謝絶せられしも、少しも困しまざりき。斯の如くして余等三人は自ら學び得たる蒙

古語を實際に活用し、以て旅行する事となせるが、後にて思ひ合すれば、此の事は非常の利益を、余等の旅行に與へたる武器なりき。

三、旅行準備

贈物の準備

赤峰以北の旅程に上る事に就き、以前よりその準備として、種々の物貨を買ひ整へたり。こは各王府及び蒙古の官吏、普通の蒙古人等に贈る可き物品、宿料、物品の買入代等に使用する爲にして、余等は出來得る丈け之等の物貨を買ひ集めんと思考し、余等兩人の喀喇沁王府より得たる僅の金子と、外に持ち居りし金子とを以て、以上に要する物を買入れたるが、その重なるものは王府に贈る可き聊か貴重なる物品及び、五色の絲、針、砂糖、煙草、布類、鋭、玉飾、石版畫、其他藥品類にして懷中に殘したる現金は僅々二十四五兩に過ぎざりき。勿論此の少額の金子にて、此の旅行をなす事の頗る困難なるは明かなるも、由來探險を企つるものゝ、多くの金子を持ちて旅行するを、期すべからざるを知り居りし上に、此の時は後の事は考へず、唯一意目的地に向つて旅行する事をのみ念じ居りしにて、あまりに大膽なりし。

斯の如く旅行の準備を整へ、余等三人は愈々旅程に上らんとせしか、此の方面を旅行する

地圖旅行記の不完全

には露西亞、獨逸、支那等にて製作せる極めて不完全なる地圖、及び『蒙古遊牧記』等に據りてせざる可からず。旅行記と云ふも、其の完全なるものは未だ中外に之を見ず。されば此の旅行の頗る困難なる、想見するに難からざるべし。

余等の旅裝

次に余等の旅裝は、春とは言へど、日本とは大に異なり寒氣酷しければ、余等夫婦共に毛皮の毛を裏にしたる長きマント及支那衣服を作り、即ち南方の蒙古人の用ふるものと同じきもの、小供にも亦餘り寒氣を感ぜぬ樣の衣服を準備し、斯して愈々出發する日を待ちつゝありし際、赤峰縣の武官尚氏は非常に盡力なしくれ、又旅行に對する種々の注意を與へられ、且贈物さへせられたる上、余等の護衛として支那の馬勇(騎兵)四人を附せらるゝ事となりしが、余等は出發に際し、朋友親戚等に夫々書面を出し聊か決心する處あり。斯して三月十五日即ち清曆二月十三日愈々旅程に上れり。

赤峰縣武官の好意

臨かに意を決す

四、赤峰を出發す

赤峰出發

三月十五日。 朝夙く起き出て旅裝を整へ、余等夫婦と小兒は車に乘り、尙他の車には準備したる物貨を滿載し、四名の馬勇を伴ひて赤峰を出發せるは午前六時頃なりき。

道を北方にとり暫くにして老哈河の上流なる英金河畔に出で、之を渡りてよりは紅嚴山を右にして進む、北に進むにしたがひ漸く砂土にして、英金河を渡りてよりは、左右の丘陵一の樹木なく一の家屋なく又た畑地をも見ず、途上四五輛の空車と二三の牛車とを見たるのみ。こは烏丹城より赤峯に歸るものなり。兩山の間砂土遠く開け言ふ可からざる寂しさを感ぜしむるものあり。進み行く程に、漸く北地特有の光景を呈し來りぬ。此の日、風強くして砂塵を飛ばす事甚しく、加ふるに寒氣酷しかりしかば、車の進む事遲々たり。漸くにして左右の丘陵遠かり、一眸たゞ廣漠たる荒野に出づ。荒野を進む事二十清里、赤峰を距る二十五清里にして、復び左右に山を見る、右方は即ち大紅山脈にして、左方にあるは平頂山とす。赤峰より平頂山迄は約四十清里なり。

廣漠たる荒野

赤峰を北に距る二十五清里の邊にて、初めて畑地を見る、左右の山下には二三の村落を望み、枯木なれども樹木も少しくあり。一河あり招素河と稱す。此の河流るゝ事四十清里にして英金河に注ぐ。招素河は丘陵の間を流るゝ河にして今は水少なし、余等此の河を渡り、行く事暫くにして興隆庄に達す。時に午前十一時なり。

招素河
興隆庄

五、此地方宿驛の狀態

興隆庄は赤峰を距ること北方三十清里に位し、戸數十餘、其の多くは飲食店にして、往來の旅客の食事を取り、又は宿泊するの驛にして。余等また此處に車を停め、一飲食店に投ず。

蒙古宿驛の狀態

支那內地の狀態は、概ね斯の如くなれども、此の邊村落人家少なく、何處にても飲食すると云ふが如きは望む可からず。殊に此の邊に於て最も然り、此處の宿驛の如きも近時漸く出來たる位にして、往時蒙古人の天幕生活しつゝありし際に於ては、夢想だも及ばざるものなり。赤峰以北にては、此處興隆庄に至る迄三十清里の間、一の飲食をなすべき又宿泊すべき處なきなり。之等の飲食店に於て、如何なるものを得可きかと言へば、單に饂飩粉を丸く扁平にし、豚の油を以て燒きたる餅と稱するものと、副食物として豚の肉及び菜の漬物位に過ぎず、餅は我が國の米飯の代りとも云ふ可きものなり。

赤峰附近の食物

赤峰附近一般人民の常食は粟飯にして、餅を用ふるは稍や上位にあるものなり、米は此の附近にて產出せず、皆北京方面より輸入するものなれば、上流の人々と雖多くは餅を常食とす。

之等の飲食店にて客あれば、其の注文により直ちに餅（ピン）と肉とを燒き、之を供するの狀態にして、食事極めて簡單なるものなり。之等の家にはまた何れも厩舍の設備あり、以て客の乘馬及び車の馬に秣を與ふるなり。

六、招素河流域

蒙古風の牛車

小モト溝大モト溝

此の飲店（ファンディン）に憩ふ事小時、正午十二時頃出發し、招素河に沿ひて東北方に進む、此の途上初めて蒙古風の小さき牛車を見る。此は英金河以南に於ては、全く見るを得ざるものにして、蒙古人の製作に係り、專ら彼等の用ふるものにして、支那人は多くは之を用ひず。進む事五清里にしてチンファンに達す。戸數二十許り。更に十清里にして小モト溝あり。戸數十五六、尙行く事五清里にして大モト溝に達す。戸數三十許の村落にして、比較的樹木に富む。

大モト溝、小トモ溝の名は、蒙古語より出でたる者の如く、即ちモトと云ふは蒙古語樹木の意にして、コウとは蒙古語コル即ち河の義なり。余按ずるに、大モトコウは蒙古語のイフモトゴルにして、小モトコウはバガモトゴルより出でたるものならんか。されば此の地今は支那人の部落なれども、往時蒙古人の居住せし處たるや明かなり。又小モト溝、大モト溝即ち大小の樹木の河なる地名あるのみならず、今も樹木比較的多きに見るも、此の流域に樹木鬱蒼たりしを想像し得んか。

四道溝梁

招素河に沿ふて上る事更に五清里にして四道溝梁（スーダウクリヤン）に出づ、此地に於て今迄北方にのみ流れ來りし招素河は、更に西方より流るゝ事となり、遙かに西方其上源地の山脈を望む。又西方其沿岸にチョウチン營子と稱する地あるか、此の地名も亦蒙古語より出でたるものなるべし。

七、卜羅河流域

余等は四道溝梁（スーダウクリヤン）よりは、招素河と相離れ東北方に進みて、四道溝梁の高處に達す。此の高地は分水嶺にして道漸く上りとなる。途中一村落あり、戸數三十此も亦四道溝梁と稱す。此の村落を出づれば人家無く、且つ道又次第に上りとなれり。斯して進み行けば山中に老爺廟あり、關翁を祭れるものにて、其の結構美麗なり。此の附近の土質は全く岩石にして美しき綠色を呈す、山賊屢々出沒して旅客を惱ますと云ふが、一度彼等に會ふ時は、旅客如何ともする能はざるの山中なり。

余等は其の山頂に上り、過ぎ來し方を顧みれば、幾多の丘陵起伏し、遠く前程を眺めば、東

北方丘陵、山脈の重疊するを見る。玆に於て余等は始めて、此の分水嶺の英金河流域の分界たるを覺り、彼の數十里間其流れに沿ひて進み來りし、招素河は此峠に源を發するをも知れり。

此の峠を下り行けば、また一河あり、占羅科河と稱す。卜羅科河は東流する事三百清里にして、老哈河に注ぐものなれば、此の附近亦老哈河上流々域と稱すべし。余等は此の河に沿ひて下り始めたるが、道は前の如く傾斜忽ならず、恰かも爪先下りとも云ふべきものなりき。前方を望めば廣漠たる高原にして、村落點々散在し、畑地のよく耕されたるを見る。進む事暫くにして、河水よく流れ水量亦多し。此の水源地には樹木無きに、斯の如く水の流るゝは實に驚く可き事に屬す。又進む事漸くにして斷崖絶壁となり、或る地點には河中多くの柳樹をさへ見る。又此の柳樹のある崖の斷層に、穴居せる家一戸を見たり。

更に二十清里計り進みたる頃、日も漸く暮かんとするに、遠近を見渡せど宿る可き家なし。漸くにして一村に達す。戸數二十餘、一二の大家富者らしきを見る。此の附近頗る便惡しくして宿舍なければ、余を護衛せし馬勇此の富者の家に就きて宿を請ひしも、其の主人余の妻を見て曰く、婦人は一切宿す事を好まずとて謝絶す。外國の婦人云々と言ふと雖、實は支那兵を宿すを好まざるなり。そは彼等支那兵は多く亂暴するが故なれば。止むを得ず更に、卜羅

河に沿ひて東北方に進む程に、流れ漸く盛んに河幅また廣くなれり。河岸に一龍王廟を見たり。斯して進む事八清里、劉家營子に達す。

劉家營子は、昔の名の示す如く劉氏一族の住む處にて、此村にも旅舍無し。然れども此時、日漸く暮れかゝりしかば、馬勇をして劉氏の宗家に到り、寄泊せん事を請はしむ。初めは中々肯ぜざりしが、漸くにして承諾を得其家に入りしが、次第に心打ち解くるに至り、家人は待遇鄭重を極む。

劉氏の邸宅は、恰かも城廓の如く周圍に高く土塀を圍らし、土塀の四隅に物見臺を築き、魏然たるものにして、土塀の周圍一清里强、その正面の入口には大なる門あり。土塀の中には家屋幾棟も建て連ね、劉氏本家の一族此處に居住す。即ち主人より其の番頭丁稚の如き者迄を通算すれば數百人にも達すべし。

此の村名を劉家營子と呼ぶ理由を問ひたるに、今より凡そ二百年前、劉氏と稱する人此の地に來り、當時畑もなく家も無く一望廣漠たる原野に、始めて鋤を入れ開墾に從事せしより、其子孫漸く繁盛し、遂に此の村を組織するに至れるなりとぞ、而して余の宿せしは其宗家なり。由來支那人は、其の祖先の困苦して開拓せる土地は、一族を以て繼承するを常とし、彼の自家

一家郷の狀況

姓の附き居る地名は、概ね其の一族の開拓せるものにして、今尚其の一族の手に據りて經營し、他姓の者は其の地に入るを許さゞるなり。而して其の氏の長者は、非常の權力を有し、自家及び其の一族に對し指揮命令を爲す。

此の日余等の旅程は百〇八清里なり。夜に入りてより非常に歡待せられたるが、軈て主人出て來り、此邊の狀態及び現今の有樣に就き、種々の物語りしたる後ち、余に對し一罐の牛乳を貰ひ度しと申し出でたれば、不思議に感じ如何なる故なりやと問ひしに、數年前二三の露西人此地を過ぎたる際、彼等は紅茶に乳を入れて主人に與へたりしが、其の美味今尚忘る能はざるが爲めなりとの答なりしかば、余は彼れに一罐の牛乳を贈りしにいたく喜べり。支那人に牛乳を飲む者少きに、殊に此の山中にありて斯る事に出會ひたるは頗る奇なりと云ふべし。

主人牛乳を懇望す

旅行者の謝禮品

尚一言を附し置く可き事あり。其は斯る家に宿泊せし際に、金子を贈るは却て禮を失するものなれば、何か他の物品を贈らざるべからず。そは日本の東京大阪等にて製作する石版繪の如きは最も喜ぶ處なれば、之等を贈りて謝禮とすべし。此の時も主人請ひて止まざれば、即ち其數枚を與へたるに非常に喜びたりき、斯る地方を旅行する人々はよく注意すべき事ならん。この日の溫度は朝八時、華氏十度、正午同十一度强、夜同十一度

漢民族の勢力

三月十六日。午前七時劉家營子を出發す。主人其の門迄余等を送る、劉氏の家を出で卜羅科河の左岸に向ひ、同じく東北方の間を進む。此附近の地勢は劉氏の邸宅を中心とし、其の周圍は低き丘陵を以て圍まれ、丘陵の周圍二百清里もあるべし。而して中央の平地は能く耕されれ、劉氏一族の村落點々散在せり。此附近の地味豐饒なるが如し。而して卜羅科河は一方の丘陵を開き東方に向つて此の間を流る。余等は茲に於て初めて漢民族の老哈河上源地に於て、既に一大勢力を有するを知れり。元來此の地方は翁牛特(オーニュート)王の領地なれども、今や一人の蒙古人を見ず。

進む事十清里にして三家に出で、更に五里にして一小支流を渡り小河營子に到る。之より五里にしてインスーに達す。此のインスーなる地名も、亦蒙古語のインオッツより出でたるものなるべし。即ち蒙古語にてインは大にしてオッツは水なり。此の附近其の地名に表はるゝが如く、水氣多く土地浸潤にして、平地の上尚水に浸さるゝを見る、インスーの名因つて起れるものならん。

蒙古の地名

蒙古語の地名は自然其儘を呼びたるものにして、支那人の地名の如く、決して文學的のものを用ゐず。例へば狼の居る處なれば、其の地名をも直ちに狼の居る處と名け、又柳の木のある

直ちに地勢を知る

河あれば、直ちに柳の木のある河と名くるが如し。されば蒙古語の地名を知れば、直ちに其の地の狀態を知るを得べし。我が北海道のアイヌの地名亦然り。されば蒙古語の地名は、非常に參考の用を爲すものなるが、此の附近の蒙古地方に移住したる支那人は、多くは以前の地名なる蒙古語を其儘、支那の音文字を以て表はし居るを以て、其の音文字を再び蒙古語にて讀み直せば直ちに知るを得べし。又漢字にて蒙古語を意譯せるが如きもあり、之等は餘程注意すべき事に屬す。

支那人の一日二食

イフスーは二三十戸の村落にして、何れも富みたる大家のみなり。その近傍に宏壯なる老爺廟あり。此處に達したるは午前九時頃なりしが、余等は廣義公と呼ぶ家に入りて晝飯す。此家も金滿家にして大に余等を歡待せり。支那の村落及び支那地方を旅行するには、朝には茶のみをとりて出發し、稍や進みたる後、午前九時十時の頃に至りて、始めて朝飯をとる慣ひなれば、多くは二食なり。即ち朝の九時十時頃と夕暮との二回にして、晝は茶或は其他の間食位にて濟ますを常とす。こは旅行の際も平常も共に然りとす。

午前十時廣義公の邸を出て、進む事五清里にしてバイローコーに達す。戸數二十計りの村落なり、バイローコーに至る迄は土地低かりしが、之よりは土地漸く高く、此處より四道溝に

ウイグル文字の大碑石

至る十里の間は平坦なり。四道溝にはチョーチンテン河流る。四道溝よりは土地更に高く、道は益々上りにして、四道溝を距る八清里にして國公坟に達すべし。

八、國公坟の古跡を訪ふ

國公坟は戸數五十餘、山中の一村落なり。余等の此の地に來れるは、此處に一種興味ある古跡の存するあれば、之を見んが爲めなり。以下少しく國公坟の事に就て述べんに、國公坟は支那人のみの部落なれども、不思議に蒙古語に巧みなるものあり。曾に蒙古語に巧みなりと言はんより、其の發音等は、殆んと蒙古人と區別し得ざる程同化したるものなり。全村農を業とし、人は皆質朴なり。

村を出て山を上る事二清里計りにして、所謂國公坟の古跡に達す。其古跡の存する位置は南を前にし、後に小高き山を負ふ。而して古跡のある處は二丁四方位にして、今尚石碑の礎石三基を存すれども、完全に碑文の立ち居るは、只一基のみ。他は臺石のみ存し、石碑は折れて其の傍に横はる、其の完全に存するもの最も大なり。此は元の元統三年建立、國公張氏の碑にして、其の南に面したる一方は漢文にて記し、其裏面にウイグル文字を以てせり。臺石に

は龜を彫刻し、碑文は大理石を用ふ。ウイグル文字を以て記したる碑文にて、斯の如く大なるものは多く見ざる處なり。且つ漢文と對照しあるを以て、ウイグル文字を讀む上に於ても頗る便多し。而して漢文にて記せし方は、文字も磨滅せず充分讀むを得れども、後方のウイグル文字の方は文字の刻み方淺かりしと、北方に面するとの關係上磨滅して不分明なる點あり。

碑文の前方には石獅子、石羊、石虎、石人等相對して存在す。今や多く壞敗し半ば土中に埋れたるもの、壞れたるもの等狼藉たる有樣なり。又た石人、石羊、石虎等のある北方に山を後にして一段小高き處あり。往時其處に石垣を築きたるものの如く、今尚石垣の石と覺しきもの六個計り並び存するを見る、思ふに殿堂若しくは墳墓の跡ならんか。

今少しく石人に就て述べんに、之等の石人の中、束帶して笏を持ち居るもの、甲冑を着けたるもの等數個あり。其の中甲を着けたる首は、一個殘りあるのみにして、他は何れも首無し。石羊は何れも首なく、半ば土中に埋もる、石虎の製作は、曾て老哈河の上流にて見たる石羊石虎と同型なるが、之等の石像は皆大理石を以て刻まれ、何れも完全なるものなり。斯の如く同一位置と、同一石質を用ひあるを見るも、碑文と或る關係を有するを推知するに足らん。更に其の東方少しく離れたる處に、大理石の香爐の如きものあり。又此附近には瓦、陶磁器等の散在するもの多し。

余等は碑文の石摺りを試みたりしが、寒風酷烈にして、加ふるに梯子等の準備無き爲め、充分目的を達する能はず。石摺は他日に讓る事とし、碑文の文字丈け寫せり。初めインキを用ひたるも、寒氣の爲めインキ凍りて用を爲さず。且つ石碑餘りに大にして、一々之を見て書き寫す事の頗る困難なりしが、余と余の妻と相分擔し、一時間餘を費して之れを寫し得たり、其の全文左の如し。

「ハ高サヲ示シタルモノ、」ハ原文一行ノ終リヲ示ス

「皇元敕元賜故贈榮祿大夫遼陽等處行中書省平章政事柱國追封蔚國公張氏先塋之碑」

「奎章閣學士院學士朝散大夫經筵官臣尙師簡奉　勅　書」

「翰林侍講學士中奉大夫知制誥同修國史同知經筵事臣張起巖同奉勅撰」

「奎章閣承制學士臣虞集奉　勅　書」

「榮祿大夫翰林承旨臣許師敬奉　書勅篆」

「皇上踐阼之初營」

「皇太后奉以天下之養申命元勳大臣領徽政院宿望舊勞咸在其選于時中政使同知昭功萬戶都總
使府臣住董拜榮祿大夫徽政院使巴又推」
「恩降」
「制贈其三代元統三年春正月」
「敕翰林院侍　講臣起巖　奎章閣供奉學士臣師簡文其碑　奎章閣承制學士虞集書　翰林學
士承　旨臣許師敬篆其碑首臣起巖等謹按贈榮祿大夫遼陽等處行中書省平章政事柱國追封
蔺國公張公諱應瑞世爲全寧大家全寧」
「魯王分地故隸籍　魯邵其祖考諱仲賢秉性純篤忠孝和易樂善而有恒鄉里咸宗敬之常語人
曰與其遺子孫以財曷若教子孫以德財或用之有盡德可傳之無窮時人以爲名言以曾孫今徽政
貴贈中奉大夫嶺北等行中書省參知政事護軍」
「追封清河郡公妣李氏追封清河郡夫人考諱伯祥謹愿而有志略爲　納臣那演所知擢寬宿衛
事必諮問時公生市七歲已凝然重厚有成人風　納臣那演子養之及長材力精敏識趣超異於
時務尤練達美鬚髯風儀端整臨事謹恪慎重」
「納臣病凡三年躬調護醫藥食飲扶掖撫摩時其衣衾之寒燠坐立寢處其側寒暑晝夜無倦色溲遺
滲按衾簟更易潔除滑澀人皆以爲難公不少忘也病既愈指公戒其子曰吾病時汝雖天倫至
親非不欲竭心力以奉我然疾當隱處亦有不得近者惟」
「此兒勤力精思能知吾疾痛所在三載之久殆若一日病獲瘳復此兒力也忠孝若此汝毋忘之及
翰羅臣嗣位」
「世祖皇帝以　皇女公主薩降爲　駙馬都尉思其父之遺訓過公禮意優厚公事之彌謹俄　駙
馬之弟只兒瓦叛挾　駙馬北去并竊」
「太祖皇帝所賜券公與往有以脫　駙馬於難　駙馬既遇害并困辱公楚毒百至公曰吾聞主辱
臣死吾不難一死以從主於地下顧吾死主冤孰白者伺守者懈得逃還訟其事于
上事下有司罪人斯得而主讎竟復追索得所竊券世皇嘉之賜楮幣伍佰緡俾歸輔其主主薨子
諱瓦八剌立尙」
「武宗皇帝妹是爲　皇姑懿福貞壽大長公主薨封　魯王開府置僚屬　王念公勞勩以爲請
褒書錫命亞中大夫王府傅壽八十二以終初贈中奉大夫河南行省參知政事加贈一品以受今
封夫人剛氏由清河郡夫人加封蔺國夫人而公之考由贈嘉議大夫同知大常禮儀院事上輕車都
尉清河郡侯加贈資政大夫河南江北等處行中書省右丞上護軍仍封清河公妣王氏追封清河郡

「太夫人公之子三人住章大都閭全閭 住章謙抑 廉謹謐而 寡言及臨事剖析曲當」
「大長公主器重之初命嘉議大夫怯怜口都總管天曆初」
「文宗皇帝正位宸極遣使通問 魯郎時東藩諸王連遼海兵方抗拒」
「上命恐不利於使者乃潛遣從間道蹤彼知其然即執之付上都至則以計獲免脫今」
「贊天開聖仁濟徽懿宣昭」
「皇太后 大主所出也 主灼其忠藎以爲遂蹟于」
「朝授集賢侍講學士進資善大夫中政院使提調中興武功庫兼監隨路都總管府同知」
「賜授虎符昭功萬戶都總使府筦滕人千夫長嗣拜今命次曰大都 閭都管總府總管次曰全閭 未
「任男孫三人嗣閭嘉議大夫同知通政院事兼群牧監卿提調洪徽局事次忻都朝列大夫繕工司卿
太皇太后位下口懼 怯薛官次孛蘭奚臣起嚴等惟大易有曰積善之家必有餘慶又聞先哲有言名
門右族莫不 由祖先忠孝勤儉以成立之斯言也其萬世之龜鏡然觀公之祖考平昔立論賤貨貴
德確爲世法言雖前而施之無窮俾萬世子孫有所據依而取之不竭蓋有古君子之烈焉其先考
始爲陪臣遂見信任叶贊忠告之効境內受賜久矣再傳至公自其幼時器度凝重已佶」
主知果勤勞不懈稱副所期 訓言淳切遣其嗣人復能盡忠所事躬冒白刃以蹈不測之禍大義

所在命輕鴻毛酷毒備嘗皆所不恤 主既挺禍又挺身脫虎口赴愬于」
「上卒復其 主之讐以雪不世之恨其忠藎視古人可無愧焉故其超居王傅之位安享耆年之
壽非幸也宜也神監孔昭是生臣住章受知」
「太母晉遷 朝署公遂顯膺贈典位列台階勳則柱國以開茆封若祖若父咸錫公爵並聯執政訪
覃及諸孫通籍 禁中聯事」
「皇朝方來之慶進進未艾茲欽承」
明命賜碑光寵昭揭幽德以烜燿永世蓋其慶源所衍皆由積善與夫忠孝勤儉致然又非幸亦宜也
臣等既鋪敘其世濟之美敢以公之素履載揚於銘其辭曰」
顯允張公 秉德任中 生而元宗 惟時之逢 鉅蕃屏東 位望隆隆 蚤歲景從 灼其丹衷
子養于宮 恩貴寵同 圖報効忠 精思勛弼 侃侃其容 坦坦其胷 夙夜供其 一其初終
「帝婿乘龍 顧遇益穠 財朵內訌 閔其遭因 力嬰彼鋒 思發其蹤 絕網穿籠 莫遮寃鴻
「上翹 九重」
「帝爲哀惻 天戈一揵 殲厥渠兇 復讎奏功 烈烈高風 有徽頌聲 壽高爵崇 神監昭融
「慶門秀鍾 嗣息睦雍 咸韶筆鏞 祀禋肇琮 蒞事肅恭 臣職是供 積其勳庸 禁籍以通

濟恩廸洪　爰開蔀封　寵章被蒙　滿泉昭穹　震聲颯颯　旁達四充　良冶良弓　紹其芳蹤
蘭桂成叢　遂響之雄　譬彼上農　種勤穫豐　佳城鬱葱　殖殖柏松　賜碑穹窿　既琢既塈
辭徹」

晉元統三年歲次乙亥孟春吉日」

尙數葉の寫眞を撮影し、馬勇等と共に前の國公攻の村に歸り、其夜は此處に宿泊せり。此の夜村民等古錢を數多持ち來りしかば、余は計らずも之を集むるの便宜を得たり。

本日の溫度は朝華氏四度、正午同六度なり。

九　烏丹城

三月十七日朝、國公攻を出發し、道を西北にとり進みしが、忽ちにして丘陵に差しかゝり、更に道を北方に轉じて進む。此附近一の人家無く、行く事十清里にして一峠に達す。その頂より西方を望めば、幾多の丘陵重疊し、又山間三四の村落の點々たるを見る。山道を降る事五里計りにして、戶數二三軒の新村に出づ。余等の一行此の村に達せし際、俄かに北風吹き起り、土砂を飛ばし寒氣また酷しく、溫度は忽ち降りて、華氏零下九度に達せしが、土砂の爲め

烏丹城

古碑文を見る

に二三間の前方さへ見るを得ず。馬は恐れて進まざれば、馬夫は止むなく車を止め、暫らく進行を見合せつゝありしが、斯くてあるべきにもあらねば、暴風を冒して進み、漸くにして平坦なる村落に出づ。此の時幸ひに風も小休みになりたれば、更に車を進め十五清里にして烏丹城に達す。時恰かも正午なりしかば、余等はとある飲店（ファンヂン）に投じて晝食をなせり。

烏丹城を蒙古人はボロホトンと稱す。戶數二三百を有し商業盛なり。赤峯以北の市街としては、見る可きものゝ一なるべし。主として蒙古人相手に取引をなし、雜貨の販賣その重なるものなるが、赤峯より輸入し來るものなれば隨つて價甚だ不廉なり。烏丹城の市街は新開にして、清國武官の役所あり、馬勇二三十人此處に駐屯す。其武官は未だ年壯き人なるが、曾て滿洲に在りしとて、日本人に知己を有し、又多少日本語をも解するが如し。余等を飲店に訪問し、種々の贈物等を持參せり。

余等は此附近なる老爺廟內に、古き碑文二基あるを聞きて、晝飯後之が石摺をなさんとて行く、此碑文は文字磨滅して、充分讀む事を得ざるも、其一は元の泰定二年の建立にして、學校の碑たる事明かなり。他は道光年間の者にして、漢民族の此地方に入れる事を書き記したる者なり。泰定年間建立に係るものは、國公攻の碑と比較して、此地方の研究上頗る有益なる者

なり。元統三年は元の順宗の時にして、我が建武の頃に當り、泰定二年は元の晋宗の時にして、我後醍醐天皇の正中二年に相當す。

之等碑文の石摺しつゝありし際、支那人蒙古人等先を爭ふて、余等の周圍に集まり來れり。其は日本人の珍らしきのみならず、婦人の小兒を伴ひ來れるが殊に珍らしければ、余等を見んとて集まれるにて、其れが爲に往來すら自由ならず實に困却しき。

十、東翁牛特

烏丹城を發し東方に向つて進む。蓋し東翁牛特王廷(即ち翁牛特左旗)を訪はんとてなり。烏丹城を離るゝに隨ひ地勢漸く變じ、四方開らすに丘陵を以てし、其の中央平坦なり。更に進めば途上の光景愈々奇にして、南北方の丘陵次第に遠ざかり、東方は土地愈々濶け、一面の際涯なき草原に出づ。之れ蒙古の牧場にして、一望たゞ枯草のみ、其間無數の牛群徘徊するを見る。茲に於て始めて蒙古らしき感に打たれ、蒙古人の牛を追ふ樣おかしきを見たり。此の附近の小高き處には、蒙古人の天地を祭るオボ(堆石)多し。此の草原を過ぎ行く中に、會ふものはたゞ蒙古人及牛、馬の群等のみ。蒙古的牛車に家具を積み行くなど、我等の目には

翁牛特王府

蒙古人支那兵を懼る

蒙古の御馳走

何れ珍らしからぬはなし。

斯して午後四時頃翁牛特の衙門に達す。翁牛特衙門の位地、翁牛特王府は北方に小山を負ひ前は草原に臨む。王府の建築は支那風にして、王府の傍に蒙古人の家少許あり。當時翁牛特王は、北京より未だ歸らざりしが、余等宿泊を乞ひたるに、王の留守なればとて謝絶せられたり。此時留守を預り居りしは、王の伯父なる人なりしかば、此人にも請ひたるが、斯の如き多人數にては食ふ可き食物も、臥す可き室もなしとて又斷はれたり。蓋し彼等は支那兵の亂暴を恐るゝなれば、尚再三再四交渉の結果、彼役人は蒙古語を以て、余等のみならば宿泊せしむ可ければ、支那兵等は返されよとの事なりしかば、馬勇等は蒙古語を解せざるを幸、よき程に云ひなして、即ち馬勇等に暇を與へ、余等三人のみ王府に入れり。

此處の食物は全く蒙古風にして、支那人の食物と全然異なれり。即ちモンゴルアム(黍)の一度火に炒りて舂きたるを、盆に載せて出せしが、こは支那人の決して用ゐざる處にて、其の用法は、茶に乳を入れたるものを、銅の藥罐の中に入れて持ち來り、之れをそのモンゴルアムの上に注ぎかけ、尚之にバタを入れ、茶を代へ〳〵用ふるものにて、又煮ても食す。蒙古の常食は概して之を用ふ。蒙古人は支那人と異なりて三食なり。尚此の外には饂飩を打ち、鹽味

にて羊の肉を入れたるものあり。御馳走と云ふも此二品を代り〳〵出す位にして、他には何物も無し。

三月十八日、王府内に滞在し日記其他の整理をなし、又王妃及び伯父君等にそれ〴〵贈物を獻上せしが、此の日、我等日本人の滞在するを聞き、日本人珍らしさに王府内の役人、宮女等訪ひ來るもの多く、我等をして其の應接に暇なからしめぬ。伯父君の子等も亦出て來り、余等と暫く會談せり。翁牛特王の嗣子なければ、この伯父君の子は其の後を襲ふ由にて、當時十七八歳なりき。

本日の溫度は朝華氏一度、夜同五度

十一　再び國公坟を調査す

三月十九日、再び國公坟の碑文を調査せんとて、午前八時翁牛特王府を出發す。王府よりは特に、騎馬の蒙古人の役人一人を隨行せしめられたるが、余等は牛車一輛に乘りて行く、余等は此の時始めて蒙古の牛車に乘れり。此の牛車は牛二頭に牽かせ漫々として行くものなるが、乘心地は甚だよし。此の日天氣晴朗なれども寒さ酷しく、耳、手、足等の尖非常に冷さを感ぜり。午前十一時烏丹城の市街に達し、中食小憩したる後、午後一時、支那の役所より馬二頭馬勇二人を隨はしめたれば、余等三人は馬に跨りて、愈々烏丹古城址に向つて進む。

烏丹古城址

古城址は現今烏丹城市街の西にあり。蒙古人は是をボロホトンと稱す。ボロは青にしてホトンは城なれば、即ち青城の義なり。

城は後に山を負ひ、南方は打ち開けたる平野に臨む。城壁は土より築き上げたるものにして正方形なり、高さ二間半、幅一間半を有し。一面二清里、周圍八清里なり。現今は只北方の城壁のみ完全に存せり。城中には人家なく只朧圃を見るのみ。古瓦、陶磁器等の破片散亂す。城中北方の城壁に接したる中央の處に、周圍一丁高さ二間の小高き丘あり。此處には往時建物ありたるらしく、支那人は此處を青龍殿（チンルンヤン）と稱す。此處に存する瓦は、普通のものと異なり黄色綠色等のものあり。此の丸瓦には龍或は龍の變化したる模樣を認むるは、普通に見られざるものなり。

此の古城址より眺むれば、西方に山を控へ、南にバインオボの丘陵を望み、東南の方遠く國公坟の大黑山を望むべし。彼の國公龍の遺跡は實に此の大黑山下に存す。此附近土地廣濶にして風光また美なり。城趾の南に當りてチュンヅップ河（チュンヅップ河即ち南河）流る、チュンヅップ河は、城の西方に聳

ゆるヤマハタ山に源を發し、城壁の畔を流れて、更に翁牛特王府の前に出て、更に北流して遂にシラムレン河に注ぐ。烏丹城及び翁牛特王府の、此地方に存在するは此河に負ふ處多し。支那人は之を南河と稱し、多くの地圖には此の河を以て、老哈河に注ぐが如く記せども、之れ全く誤謬にして、シラムレンに注ぐ事明かなり。此の城址の古く存在せるも亦此河あるが爲めにして、此の城のありし頃は、此附近の地方今日に比して、遙かに殷盛なりしものゝ如し、即ち城の廣大なる又城中に存殘する種々のものに徵するも、その然るを知るに足らん。

此の古城は遼時代のものにして、更に降りて金、元等の時代にも此の城を用ひ居りしが如し。又此の附近にある泰定二年建立の學校の碑文、及び國公攻の遺跡等も皆之れと或關聯を有する事明かなり。余等は此の事に關しては、聊か考ふる所無きにあらざれども、其は他篇に讓る事とせり。尚余等は此古城に就きて、種々調査せん爲め烏丹城に滯在する事とせり。

今夜烏丹城の武官より招待を受く。

本日の溫度は朝〇、三度　正午二度、夜八度

三月廿日。 午前八時烏丹城を出發し、南河を渡りて南に進む。此時は南河の水量多からざりしも、一朝雨期に際會すれば其の水忽ち汎濫し、數日間往來杜絶する事さへありと云ふ。

大黑山小黑山

再び石摺りに失敗す

暫らく平地を進みたる後、漸く丘陵にさしかゝり、行くこと五清里にしてバインオボに達す。バインは喜ぶの意にしてオボは堆石なり。バインオボより丘陵を傳ひ、烏丹城より望みたる大黑山に向つて進めば、二十清里にして大黑山下なる黑山河の村落に出づ。戶數十四五、稍〻富みたる村にて、秣等を多く貯ふるを見る。此地又比較的樹木多く、大木の切株所々に散見するを以ても、往時此地に樹木多かりしを證す可し。茲は南方の大黑山、北のバインオボの丘陵に挾まれたる低地に位し、昔時は此邊亦水流なりしが如し。蒙古人は此處をハラオッソと稱す、ハラは黑にしてオッソは水なれば即ち黑水の意味なり。

大黑山は丘陵の上に突立せる岩石の山にして、地質は赤峰の紅山と同一なるものゝ如し。余等は更に大黑山の右麓に沿ひて進みしが、三清里にして小黑山に達す。之れ亦岩石の突立せる小山にして大黑山と相對す。國公攻は此の小黑山の下（南方）に位す。

余等は此處に車を捨て、直ちに碑文のある處に至り、其の石摺りに着手せしが、折しも風烈しくして砂を飛ばし、石碑に紙を當つる能はざりしかば、止むを得ず前日寫せし漢字の碑文を校正するに止めき。尚石人、石羊、石虎等の調査をなして、午後二時頃二清里位にして當日一泊せる村落に入り、茲に中食をなしたる後、今一度碑文の調査を試みたるが、其の時嘉祐

通寶一枚を拾へり。

國公坟の地名考

此處の地名を國公坟又は國公府と稱し居れども、余の考を以てすれば、元此の地は國公墳と稱したるものなるべし。然るを後世に至り墳の字を喜ばざるより、遂に坟の字を以て之に代へたるものならんか。烏丹城古城より大黒山附近は、眺望絶佳なるのみならず、目を遮るものとては唯だ大黒山の平原中に聳ゆるあるのみなれば、元時代に於て國公を茲に葬りたるも謂れなきに非ず。要するに古城、遺跡等研究の價値頗る大なるものと云ふべし。

余等は此の地の調査を了へたれば、再び牛車に乘り、大黒山の東麓より前に通過せしオボ山の丘陵を傳ひて、平地に出て南河に達したるが、此附近にては結氷し、河水は氷の下を流れ居れり。余等は南河を渡りて草地に出づ、放牧の馬、牛、羊等の來りて水を飲むに最も便利なる處なり。

十二、東翁牛特王府に歸る

翁牛特王府にかへる

斯して再び翁牛特の王府に還る國公坟より、三十清里なり、本度溫度、朝〇、二度、正午三度なり。

氣候俄かに暖し

二十一日。 今日は伴ひ來りし小兒の誕生日なれど、別に祝す可きことも出來ざれば、種々の調査に從ひつゝ樂しく一日を送れり。此日に至りて氣候俄かに溫かく、午前八時に於て華氏三度、正午十二時に於て六度、午後八時に於て十一度を示せるが、夜ふけて亦多く變化なし。

斯く俄かに暖くなりし爲め、蒙古人の頭痛を惱むもの多く、顚顚に藥を貼りたるものを多く見たり。此日亦多數の蒙古人訪れ來る。余等は彼等に此の地方に關する種々の事を尋ね、或は日本の話しなどして、此の日を暮しぬ。

二十二日。 翁牛特王府滯在又多數の來訪者あり。中にもエルタイアゴラ、及びマハマヤと呼ぶ二人の者最もよく語る。前者は學校の教師にして、其の談話により余の稗益したる處多かりし。此の日の天候は南風烈しく、砂を飛ばし空は晦く、四方を見るべからざれども氣溫は暖かなり。この暖氣にてはシラムレンの結氷忽ちにして解け、水流急にして渡るに困難ならんと、蒙古人等は余の爲めに心配せり。

本日の溫度、朝九度、正午十二度、夜十五度

翁牛特の風俗

二十三日。 また王府に滯在し調査研究に從ふ。この日伯父君に面會せり。

次に、翁牛特の風俗に就て語らんに、男子は頭に毛を裏にしたる帽子を頂き、衣服は上流

の人は絹木綿等を表とし、裏に羊の毛をつけ筒袖にして、身丈は殆んど踵を蔽ふ計りなるを用ひ、中流以下の者は單に羊の毛皮もて作れるものを纏ふ。之等の衣服の上に帶を結び、小刀子を腰にし、前方には煙草入、煙管、吸煙草入の袋等をつく。女子は一般に滿洲の所謂兩把頭と稱するに近き髮を結ぶ。即ち頭上にて二つに分ちたる髮を、頭の左右に於て銀の匕の如きものに卷きつくるなり。又耳には耳輪をいれ、頭上には結髮の上に、赤珊瑚及び銀等を用ひて裝飾す。衣服は毛皮を裏にし表に絹、及木綿をつけたるものにして、其の袖は廣く裾は殆んど地を引くが加く、其の袖口には我國往昔の十二重の如く、諸種の色を以て其の緣を表はし、衣服の色彩は重に赤、綠等を用ふ。靴は他に赤其の他の色を用ひ、其の上に彩糸を以て諸種の模樣を附し、風俗頗る美麗なり。

余等は本日迄王府に滯在し、調査に從ひつゝありしが、明日は愈々潢河（シラムレン）地方旅行旅立の準備に着手し、翁牛特王の留守を預かり居る、伯父君及び其他に面謁暇を告げたる上、荷物の整理に殆んど夜を徹し、天明の頃漸くまどろみぬ。

本日の溫度は朝八度强、正午十二度、夜十二度、

十三、出發に臨み故障を生ず

荷物來らず出發を延期す

三月二十四日。今日は愈々出立の日なり。此の日風なく暖かにして、溫度は早朝より華氏十一度强を示す。余等は早朝出立する考へなりしかば、昨夜中に荷物を整理し、此の日朝早く起き出てしが、或る故障の爲め、遂に出發を延期するの止む無きに至れり。そは余等の赤峰を出發するに際し、同行したる馬夫の過失にて、必要なる品を入れたる、一包の荷物を遺し來れるを、翁牛特王府に着して後、始めて之れを覺り、直ちに烏丹城の清國馬夫に命じ、馬を走らして赤峰に至り、此荷物を受取り來らん事を依頼し置きたれば、既に翁牛特王府滯在中、即ち出立の一兩日前に到着する手筈になり居りしを、如何なる故か今尙來らず。爲に此日の出發を延期するの止むなきに至れり。されど既に烏丹城の清國衙門迄、此荷物を送り居るやも計り難ければ、其を確かめんとて、余等は午前十時頃牛車に搭じて烏丹城に向ふ。余等の烏丹城に着せる時には、丁度荷物も來り居りしかば、即ち之を受取りて午後二時頃漸く烏丹城を出發せり。

荷物を受取る爲烏丹城に行く

道は例の如く東方にとり、進む事九清里計りにして、左方の平地に大なる丘陵の横はるを見

る。高さ二間半、周圍一清里計り、右方にも亦小高き丘陵ありて、高さ二間半、周圍二町半位なり。而して前者丘陵の上にオボあり、土人是をトーシオボと稱す。即ち丘陵の堆石と云ふの意味なり。此の一方の小丘陵の上には、古瓦、古磚、古器陶等の破片散亂せり。古瓦には綠色なるあり黃色なるあり。其他臺石に彫刻を施せるもの等も見ゆ。余等此處に車を停め、此の丘陵に上りて調査をなせしが、此處は曾て高貴の人の住居ありしか、然らざれば寺院の跡なるべし。而して其の年代は遼時代のものならんか。又一方大丘陵の上にも古瓦破片等を見しが、之亦同時代のものにして、其位置より考ふるに、昔時砦のありし跡ならん。小丘陵にては又一種興味ある發見を爲せり。そは砥石の破片を發見せる事にて、此砥石は石斧を磨ぐ爲用ゐたるものならんか。尙此外に自然石に凹みを付けたるものありしが、之等は遼時代より遙かに以前のものにして、余等の前に述べたる英金河の流域にて得たると、同時代のものたる事明かなり。玆に於て余等は、此丘陵の位置、シラムレンに注ける南河の沿岸にありとすれば、即ちシラムレンの流域にも、曾て石器時代の民族の、棲息せし事實を始めて確むるを得たり。

余等は此處の調査を了りて再び乘車し、草地を過ぎりて午後五時頃復衙門に歸れり。歸來余等は明日は愈々出發せんとて、荷物の整理を爲し朝二時頃漸く寢に就けり。

本日溫度は朝十一度强、正午十二度、夜十一度强

第五　翁牛特より潢河

一　旅行漸く蒙古的となる

三月二十五日。 今日は愈々出發の日なれば、午前六時頃寢床を離れ、何にくれと旅行の準備を爲す。此の日風あり前日に比して少しく寒し。余等の荷物其の他の準備は既に整ひたれども、牛車未だ來らず。午前十一時を過ぐる頃漸く牛車二輛來る。即ち一輛には荷物を載せ一輛には余等三人之に乘りて、愈々翁牛特王府に別れを告げ、北地旅行の途に上る。王府よりは特に余等の案內且つ保護の爲、二人の役人を隨行せしむ。是等蒙古役人の一人は五十歲位のタイチ(役名)にして其名をアラスランと云ふ。他は余等の府王滯在中、余等のボーイとして王府よりつけられし若者にして、年は二十二三、トブトクンと呼ぶ。此の二人は何れも駱駝に騎して隨行す。出發に際して、多數の役人官女出て、余等の行を送れり。

王府を出でゝ東方に向つて進みしが、其の地形は北に丘陵を負ひ南は廣漠たる草地を控ふ。北方丘陵の下には蒙古人の住家の點々たるを見る。王府を出て草原を行く事十清里計りにし

て、右方に當りエルタイオーラ、即ち寶山の一峰高く聳ゆるを見る。寶山の周圍附近一帶は廣漠たる草原なり。又寶山の下に一湖あり。思ふに往時は此の湖今より二層廣くして、現今の低き處、當時は水溜りしなるべし。蒙古人は此の附近をエルタイ、ノルとて、即ち寶湖の意義なり。水溜りの北方に位する丘陵の中に蒙古人の村落あり。此處に至る迄は、主として東方に道をとりしが、之よりは更に東北方に向つて進む、此處よりは地勢も亦一變し、過ぎ行く處悉く砂丘の間なり。斯して進む事五清里許りにして、途上石を積みたる堆石（オボ）を見る。更に進む事少時、峠とも覺しき處に出でたるが、此の附近少しく岩石露はれ又楡、柳の樹木等多し。暫らくして一丘陵の下に出て、其の傍に休憩す。余等の旅行も之より漸く蒙古的となるなり。

二人の役人先づ駱駝より下り、丘陵の陰に余等の座席を設け、其の附近より牛糞の乾きたるを集め來り、之に火を點じ以て暖をとる。此附近にては、王府若しくは高貴の役人以外の者は、燃料として牛糞を使用し、植物の燃料の如きは頗る贅澤なるものとす。單に牛糞と言へば穢らしき感あれども、三四日を經過したる牛糞はよく乾燥し、些の臭氣なく且つ火力強くして、又久しきに耐ゆるを以て、一般の蒙古人は之のみを燃料として用るなり。時に余等は支那の菓

子を携へ居りしを出したるに、彼等は傍より木の枝を折り來り、之を圖の如き木の二つ叉（U）とし其上に菓子を載せて燒く。此二つの叉は肉類を燒く際にも用ふ。此の時余等は湯を沸し茶をのまんと欲せしも、此附近には水なくして意を果さざりき。余はまた、烏丹城の役人より贈られたる果物を彼等に分配し、暫らく雑談を試みたる後ち、午後三時頃再び旅程を續くる程に風益々強し。暫らくは丘陵の間を進みしが、途上放牧の牛馬の草を食ひ居るを見たり。斯くして進む事少時、道は起伏せる砂丘の間に入り、或は昇り或は降りつゝ進みしが、午後四時頃砂丘を降りてチャガンマンハアイラに着し、此夜は此處に泊る事とせり。余等北地旅行の第一夜は即ち此處に明かせり。而して又、余等の蒙古家（モンゴルゲル）屋に寢ねたるも、此夜を以て最始とす。今日宿泊せる家の主人は、余等の爲めに盛んに牛糞を焚き、モンゴルアム、羊肉等を持ち出でゝ心よく饗應す。

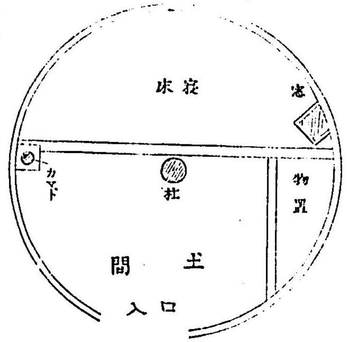
二、東戈壁の砂漠地に入る

チャガンマンハ村附近に至りては、地勢は全く砂漠の趣を呈し來る。此の邊既に東戈壁砂漠の一部にして、土地全く白砂より成り、村落は之等砂丘の陰にあり、蒙古人は斯る砂地を稱し

て Manha と云ふ、以下余は屢々マンハてふ語を用ふべきが、マンハは即ち砂漠の砂を指すものたる事、豫め讀者諸君の諒せられん事を請ふ。

蒙古家屋の構造

チヤガンマンハの村は七戸よりなる、内六戸は蒙古風の家にして、一戸は不完全なる支那風の家なり。其外蒙古的の倉庫二棟あり。各家の傍らには柳樹の枝を以て柵を造り、其下に於て牛、馬、羊等を飼養す。各戸は相倚りて群を爲し其の周圍に廻らせる檣も柳枝を以て蔽ふ。此村の蒙古家屋は毛氈を以て蔽はる樣裝置しあり。柱は一本の太き木を家の中央に立て、此の柱を境界として其の後方にオンドルを設く、(圖に就て看よ)此の家屋の構造は確かに蒙古天幕の一變せしものにして、蒙古



過渡時代にある

風の天幕より、支那風の家屋に推移する、中間の狀態を示すものなり。室内のオルドルの上には、小さき經机の如きものを置く、食事は此の机にて爲すなり。

本日の溫度は朝十一度。

三月二十六日。 朝まだきより起き出て、荷物の整理をなし了へたる後ち、此村落の寫眞を二葉撮影し此處を出發す。余の寫眞を撮影せし際、摺硝子に映り來れる景色を視き、其の度を定め居りたるに、硝子に映り來る景色の彼等に見えざれば、いと不思議なる面持ちせるもおかしかりき。

牛車の歩行大に困しむ

村を離れてより、前日と等しく土砂を進む。此附近は一帶の砂漠にして、且つ處々に起伏あれば、昇りては降り、降りては又昇るの狀態にして、且つ牛車の車輪深く砂中に沒するを以て、車を牽き行く牛の困難推知すべし。砂漠中處々柳樹の生ずるを見る、又楡の木もありて此木の殆んど人の手の達する程低き處に、鳥は其巢を造り居れども、蒙古人は此巢をとらず。途中兎の足跡ありしが又其穴をも見たり。チヤガンマンハアエラを出てゝより一も人家を見ず、滿目砂土にして、幾多の砂丘を昇るのみ、東方たゞ一の松山を望む。此附近はかの南河の潢河(シラウヒン)に向て流るゝ所なり。斯くの如く道は歩行に困難なれば、前日より牛車に付き添ひ來りし蒙古人

滿目の砂原

等、牛を追ふ事の困難なるより、之より以後は余等と同行するを欲せざりしが、漸く彼等を激勵しつゝ進み、午後一時頃某村落に到着するを得て、即ち此處に一泊する事としぬ。

余等の宿泊せるは富家にして、家族は主人夫婦と下男等なり。主人は余等の役人と一緒なるを見、始め茶等を出したる後ち、近村の親戚に用事ありと稱し、馬を驅つて出て行きしかば、其の後は專ら妻のみ出て來り、余等の用事を辨じたり。元來蒙古の風習として、役人家に來り、其の待遇等困難なる時は、主人の親戚に用事ありと稱して家を逃れ、後は妻に委ぬるを常とするを豫て聞きしが、余等は始めて此の風に接したるなり。此家は富家なれども家の構造は蒙古風にして、家の前には食事の際に用ふる、モンゴルアムを春く爲めの木の踏臼を据ゑ付けあり。臼は自然木を鑿り抜きたるを土中に埋めしものにて、杵も亦自然木を以て作りしものなり。

此の邊は東翁牛特にても、既に砂漠中僻遠の地にして、人の往來するもの乏しければ、比較的古風を存し、其風俗面白きもの多し。今其一二を語らんに彼等の器具中、木の小枝の二つ叉に、紙を張りたる團扇の如きものあり、又昨日の如き木の枝の叉を鐵にて作れるもあり。此の附近は、僅かに二三戸の家の集まり居るに過ぎず。

東翁牛特の蒙古人（男）

東翁牛特の蒙古人（女）

同マンハ中の村落（三月二十五日）

シラムレン河畔（東翁牛特）

本日の溫度は朝〇度

三月廿七日、午前七時頃、此村を出發せんとせしが、昨日迄余等に從ひ來りし牛車は、愈々此處より引返す事となりたれば、更に牛車を傭はざる可からず。即ち其の周旋の爲めに、翁牛特の役人は、早朝より駱駝に騎りて出て行きしが、附近の村落より若者及び牛車を徵發し得て歸り來り、漸く此村を出發し得たり。先づ東方に向ひて進みしが、此の邊亦例のマンハにして歩行頗る困難なり。暫くにして方向北に向て進む事となれり。途中マンハの景色一葉を撮影して又旅行を繼く、漸く進む內風俄かに吹き出だし、盛んに砂漠の砂を吹き捲くり、前進頗る困難を極めしが、尙進み行く程に左右に一小丘陵を控ゆる平地に出て、草の多く生ゆるを見たり。又此の日旅行の途中、一人の人にも會はざりしが、此の處にて始めて一喇嘛僧の馬に乘りて來るもの、及び各々駱駝に騎りたる蒙古人の夫婦に會へり。進む事十五清里計りにして、大巴林旗の山幽かに前方に見え始む。此の附近往時は河床なりしものか、今尙ほ其の保を認む可し。又蒙古人の往來するものある爲めか、砂土に轍の跡をとゞむ。途上又柳樹多きを見る、斯して進み行くに隨ひて草益々多く、放牧の牛をも見たり。此の邊にて余等の伴へる蒙古人は、其の牛疲れたれば少時休憩せん事を請ひ、即ち車を停め牛を車より解き、自由に草を食はしめ、

平地に出づ

蒙古人等は相集まりて、煙草を煙らしつゝ雑談を始む。余等は其間に附近なる砂丘の頂に昇りて眺望を試みしに、唯だ北方平地を望むのみ、他は盡く起伏せる砂丘なり。又南方に當りて一峰高く聳ゆるを見るは、之れ即ち余の過ぎり來れる寶山なり。之迄は蒙古人の往來する道を傳ひ來りしが、此處を出發し暫らく進みたる後ち、再び左方なる丘陵の中に入り、更に進む事少時にして、蒙古の某村落に達せり。

余等の警衛の任に當れる役人等は、宿泊すべき處を整へ置かんが爲め、先發隊として、駱駝を驅りて進みしが、彼等は宿舍を此の村に定めたるべしと想像して、牛車を此の村落に牽き入れたるに、役人等は此村にあらず。尚ほ進みて他の村に向ひしと聞き、止むを得ず又車を進む。此附近柳樹殊に多く、殆んと柳の林を爲すの觀あり。進む事更に十清里計り、丘陵漸く盡き廣漠たる平原に出でしが、土地低くして平坦なる砂土なり。此附近廣野遠く濶け、一物の目を遮るなく、只前方に當りて大巴林の山を望むのみ。此の廣原は既に潢河の沿岸に出でたるを證するものなれども、其河水何處を流るゝやは見るべからず。午後六時頃に至りて又一村落に達す。此附近亦廣野にして殆ど際涯なく、何處にも地平線を認むるを得ず。而して此の廣野間、處々小村落の群を爲して存在するを見る。余等は遂に此の村に宿る事とせ

しが、今宵の宿舍も亦蒙古家屋なりき。

本日の溫度朝十二度。晝十三度。

三、潢河解氷の爲め最初の旅程を變更す

余等當初の旅程

三月廿八日。 早朝此の村を出發す。余等此日の旅程は、此處より三十清里進みたる處にて潢河を渡り、前方なる巴林のニーマモリに出でんとの豫定なりき。出發に際し附近の景色及び村の風俗等を撮影し、牛車にて若者を伴ひ午後八時頃出發す。此の日の道は即ち潢河の南岸に沿ひて進み行くなり。暫らくにして草地に出づ。此の處には水ありて牛羊等相戯れ居るを見たりしが、牧場としては最も適當なる處ならん。此處に至る迄は潢河沿岸の低地を辿り來りしが、之よりは丘陵の上を進み行く。丘陵の上を漫々たる牛車にのり、潢河の流れを右に見て進みつゝありしが、ふと地上に目を注げば土器の破片の散亂しあるを見る。即ち直ちに車を下りて、それ等の土器を拾ひ見たるに、果して素燒のものにして、又石鏃を作りたる際の破片をも見出しぬ。此の土器は余等の曾て英金河畔にて發見せるものと等しきものなるが、之に據りて考ふるに、當時潢河流域一帶の地に、石器を使用せる民族棲息せるを認め得べく、此處にて

潢河沿岸の古土器

喇嘛廟

黄河解氷の爲め旅程を變更す

愈々其の觀念を確むるを得たり。而してこれ等の民族は廣き意味に於ける鮮卑民族ならん。

又た丘陵に沿ひて村落ありしが、盡く蒙古の家屋なりき。二十清里計りにして一喇嘛廟に達す。此は近時新たに建てられたるものにして、華麗なる寺なり。此處に車を停め、寺に入り茶を請ひて飲みしが、四五人の喇嘛僧出て來りて話しかけたれば、余等は即ち蒙古語を以て之に答へたるに、彼等はいたく驚きたりき。彼等と少時談話せる後此處を出發せしが、暫らく進み行くや、先發せし蒙古の役人の一人は、途上に待みて余等の來るを待ちつゝありき。

即ち其の案内するに任せて進み、午後四時頃前の嘛喇廟より七清里計り距りたる、ホルヒンソムと稱する寺の名と同名の村に入る。多數の蒙古人來りて余等と談話を交べぬ。

前にも述べたる如く此日の豫定は、前方に見ゆるニーマモリに至る考なりしが、此の時には黄河（シラムレン）の結氷既に解け、河水氷塊を流し、且つ水量を増し、其の危險甚しかりしかば、遂にニーマモリに出る事を中止し、此村より更に一百清里計り進みたる處より、大巴林の方面へ渡る事に決せり。本日の行程二十七清里。

黄河（シラムレン）は西方に進むに隨ひて、左右の丘陵次第に接近し、其の間の低地漸次狹まり、殊に前に余等の憩へる喇嘛廟のある附近は最も狹き地點なり。尚又此の附近には潴水多く、小柳其の中に叢生す。又た前夜一泊せる村落より、此の喇嘛廟に至る途上には、楡の大木多く林を爲せり。又其間に存在する蒙古人の村落にも、楡の木のあるを見しが、之に因りてシラムレンの兩沿岸には、昔日樹木の多かりしを推知し得べし。又喇嘛廟に至る途中に一小溪流あり。こはシラムレンに注ぐものにして、余等の渡りし際には、其の氷解け濁水を流しつゝありき。

ホルヒンソム

現今の村落は悉く丘陵の上、或は其れに沿ひたる處に位し、又石器時代の遺跡も、皆丘陵の上にのみ存在し、低地には全く見るを得ざるが、之に因つて考ふるに、今日低地を爲す處は、往時水の流れ居たるものなるべし。

抑も、ホルヒンソムの地形たる、前はシラムレン河を隔て、大巴林のニーマモリの丘陵に相對し、風景絶佳なるものあり。又黄河（シラムレン）の河幅は、此の附近にて最も接近し、東翁牛特より大巴林に至るには、此の村よりシラムレンを横ぎるを、最も適當とするを以て、余等と同行せる東翁牛特の役人等も、最初より此處を渡らんとの豫定にて、種々方法を悉して試みたるも、遂に前述の狀態にて渡るを得ざりしなり。

四、黄河々畔に於ける石器時代の遺物

石器時代の遺跡

三月二十九日朝。 此村を出發せんとせしが、余等は其に先だち、此村より三清里計り南方なるマンハの間に、石器時代の遺物、多く存するを聞きしかば、之を知れる一青年を案内者として、彼と共に此村を出て、其の遺跡を志して進む。道は砂漠の起伏せる丘陵の中を、或は上り或は下りつゝ進み行くなれば、足は砂中に埋もれて歩行頗る困難なりき。漸くにして目的地に達し、其の遺跡の狀態を見るに、遺跡は其の周圍砂丘を廻らし、其の中は廣き平地をなすの處なり。而して其の平地の中に、高さ二間位の丘ありて、丘の上には元家屋の臺石として、石垣を築きありしものゝ如く、數多の石の散亂せるを見き。而も斯かる石は、此の砂漠中に有り得可からざるものなれば、他の地方より運び來れるものなるは明なり。遺跡は頽れ〳〵て、或部分は砂中に埋沒し、或る部分は露出せり。而して其の低くなり居る場所は、昔時水にてもありし處の如く思はる。余等は此の遺跡にて土器の破片、石鏃の材料、及び石鏃骨片等多く散亂するを見たり。此外鐵にて作れる刀の破片、女子の耳飾等も多く、又石斧をも發見せり。之等の骨片動物の牙、及び大なる鹿の角を存するは、當時此處に棲息せる民族の、動物を食用に供したるを證するに足るべく、又今日は其れを見ざれども、昔時此の附近に鹿の棲みたりしを確むるを得ん。尙又此遺跡に存する遺物に考ふるに、當時此處に居住せし石器時代の民族は、自ら石斧及び石鏃等を、製作使用し居たるを證すると共に、既に金屬器の使用を知り居たる事も明かなり。又此遺跡に存する土器の種類を見るに、日本、朝鮮等の古墳より發見せらるる、所謂祝部土器の如きものあり。そは即ち瓶、壺、皿、鉢等の類なるが、其の質は素燒にて鼠色なるあり、赤なるあり。而して此の鼠色の土器を蒙古人は、シャラノブンスと稱し、赤燒のものはチョロブンスと呼ぶ。且之等の土器には一種の模樣を着く、人手貝の如き形を爲したるもの、及び✺の如きものもあれども、其多くは𠀋の如きものなり。余は此の遺跡を調査する迄は、潢河方面に於ける石器時代民族の製作使用したる、土器に就て知ること甚だ少なかりしが、此の大にして且つ完全せる遺跡に接するを得、始めて其存在狀態、及び如何なる種類のものなるかを明かにせり。且つ亦、石器と共に發見せらるゝ土器の形式模樣等に就ても深く知らざりしに、茲に於て始めて其の形式及び模樣等を審にせり。即ち一度之等重要なる發見を爲せる以上は、旅行の途次之等の一小破片を得るも、直ちに其の當時のものたるや否やを識別し得べきに至れり。余等は此の遺跡によりて、始めて此の地方に於ける、有史以前の狀態を知り得たるなり。此の附近には此の外にも斯かる遺跡多かりしが、何れも砂の丘陵を後方に控へ、前方及び周圍等低き土地にして、之等の低き所は昔時水のありたる處なりしは、地勢其

石器と共に鐵器土器を存す

他によりて思考せらるゝ處なり。余等は之等の調査を爲し了へて前の村落に歸り、直ちに旅程を繼けたるが、時に午前十一時頃なりき。

黄河の風景

ホルヒンソムの村落を出發せる後は、黄河南岸の丘陵を傳ひつゝ進みしが、此日の天候は前日に引かへ、西北方より吹き來る風強く、砂を飛ばして歩行頗る困難せり。進む事四里計りにして一喇嘛廟に達す。廟をホルヒンソムと云ふ。即ち知る、昨夜宿泊せる村落は、此の喇嘛廟の名によりて、其の名稱を得たるものなるを。此の喇嘛廟の存在する丘陵は、黄河に最も接近し、即ち黄河の流れは、其の下に波を打ちつゝ進み行くなり。又黄河の河水中に、幾千幾萬ともその數を知らざる程の雁群、或は飛び或は泳ぎつゝある奇觀云ふばかりもなし。此の丘陵にても亦石器時代の遺物たる、土器の破片等の諸所に落ち散りたるを採集しつゝ進みしが、喇嘛廟より一清里計りにして、丘陵を下りて平地に出て、黄河に沿ふて河岸に近く水の流るゝを見る。其の上に雁の多く集まりて、魚を漁りつゝあるも面白く、加ふるに河岸水草を生じ、實に一幅の畫繪に對するの感ありき。

黄河は今尚ほ氷に閉ぢられたる處あれども、既に氷解けの濁水を流し居る處もありき。河水は黄色を呈せり。暫く進み行く中に復丘陵に出て道漸く上りとなる。時に風愈々烈しく土砂

フービンコロを渡る

蒙古家屋推移の第二期

を飛ばす事しきりなり。途上只マンハの丘陵と、則を生ぜる灌木とを見るのみ。更に丘陵を下り、川に沿へる平地を進みしが、前方に當りて大巴林の丘陵明かに見え來る。丘陵と丘陵との間即ち黄河の河幅は、此附近に於ては三清里計りなり。ホルヒンソムより二十清里計り進みし頃一河の流れに達す。蒙古語にて此河をフービンコロと稱す。此の河は、南方に聳ゆるトロガイ、ヌ、オボ山に源を發し、黄河に注ぐものにして、此時には既に氷解けて水流となり居たるが、水の深さを知る可からず。即ち駱駝に騎し居る蒙古の役人等、先づ之を渡りて其の深淺を量らんとせしに、駱駝水勢に恐れて容易に進まず、漸くにして彼等は彼岸に達し、其の深淺を知り得たれば、其の尤も淺き處を余等は牛車にて渡れり。フービンコロを渡りてよりは、蒙古の人家點々散在するを見る。又シラムレンに沿ふて一小沼澤あり。其中に葦等多く生じ、牛の群の其處に遊び居るを見き。此附近に散在する蒙古人の家屋は、蒙古風支那風との混合せるものなり。即ち屋根の蒙古風なるかと見れば、壁は支那風に四角形になり居るが如し。この家屋は蒙古風の家屋より、支那風の家屋に推進せんとする、第二の時期を爲すものにして、即ち一昨夜余等の宿泊せる家の構造は、其の變遷の第一期と見るべし。風を冒して進む事七清里計り、午後四時半頃トロガイ、ヌ、オボなる村に着し、今夜は此村に一泊する事に決す。余等

既に支那化せる翁牛特

黑水

コノンコル

の宿泊せるは此の村にての富家にして、其の家屋の構造を見るに、天井にのみ蒙古風を存し、其の他は總て支那風の建築なり。主人は性質最も溫良なる人にして、蒙古風の竈を持ち來りて湯を沸したる後、支那風の御馳走を作りて余等に饗しぬ。主人はまた多少支那語を解す。余等の之迄過ぎ來れるは、東翁牛特中にても最も邊鄙なる部分にして、隨て未だ多く古風を存したりしが、此村に入るに及び、此附近の既に支那風の影響を蒙むれるを悟れり。斯して此の夜は快く此の家に宿りぬ。

本日の溫度は朝七度、正午二十一度、夜七度

三月三十日、午前八時四輛の牛車を率ゐてトロガイ、ヌ、オボ村を發す。丘陵の裾を西北方に向ひ、シラムレンに最も接近せる道を進む。此の附近土地低く、蒙古人等の牧場にして草あり水あり。又處々人家の散在するを見る。河岸には雁群多く飛び交ふを見き。此の日天氣晴朗なりければ前方大巴林の方よく望まれ、其村落の散在さへも見えき。三里計りにしてハラオッソに達す。ハラは黑オッソは水にして即ち黑水の意なり。此の河はシラムレンに注ぐ一小水流にして、此處に至る迄は砂土の下を流れ、此處に至りて始めて其の流を現はすなり。ハラオッソを渡りて復び平地を進み、七清里にしてコノンコルと稱する河に達す。河幅二町

支那人の侵入

計りの大河にして、當時は極めて僅少の水流るゝのみなりしが、一朝雨期に際會すれば忽ちにして二町の河幅となり、到底渡るべからざるに至るとぞ。此の河は流れてシラムレンに注ぐものなり。此河を渡りてまた丘陵を昇り、丘陵の上を進む事五清里にしてコクスット村に達し、其の夜を此處に送る事とせしが、時に午後二時なりき。コクスットの村はシラムレンに接したる丘陵の上に存在す。此丘陵より眼を放てば、大巴林の方面より西南に及びて一山脈の走るを見る。蒙古人の言ふ處に據れば、此の山脈の南方は、既に支那人の浸入する處となり、其の附近の部落も、盡く支那人のみにして、一人の蒙古人も之れに居住するものなしと。而して其の附近の地はマンハに非ずして、支那人は畑を耕し居るとぞ。之に據つて是を見れば、此附近の豐饒なる土地は、既に支那人の浸入する處となり、蒙古人は唯だ砂漠の砂地にのみ住するの狀態なり。されば余等の翁牛特王府を出發せし以來、砂漠をのみ旅行し來れるは、即ち蒙古人の部落のみを傳ひ來れる者にして、旅行は困難なりしも、我等旅行の目的たる調査の上に於ては、最も有効なる者ありしなり。此の村の附近にも、亦石器時代の遺物散在するを見、此處にも亦石器時代民族の棲息せるを知るを得たり。余等此村に到着せる後ち、諸種の調査を爲しぬ。

本日の溫度朝四度、正午十六度、夜十三度、

五、潢河渡渉の困難

三月三十一日。午前九時コクスツト村を出發す。四人の蒙古人は四輛の牛車を牽きて進む。道は丘陵の上を行きしが、今日も亦風烈しく土砂を飛ばし旅行困難なり。途中又土器の破片等を得たり。十清里計り進みたる頃、丘陵漸く盡き低地に出で河岸に沿ふて進む。此附近は草地にして、牛の群三々五々草を食ひつゝあるを見たり。此の途中に始めて支那人二三に會ふ。尙進む事十清里計りにして、ホーロクの前岸に達す。此處の丘陵の上にて亦土器を得たり。此の附近潢河の河幅最も狹く、三四町位にして北岸に接すべく、大巴林に最も接近し一の小島あり。此の島は河中に岩石の露出せるものなるが、河の北岸即ち巴林の方の岸と、此の中島との間に一石橋を架す。南岸に立ちて北岸巴林の方を眺むれば、此の小島の上に一小堂宇の如きものあるを見る。又其の附近に石を積みたるオボをも認む。石橋は南岸より明かに見るを得ざれども、我が東京の萬世橋の如く、石の欄干等をも見るべし。往時は南岸即ち翁牛特方面の岸と此の中島との間にも、石橋を架したりしが今は之れ無し。然れども南岸にも亦往時の橋溜りの跡とも見るべき、大石の岸に沿ふて轉々存在するものあり。斯く石橋の架し居

潢水石橋を沈む

る故を以て、支那人は此附近を巴林橋と稱し、蒙古人はホーロク、ヌ、ハシラガと稱す。此處は遼時代の所謂、潢水石橋のありし場所にして、當時は立派なる石橋を架しありたる事は、遼時代の宋大中旅符九年の薛映記に見るも明かなり。現今の石橋は近代に至りて架せられたるものにして、即ち北岸と中島との間のみに架し、南岸の方には架せられざりしなり。

抑も潢河は水量少なき時には、中島と北岸との間即ち石橋の架しある部分は、盛んに水流るれども、中島と南岸との間は水少くして、徒歩にて之を渡り得る程なれば、若し水量少なき時ならば、南岸と島との間を徒歩を以て、北岸と島との間は石橋によりて渡るを得べし。シラムレンを渡る爲には、最も容易なると共に最も距離近く、普通翁牛特より大巴林に向つて行く者、專ら此の道に據る處なるが、此の日余等の南岸に達せし際には、氷既に解けて水勢急に、常には水無き南岸と島との間も、濁水漲りて氷塊を流し、容易に渡り得べしとも思はれず。余等の巴林橋南岸に達せんとせるとき、一人の年若き支那人牛を率ゐて余等の前に來り、跪きて我が父を助け給へと、號泣しつゝ河を指して連呼す。余等初め其の何の故たるを解せざりしが、其の語る處を聞けば、此の青年は父と共に牛車を以て此の河を渡らんとし、河の半ば迄達せし時、水勢激しく加ふるに水深ければ、見る〳〵押し流され、加之厚さ一尺計りなる氷塊流

濁水漲りて渡るを得ず

支那人の溺死

れ來りて牛車に衝突せしかば、何かは以て堪るべき、牛車は廻轉しつゝ押し流され、父も亦水中に捲き込まれたるなりと。余等も亦其水勢急なる爲め渡る能はざりしが、若し一刻遲かりせば、此の支那人と同じ運命に陷りたるやも計られざりしなり。余等一行の翁牛特の役人等頻りに對岸に駐屯する蒙古兵に合圖し、相共に苦心盡力せるも亦如何ともすべからず。目前に大巴林を望み見つゝ、再びコクスットに歸るの止むを得ざるに至れり。此の日の行程往復四十餘清里なり。

再びコクスットに歸る

本日の溫度は朝十度、正午十二度、夜十四度、

コクスット滯在

四月一日。 潢河の水流斯の如き有樣なれば、暫くは到底之を渡るの見込なく、余等はコクスットに滯在するに決せしが、徒然なればとて、余の妻は幼兒を負ひ、余及び蒙古人の喇嘛の十三歳なる小坊主と十四歳なる小娘との五人にて村を出で、南方に見ゆるマンハの丘陵を指して散歩に出掛けたり。行く事二清里弱にしてバーロンコルと稱する幅七間位の一小流あり、此の河は漸く氷の解けたる處もありしが、尙氷の張り居る處を探りて之を渡り、斯くして丘陵に達せり。村落よりバーロンコル迄は土地平坦なりしも、河を渡りてよりはマンハの砂丘にして、此の丘陵も或は高く或は低く、且つ處々に凹處あり。蓋し此凹處は昔時沼澤たりし跡ならんか。而して其の沼澤の岸の上とも思はるゝ邊にて、石の鎗及び石の剃刀等の破片二三片を得たり。土器の破片はバーロンコルを渡る前に、一二片を拾ひたるに過ぎざりしが、之等の遺物に依るも、此邊に往時或る民族の居住し居たるは明かなり。余等の伴ひ來れる小坊主と小娘とは、頗る天眞爛熳にして、相競ふて蒙古の唄を歌ひ、又一般蒙古人の好む處なる、相撲などを試みて相戯れ、其無邪氣なる實に愛す可きものなり。此の丘陵を見終りたれば、宿舍に歸らんとて河岸に出でたるに、先に渡りたる時は水の流れを見ざりしを、今歸り來れば僅かの間に、氷解けの水流れ居りて渡るを得ず。斯の如き事は蒙古地方を旅行する人々の、最も注意を要する事なるべし。余等は小兒を伴ひ居れば殆んど途方に暮れたりしが、時に一支那人彼岸に小兒を驅馬に乘せ進み來りしものあり。彼も亦氷流に惱きたるものゝ如く、彼方此方と其の渡る可き處を探しつゝありしが、遂に意を決し其の小兒を自ら負ひて渡り來り、此支那人はまた余等親子三人を、順次負ひて彼岸に渡し呉れたり。小坊主と小娘とは渡るを得ず、非常に困り居りしものゝ如かりしが、軈て小娘は小坊主を脊に負ひ、健氣にも水中に飛び込み、無事に渡り了へたるは愉快なりき。余等は彼の支那人に謝禮として、支那の銅錢四五枚を與へしに、彼は非常に喜びたりき。概してこの附近に住む支那人は質朴な

無邪氣なる小娘と小坊主

忽ちにして氷解く

り。之れを見たる小坊主と小娘とは、多くの錢をやるを不思議に思ふ樣なる面持し居たり。

余等の歸村せるは午後一時頃にして、昼飯をなしたる後來訪の蒙古人等と談話せり。中に一人、立派なる絹の衣服を着けたる歳三十四五の蒙古人あり。三年前ロシア人に伴はれて哈爾賓に行きたりし事を語る。元は喇嘛僧なりしが今は俗人にして結髮す、外人に接せる爲か頗る怜悧にして談話亦巧なり。余等は此の蒙古人より諸種の事を聞き得たり。他の蒙古等人は還俗せるものなりとて彼を卑しむ風ありき。思ふに三年前ロシア人に伴はれて哈爾賓にありと言ふも、實は日露戰爭の際に露人に使はれたるものならんか。如何となれば、彼は蒙古人にして多少の支那語を解するを以て、蒙古人にしてロシア語を解するものとの間に立ちて通辯するに適するを以てなり。彼は其身に諸種の美麗なる裝飾品を附けありしが、其腰部に五銖錢一枚をつけ居たりしかば、余等は此錢に注目し、何處より其を得たるかと問ひたるに、彼は此の附近なるマンハの丘陵より得たる旨答へたり。此の問答によりて、余等は此の附近なるマンハの中に五銖錢の遺り居るを知れり。余等は即ち之れを譲り受けたき旨彼に話したるに、彼は快く承諾して余等に其を贈れり。余等は曩に彼の國公攻に於て一枚の五銖錢を得たりしが、此處にてまた之を得たるは、學術上最も注意すべき事に屬す。此の夜此の村に於て蒙古の樂器に堪能なる男の、其の樂器に合せて蒙古歌を歌ふを聞き、樂しく其の夜を過せり。此の蒙古の樂器は、四絃琴にして胴は木を以て作り八角形をなし、其の上に革を張り、胡弓の弓を以て之を彈奏するものにして、蒙古人は之を稱してホーレと云ふ。

露人に使はれたる蒙古人

此附近に五銖錢を存す

蒙古の樂器

本日の溫度は朝は九度、正午十二度。

四月二日。また晴天なり。昼食を了へたる後、此の村の麓より、シラムレン河畔の低地に至る。妻は河に下り立ち、小兒の汚れ物及び其他の洗濯を爲したるが、其の際此の附近を雁及び、其他の鳥類の飛び交ふ樣いと面白し。又頭の赤き鶴（？）あり、余等の頭上を天空高く、飛び廻り居たるも見たり。此の日は何もなす事なく、川待ちに一日を費せり。

本日の溫度は朝八度、正午十九度、夜十四度。

四月三日も亦此村に滯在す。今日に至る迄、爲す事もなく此の村に滯在せしが、余等は此の附近、亦石器時代の遺跡あらんと思ひ、村人等に其の有無を訊ねるも何れも秘して教へず。止むを得ざれば同行の蒙古役人に嚴命し、以て案内者を探さんことを命じたるに、漸くにして吾れ其の場所を知れりと云ふ男二人出て來りしかば、彼等に案内せしめて四時頃出發せり。其の遺跡は村を距る東東五六清里なる丘陵の上にあり。此の丘陵に昇りて眺むれば、北岸大

無駄に苦しみ石器時代の遺跡を調査す

遺物存在の狀態

日本の遺跡と相似たり

巴林の方手に取る如くに見るを得べし。又シラムレンの河水は、昔時此の丘陵の直下を流れ居たるものならんと考へらる。此處にて發見せらるゝ遺物は、土器、骨片等の破片にして、其の場所は砂地の斷面なり。此の露出せる斷面に就て注視するに、當時の遺物は多く此の土中に、包含せられて存在し居るが如く、而して其の包含せる狀態は、現今の地上より二尺五寸計りの地中にして、此の遺物を包含せる土地の厚さは、偶然にも我國に於ける、石器時代遺物包含の狀態と、略同じきものあるが如し。即ち此の遺物の上を蔽ひ居る二尺五寸の土は、年代を意味するものにして、當時彼等の棲息し居りたる際には、即ち上部の二尺五寸の地は無かりしに、爾來年月を經過する間に、漸次此の狀態を呈するに至れるものなり。之に因りて考ふるに、當時の遺物は、現今の地上には見るを得ず。皆二尺五寸の地中に存するものなれば、暴風雨又は雨水等の作用にて、其の遺物の存在する丘陵の、表面洗ひ落さるゝ場合、始めて露出するものにして、若し之等自然の作用にして行はれざる時は、永く地中に埋沒し、決して現はるゝ事なきなり。此處に發見したる動物の骨片を手に取りて、仔細に之を點檢すに、其の碎け方は、日本の石器時代遺跡に存在する骨片の碎け方と同一にして、乙は當時の民族は、動物の髓迄食用としたるを證するものなり。又此處の遺物中には、石鏃の破片の外、小刀の鍔の如きもの、陶器の破片等もありて、余等は同行の蒙古人に對ひ、此の遺物を殘せるは、何民族なりやと問ひたるに、彼等は此の遺物は、彼等の祖先の遺せるものに非ずして、グヰル人の遺したるものなりと答へぬ。余は之等の調査をなして、其の日は宿舍に歸れり。

クヰル族の逃動

意を決して潢河を渡らんとす

愈々渡り初む

本日の溫度は朝十一度、正午十三度、夜十五度。

六、潢河を渡る

四月四日。 愈々潢河を渡る事に決す。前日に於ては、潢河を渡る事は全く絶望し居たりしが、此の朝に至り、余等と同行せる、翁牛特の役人及此の村の村長熟議の末、遂に意を決して之を渡る事となれり。午前九時頃宿舍を出でゝ進む、此の日の同行者は村長、及び村第一の口きゝの男、車夫、水先案内者等總て九人なりき。丘陵を下り東方に進む事二清里計りにして水邊に達す。河岸に立ちて眺むれば、處々氷の張り居るを見れども、水勢急にして容易くは渡る可くも見えざりき。先づ水先案内者は、馬を河中に乘り入れて淺瀨を測りたるに、其の渡り得べき事を知りしかば、即ち余等の一行續いて川を渡る。余は馬に乘り幸子をば彼の

北滿洲迄行きしと言ふ男抱きて馬に乘りて進み、余の妻は牛車によれり。余の愛兒を抱ける男は軀幹長大にして、力亦強く且つ此の村にての口きゝなり。村長及び其の若者等は何れも馬に騎し、長き竿をもちつゝ之を渡る。余等の河を渡るに先だち、翁牛特より來れる役人等は駱駝より下り、珠數をつまぐり觀音菩薩を念じ、此河を無事に渡らせ給へと唱へたりき。河は一丁計りの間、既に氷解け河水盛んに流る。斯して一丁計りを進めは水漸く深く、水は馬腹に達し、且つ流急なるに時々大なる氷塊流れ來り、その危險言ふべからず。更に一丁計り水中を進めば、河中洲を爲す處あり。其の前方は氷の上を渡りたるが、漸く解け始め、氷厚けれども、處々に解け初めて凹みを爲せる處あり。一旦過つて馬脚を此の凹處に入れんか、再び出づるを得ず。危險甚しければ、水先案内者は前に進みて、余等の進む可き通路を査べつゝ導き、余等また相呼應して互に警戒し、辛じて此の氷上を過ぎ、漸く彼岸に達せり。この邊潢河の河幅は四清里計りにして、其の水流急なる際は、之を渡る事企て及ばざるなり。余等は九死に一生を得て、彼岸に達したるなれば、相互に無事を祝し合へり。余等の達せる河岸は、既に翁牛特王の管下にあらず、全く大巴林王の管轄に屬す。翁牛特より隨ひ來れる蒙古の役人、先づ此處の村の役人に、余等の來れるを通ぜしかば、此の村の小役人及び若者等、此處迄余等を出

翁牛特の役人親音佛に無事を祈る

無事彼岸に達す

大巴林に入る

迎へたり。即ち余等は彼等と共に其の村に入り、タイチの家に一泊する事とせり。

既に王府の管轄を異にせるより、翁牛特の役人等は、余等の事を此村の役人等に托し、倉皇別を告げて辭し歸れり。彼等の歸るに臨み、余等は彼等に夫々の贈物をなし、又此の日余等と行を共にせる前岸の村人等にも謝禮せり。彼等は余等に別を告げ、再び潢河を渡りて歸り行けり。

最初余等の計畫にては、翁牛特王府よりニーマモリ迄二三日の行程とせしに、余等の此處に到着せるは、翁牛特を發して以來、既に拾日餘りを過ぎたる後なりき。之れ畢竟するに、シラムレンを渡るの困難なりしに因る處多しと雖、亦以てマンバの旅行の、如何に困難なるかを知るに足らん。余等の此の村に入れるは午前十一時頃なりき。

七、潢水石橋

余は此の家にてモンゴルアムの食事をなし、茶を飲みたる後ち、一蒙古人と共に馬に乘りて、翌日、前岸より望み見たる巴林橋を調査せんとて、妻と小兒は宿舍に殘して出發せるは午後一時頃なりき。道は主として丘陵の上を進みしが、十清里計りにして丘陵を下り河岸の低

巴林橋の調査

地に出づ、此處にて毛氈を以て蔽ひたる一軒の蒙古家屋を見たり。此の家の構造は純粹の蒙古風にして、余は此の時始めて毛氈にて作れる蒙古人の天幕を見たるなり。余と同行せる蒙古人は此の家の主人なれば、余は其に馬より下りて此の天幕の中に入る。彼の主人は當時病氣なりし爲め、其の雇人を以て、代りて余と同行せしむ。余は此家を出發し、再び丘陵の上の砂土に出て、馬を驅る事十清里計りにして、巴林橋處在の地に達せり。

巴林橋の附近は、シラムレンの河幅最も狹き處にして、兩岸の間巴林の岸に近く、一小島あるも前に記きたる處なり。此の日は島と北岸、即ち大巴林方面の岸との間、水流盛んにして島と南岸との間にも水多かりき。然れども北岸と島との間には、石橋を架し居れるが、石橋には欄干を附し、頗る立派なるものなりき。橋を渡りて中島に至りたるに、其の上に一堂宇ありて、其中に二個の碑文を存せり。こは此橋を架したることを記せるものにして、其年代は『大清咸豐六年歳次丙辰中秋月』と刻し、此の橋は巴林王の修めたるものなるを記しありき。碑文の一は蒙古字、一は漢文を用ゐて記しあり。又中島の橋に接したる處に一小碑あり。こは古碑にして今や其文字磨滅して、如何なる事を書きたるかは知るを得ざれども、其の題字の處にて「龍」「界」「碑」等の數字纔かに認めらる、以て其の古き年代のものたるを知るべし。又現今石

漢水石橋

橋を架し居る處より、二三十間計り東方に當りて、三四個の大石轉じ居るを見る。こは當時の橋の橋溜りかとも思はるゝが、研究の價値あるものと云ふ可し。此處は即ち遼時代に於て、所謂漢水石橋の架しありし處たるは明かにして、當時遼の上京に至るべき公道たりしなり。

即ち宋大中祥符九年の薛映記に記する『……三十里度漢河水石橋旁有饒州唐於契丹營置饒樂今渤海人居之……』とある是れなり。余は此處にて諸種の調査を爲せり。橋側に蒙古人の家二戸あり。一は通常の蒙古人なるが、他の一には大巴林王府より、石橋の番をなさしむる爲に置かれたる蒙古の兵士二人計り居りしが、こは月々交代するものなりと云ふ。此の二人の蒙古兵は多少支那語に通じ、彼等は強き眼病に惱みありしが、余に目藥を賜はれなど言ひたり。余は暫らく彼等と談話を交へ、又此處の調査を爲したる後、馬を早めて前の蒙古人の天幕に至りしに、主人は余の爲に餅粉の餅等支那風の御馳走を作り、茶を出して余を歡待せり。彼は妻及び姿、雇人等の家族を有し。牧畜を業とし馬、牛、羊等を飼ひ居る者なり。其妻は眼病に罹り居りて、余に藥を賜はれと請ひしかば、余は今持合せなければ、余の宿舍に來らば與へんと言ひ置けり。余は主人と雜談を交じへつゝある際、ふと余の傍を見たるに見事なる磨製石斧一個其處に横はりありき。余は主人に向ひ、此の石斧は何處より得たるかと訊きし

石橋の番兵余に藥を乞ふ

磨製石斧を得たり

潢河の夕

に、彼は數年前此の附近のマンハの一なる、オーランマンハと稱する處にて之を拾ひしが、其形狀奇なれば即ち家に持ち歸り、今日に至る迄秘藏せるものなるが、大人之を望まれたれば即ち獻せんとて快く余に贈れり。更に余は主人を伴ひて此の家を出發し、河岸に沿ふて歸路に就きしが、時に夕陽西山に春かんとし、寒さ少しく加はり來りしが、此の夕景色の中をシラムレンの河水の流るゝ音、其の水上に雁の飛び交ふ樣等、實に朔北の俤を偲ばれ、身異境にある感を深からしめぬ。斯くて午後五時頃宿舍に歸り、其の夜は此家の主人等と面白く語れり。

本日の行程五十清里餘なり。

本日の溫度は朝八度。

第六　大巴林より阿嚕科爾沁

一、潢河より大巴林王府

四月五日。 今日は大巴林王府に向つて、出發すべき豫定なりしが、尙此の附近の丘陵を調査せん爲め、此の日一日此の村に滯在する事とせり。即ち午前八時蒙古人ムンクを伴ひ、此附近調査の目的を以て散步に出づ。余等の散步に出づる前に當り、蒙古人の眼病に惱む者其他

蒙古人の診察投藥に忙殺せらる

乳餅を贈る

潢河々畔の遺物

諸種の疾ある者等、余等の宿舍に詰め掛け、何卒藥を賜はれと切望して止まざりしかば、彼等にそれ〳〵藥を與へたるが、附近蒙古人の家よりも我等を招き、病人の診察を請ふもの多く、余等は其の診察施藥に忙殺せらるゝ程なりき。蒙古人は此の謝禮として乳を固めて作りたる乳餅を贈り來る。蒙古人は是をホロートと稱す。

漸くにして宿舍を出で、一里計り進みてマンハに達す。其の頽れたる部分に於て、土器の破片の散亂しあるを見たりしが、それ等と共に鐵の矢の根をも發見せり。之等は共に同時代のものたるや確かなり。更にマンハの高き丘陵に向つて進みしが、此の途中にも土器の破片の散亂するを見たりき。此處より堆石（オボ）のある山の西山に登り、處々のマンハの頽れたる跡より土器の破片等を拾へり。その位置は河岸を距る五清里計りにして、マンハの丘陵としては最も高きものなり。此のマンハを蒙古人はウスツマンハと稱す。丘陵の頂より眺むれば、前方に當りシラムレンの流を超えて、東翁牛特の丘陵山脈を望み得べく、又後方に聳ゆる山をも見る。此の丘陵にも亦石器時代の遺跡を存し、土器の破片の中より石鏃一個と他の石器類を拾ひたるが、他のマンハにても鐵鏃一個と五銖錢の半ば壞れたるものとを得たり。此の他喀喇沁の項に說明せると同じき、鐵鍋の破片をも發見せり。之れ以外に最も面白きは、蒙古人の所謂 Temur

クヰル民族の鍛冶

ni hnso. 即ち鐵屑の多く出る事なり。蒙古人等の言ふ處に據れば、昔し此邊に居住せるクヰル人は鍛冶をなせしものにして、之等の鐵屑は即ち該民族の殘せる物なりと。余は曩日拾得せる鐵器類及び、此の日得たる鐵器類とを綜合して、之等の遺物を遺せる民族の、當時自ら鍛冶をなせる事を明かにし得たり。且つ此の地にて五銖錢を得たるが如きは、最も注意すべき事に屬す。

雪降り出づ

余等は此の附近の丘陵を、或は登り或は降りて調査に從事せしが、諸種の採集品を得、此處の調査を結了せるを以て、歸途に就けり。途中オボのある山に差し懸れる時、雪降り出て、見る〳〵前岸翁牛特方面の山々は、白妙の雪を戴き最も美しかりき。歸途二三土器の破片等を見たるが、余等は低き丘陵を過ぎて午後三時頃宿所に歸れり。行程往復十清里餘なり。

蒙古の羊飼

余等の家に歸りたる後、雪は益々降りしきりたるが、此家の小娘、小兒等は羊の乳を絞り、叉之を天幕の中に導き入れて、其の介抱をなすに多忙を極むる樣なりき。余等は之を見て始めて、蒙古の羊飼ひの狀態を知るを得たり。此家の主人は此の村の役人にして、年齡五十計りなるが、其の妻は主人より二三歳年上なり。共に親切なる人々にして能く事理を解す。殊に其の妻は多少蒙古文字の讀み書きを知り居れるが、蒙古婦人にして文字あるは、實に稀なりと云ふ

文字を知れる蒙古婦人

可し。彼等に兒女二人あり、上なるは女にして年十七八、下なるは男の子にして、共に怜悧なるが如し。其の夜は彼等夫婦と愉快に語りて寢に就きぬ。此の朝目藥を與へたる一老人其の謝禮として、此附近マンハの中より得たりと稱する、稍完全せる土器の壺を贈り來る。余は此の時迄完全せる土器を見ざりしが、茲に於て始めてその全形を見るを得たり。尙此の附近に於て、古錢を發見せらると聞きしが、此の日余は二十枚許りを得たるに、其の中八枚は唐の開元通寶なりき。

古土器及古錢

本日の溫度は朝四度、正午七度。

大巴林王府に向ふ

四月六日。 愈々此の村を出發し、大巴林王府に向つて行く事に決し、早朝より牛車の來るを待ちしに、午前十時頃四輛の牛馬車來りしかば、即ち家人に別を告げて此家を出發せり。主人夫妻は餞別として、喫煙草入を贈られしが、こは妻君の自製にかゝるものなり。此處を出でゝより東北方の間に向つて進みしに、三清里計りは河岸と等しき低きマンハなれども。四清里計りにしてマンハの丘陵に出づ、此の丘陵は前日踏査せるものにして其の上にオボあり、之等の丘陵に沿ひて進む途次、土器の破片の點々散布するを見たり。進む事十清里計りにしてホトックン、アイラに達す。余等は此處にて中食を爲す考なりしが、蒙古人等は余等に向つて、荐

ホトックン村

りに此處に一泊せん事を請ふ。其理由を尋ねたるに、此處には此の日牛車も人足もなければとの事なりしかば、止むを得ず一泊する事とし、伴ひ來れる四輛の牛車及び人足をば此處より歸へせり。

ホトックン、アイラは、西にバイン山を望み、丘陵の間に存在し、牧畜盛にして余等の宿泊せる家の如きは、四百頭の山羊を飼養し、家人等は其の世話に忙はしき樣なり。又た此の地には支那の商人等も居住す。本日の行程僅かに十清里なり。バイン山は、蹇日翁牛特マンハの處より東方に眺め得たる山なるが、此の山脈は東方より起りて、西南に向つて走るものにして、其の走り居る途中、五清里計りの西麓の丘陵に一村あり。オステアイラと稱す。

チヤガンムレン往時の黑水河

本日の溫度は朝七度、正午十五度。

四月七日。 午前九時此處を出發し、バイン山を左に見つゝ、主として東北方の間の丘陵を進む。途中土地の潰れ居る處にて、土器の破片等を得たり。斯く丘陵の上を歩する事、十清里計りにして一河に達す。之れ即ちチヤガンムレン(Chaghan-mulren)なり。チヤンガンとは蒙古語にて白の意にしてムレンは大なる河なれば即ち白河の意味なり。チヤガンムレンは巴林王府の北に當れる、チヤガンサバラガ附近の山中に源を發し、巴林王府の西を流れ、更に大板(ダイバン)の地を經て此處に出で、ニーマモリに於てシラムレンに注ぐ。即ちチヤガンムレンの河口は、前日余等の渡らんと試みたるニーマモリなり。この河は、遼時代に所謂黑水河にして、遼史中にある、宋大中祥符九年の薛映記の『……五十里保和館度黑水河……』とある是れなり。此處に至る迄はマンハの丘陵起伏し、又バイン山の山脈にてありたるが、河の東方にはコルバントロガイ山聳ゆ。コルバントロガイとは蒙古語にて、三つの頭の山と云ふ意味にして、其の峰は三つの巖山突立し居るを以て此の名あり。チヤガンムレンは此のコルバントロガイ山の下を流れ、三十清里にしてシラムレンに合するなり。

三頭山

チヤガンムレン附近の遺物

チヤガンムレンの河岸の丘陵上、其の潰れたる處に、鐵屑の散亂するもの頗る多し。之に因つて此の時代の民族の鍛冶をなせる事、愈々確實となれり。チヤガンムレンに沿ひて進むに隨ひ、小丘陵の起伏するもの次第に多く、而して其頽れたる處には必ず石器、土器等の破片を見出し得べし。之等の遺物はクヰル民族の遺せるものゝ如く、石器、土器と共に鎧、鐵鍋等の破片、瑠璃玉等をも發見し得べく、此の附近の丘陵は、之等の遺物を最も多く存するを以て、遺物採集には最も適當の地なりとす。此の外最も興味ある遺跡としては、石斧を製造したる跡にして、此處には石器製造の原料及、其の原料を打ち碎きたるもの、其の出來上りたるもの

石斧製造の遺跡

等を存す。順を追ひて此等の遺物を調査せんか、石斧の製造の狀態自ら明なるものあらん。此の遺物と共に發見せらるゝ土器は、素燒の厚手なるものにして、其の形狀大且つ頗る不格恰なるものなるが、其表面には種々の模樣を附し、其の底には網代形等をつく。此の種類の土器は、最も古き時代のものに屬し、其の發掘せらるゝ附近よりは、金屬器を發見せず。他の場所にては石鏃、石斧、土器、鐵鎧、鐵鍋、瑠璃玉等相混雜して存するが、其の年代は、シラムレン沿岸に於て發見せるものと同時代にして、前述の遺物よりは遙かに後代のものならんか。然れども之等二種の間には、何れも相連絡する處ありて、全然別種のものとは思はれず。彼の鐵屑の如きは、即ち後の時代に屬するものたるや明かなり。余等は此の遺跡に就て種々の調査を爲したる後、丘陵を降り河岸の底地に沿ひて進む、十五清里計りにしてトロガイヌアラヌアイラに達し、即ち一泊する事に決す。此の日行程三十清里弱なり。

トロガイヌアラヌ村

此の附近に於ては、チヤガンムレンの兩岸丘陵をなし、丘陵の上には遺跡多く、昔時より此の附近に多くの住民ありしを證す。

喇嘛の家に一泊す

余等の宿泊せるは喇嘛僧の家にして、僧侶の中にても格式のよき喇嘛なれば、此附近の蒙古人等は、彼を呼ぶにノキンを以てす。ノキンとは君と云ふが如き尊稱なり。此の僧侶、年齡三十四五、非常に談話好なる人にして、共に興味ある談話を交じえしが、當時余は、ワッデル氏の著はせる、The Buddhism of Tibet. なる喇嘛教の書籍を携へ居りたれば、彼れに此の本を示して、說明を加へたるに彼は非常に喜び、談喇嘛教の事に及び興何時盡く可しとも覺えざりき。

附近の古跡を調査す

余等は此處に滯在する中、種々風俗上の調査をなしたり。此の日、村人等はこの邊のチヤガンムレン附近の丘陵より、發見せる古錢を多く持ち來り、余等の物貨と交換せん事を請ひしかば、余等は彼等の希望に任せ之が交換をなせり。斯して其夜は此處に宿泊し、明八日は早朝此村を出發する豫定なりき。

本日の溫度は朝八度、正午十三度、夜十三度弱。

四月八日。 主人の喇嘛僧は、余等の出發前に於て、是非共此の附近の名所古跡を一見せられ度しと請ひて止まざれば、即ち出發を見合せ、彼れと共に馬に乘りて古跡調査に出づ、南方に進む事三清里計りにして、チョロンソムに達す。

石廟

チョロンソムは一丘陵の上に在り。悉く花崗石を以て作り、西正角の家の形をなし、前方に入口を開く。蒙古人の說によれば、こは清朝に入りて造られたるものにしてチョロンソムと稱

此の土塀の内部に土を積みたるもの二個處ありて、古瓦、古磚等の破片散亂す。其の古瓦には模樣あるものを得ざりしが、其の古磚の形狀より考ふるに、塔に用ゐたるものなるが如し。されば昔時此の處に塔ありて、佛寺の建て居られたるものに非るかとの疑問を生ぜり。蒙古人等の此處を稱して、ホイルソムと云ふは最も注意すべき事にして、其の位置たるや、郊原の中に位しチャガンムレンに接せり。

花崗石の古碑文

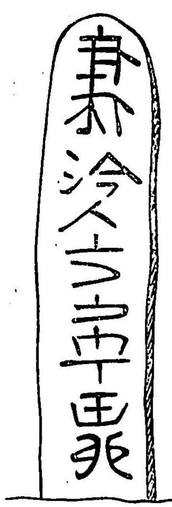
土塀より二丁計り距たりたる處に、長さ四尺許の花崗石の地上に横はるあり。この石は碑文らしく何か彫みあるが如くなれど、文字ありと思はるゝ方は地上に俯向になりて、仆れ居れば之を見る能はず。且つ重くして容易に動かすべからず。到底其の碑文を見得ざるかと思ひ居りたる際、余等の傍に立てる同行の喇嘛僧、此の碑に就て余に語りて曰く、今を去る事四五十年以前、此處を通れる喀喇沁の一蒙古人此の碑を見て、此處の地中に銀二函ありとの事を語りしが、之を聞ける此村の蒙古人等、彼れの言を固く信じ、如何にもして此の銀を掘り出さんと、其の後ち屢々試みたるが、今に至るも遂に發見するを得ずと。語り終りて余に向ひ、願はくは銀の所在を教へ賜はれと頻りに請ひて止まず。此に至りて余は始めて覺れるが、余等の出發前に當り、強ひて余を此處に誘ひ來れるは、余の種々の事を知り居るより、竊か

喇嘛僧の計畧に乘る

に此の銀の所在を教はらんが爲めなりしなり。余は元より其の說の取るに足らざるを知れども、此の碑石に如何なる事を記し得るかを見んが爲め、彼の喇嘛僧に告げて曰く、此の碑石を掘り起し、其の表に記されたる文字を見るにあらざれば、銀の存ずる場所を知る能はず、若し貴僧にして銀を得たしとの希望あらば、早く此の石をとり賜へと言ひたるに、彼は直ちに之を承諾し、馬に鞭を當てゝ飛ぶが如くに歸村せるが、一村内に報ぜしものと見え、忽ちにして七八人の蒙古人此處に集まり來り、共に力を協せて此の碑石を掘り起せり、卽ち就て見るに左に示すが如き文字ありたり。

即て彼等を利用す

契丹文字の碑文



此の文字は如何なる事を記せるものなるか、充分知るを得ざれども、契丹文字ならんと考へらる、之等は皆前に述べたる、土屏と關係あるものにして、大に研究するの價値あり。

契丹の旅行券

以上の古跡は遼時代のものならんが、其の位置のチャガンムレン沿岸に位するに見て、此の附近の地の、早く既に開け居たるを知るに足らん。

トロガイヌアラ村を發す

余等は之等の遺物を調査したる後ち村に歸り、余を待ちつゝありし妻子と共に、直ちに牛車に乘りて此の村を出發す。時に午前十時なりき。暫らく進みたる後、チャガンムレンの流に達し。川を横ぎりて後は、河岸に沿へる道を西北方に向つて進む。道は次第に狹くなり行き、川は丘陵に接して流れ、斯して七清里計り進みたる頃、丘陵の下、樹木鬱蒼たる處に達せり。

巴林王の墳墓

又暫くにして巴林王の墳墓の地なる、マンタを右に眺め、左にバイン山を見つゝ進む。此の巴林王の墳墓は山麓に位し饅頭形のものなるが、斯る墳墓の形式は余等の曾て滿洲にて見たるもの、卽ち彼の法庫門附近なる、公主陵の形式と同一なり。此處には饅頭形の墳墓二つありしが、其の東方なるは赤色に塗りたるものなりき。此の附近、左右は山にして樹木多く、之を通じてチャガンムレン流れ、風景頗る佳なり。此處より進む事二清里計りにして、ゲゲンショロン、ヌ、アイラに達し、一泊することゝなれり。

ゲゲンショロン村

古銅器

本日余等の出發するに際し、前の村より一役人を隨はしめたるが、彼の役人は其の胸部に、古錢及び一種珍奇なる銅にて作れるものとを、飾りとしてつけ居たり。而して此の銅にて作れるものは、花の形をなし、餘程古さものらしかりしが、彼は之をマンハの中に得たりと稱

し居りき。こは現今蒙古婦人の用うる飾と、同一なるものゝ古形にして、蒙古人の古風俗を研究する一助ともなるべきものなるが、余等は彼より此の飾を貰ひ受けたり。

余等の宿泊せしは富家にして、家族は主人夫婦のみなりしが、彼等はまめ〳〵しく立ち働き、非常に余等を優遇せり。夜、此村の村長來訪し種々の談話をなす。彼は其の腰に飾として、五銖錢を付け居たりしが、其の語る處によれば、此の附近なるマンハの中にて得たるものなりとぞ。諸種の調査及び寫し物等の爲め思はず時間を費し、夜更けて後漸く寢に就けり。

本日の溫度は朝十三度强、正午二十一度。

初めて雨に合ふ

四月九日。 朝主人に呼び起されて目を覺まし、臥床を離れて外に出づれば、微雨降り居たりき。こは珍らしき事にして、余の旅行中雨に際會せるは、此の時を以て始めとす。降雨と言ふも眞の微雨に過ぎざりしが、其の爲めに少しく冷氣を覺え、朝の溫度華氏十一度位なりき。兎角する間に、約束せる蒙古人及び三輛の牛車來りしかば、余等は荷物を整理して牛車に積み、午前八時頃此村を發す。

此の村に至る迄は主として、チャガンムレンに沿ひて歩み來りしが、之よりはチャガンムレンと相離れたる道を進む事となれり。然れどもチャンガンムレンの流域を傳ひて、進み行くは事實にして、只直ちに川と接せずと云ふ迄の事なり。即ちチャガンムレンを左にし西北方に向ひて進みしが、材落を出でて二清里計りにして丘陵の上に出づ。此の附近にて石器一個を得、更に進みバイン山附近の郊野にても之を發見せり。即ちチャガンムレン流域に於て、之等の遺物を發見せるにより、古代既にチャガンムレン方面は、或民族の確かに棲息なしありたる事實を、考古學上より證明し得たり。此の日寒氣尤も甚しかりき。

大板を望む

此の附近は一帶の草原なれば、余等は牛車の牛に草を與へぬ。斯して前日調査せる巴林王墳墓の存する山を右に見、バイン山を左に望み、丘陵の上を或は登り或は下りつゝ歩みしが、途中二三の蒙古村落を經過して、午後二時頃ゲゲンシヨロンヌアイラより、二十清里の地に達せるが、此處よりは大喇嘛廟の存するバイシンを望む。支那人は此のバイシンを稱してタ|バン(大板)と云ふ。此處の位置はチャガンムレンの沿岸に位し、其の喇嘛廟は巴林中にても屈指のものなり。又此の喇嘛廟の附近には、蒙古人の家及び支那人商賈の家屋等、集まるもの百五十計りなるが、其の地形は四方に丘陵を負ひたる、東西十五清里、南北亦十五清里の廣き郊原なり。

余等は左に三清里計り進み、この喇嘛廟を見んとせしが、こは他日を期し、此處にて少時

蒙古人の旅行

西烏珠穆沁人の服裝

休憩せる後再び旅程を續く。漸く進みて山上の高原にさしかゝりたる際、遠く一の天幕を張り、百有頭の牛馬を放牧しつゝある、一團の蒙古人を見たるが、近づくに隨ひ、其の西烏珠穆沁(Uchimuchin)王の一行にして、目下北京に滯在中なる、王を迎へんが爲めの旅行中なるを知れり。蒙古人の旅行の狀態は、斯の如くきものにして、即ち日々幾里か進み、草と水とありて、家畜を休むるに適當なる地に達すれば、天幕を張りて其處に一泊し、斯の如くして其の旅行を繼續するなり。此の烏珠穆沁王の一行を指揮するは、年若き一喇嘛僧にして數人の人夫之に從へり。此の喇嘛僧の風俗を見るに、頭には毛の帽子を戴き、蝦茶色の服を着せるが、その襟の合せ方は蒙古風なり。衣服は皆長き筒袖して、頗る裾の開きたるものなるが、其の緣には襟より裾に通じ、黑天鵞絨を附し以て飾りとす。而して足には長靴を穿つ。此の衣服の樣式は、西烏珠穆沁特有のものなり。

此の喇嘛僧及び其他の蒙古人等、共に最も質朴にして、南方の蒙古人等とは比すべくもあらず。余等は彼に、之より烏珠穆沁に向つて進むものなるを告げ、彼より途中の事情等に關する話を聞き、多くの利益を得たり。此處を出發せる後、途中各處に家の跡とも思はるゝ、石を敷きたるものを見たるが、こは古き時代に於て、此の附近に人家ありしを證するものなり。此

ダラハン山

月寒天に懸る

一牛斃る

ワストノトル村

蒙古犬

附近は又、土地高ければ、要害としても最もよき處ならん。之等の遺跡に就ては、余等に多少の意見あれども、他章に讓る事とせん。

それよりダラハン山の西麓を傳ひて進みしが、途中露出せる岩石多く、牛車の進行尤も困難なり。此の附近に石器時代の遺跡ありて、土器の破片、石鏃等を得たり。ダラハン山の麓の道に困難し居る中に日は西山に沒し、月天空にかゝるに至れり。且つ、寒氣酷しかりしければ、牛は疲れて進み得ず、其の一頭は遂に路上に斃るゝに至る。されど余等は此の一頭の牛の爲めに何時迄も停まるを得ざれば、止むを得ず此の一臺の牛車を後にして前進し、漸くにしてワストノトル、又、アイラに達し得たり。

此の村に入れる時、余等の服裝の見慣れざるものなる爲め、數多の犬吠え頗る危險なりき。抑も蒙古地方を旅行するに當りて、最も恐る可きは即ち此の犬なり。蒙古人の家には番をなさしむる爲め、少くも二三疋の犬を飼ひ居れるが、之等の犬は何れも狂犬的性質を帶び、其の家に近かんとするものあれば、群り來り其の人に向つて吠えかゝり危險甚し。こは嘗に旅行者のみに限らず、例へば乙の家の人、甲の家に至らんとする際に於ても亦然り。而して馬に乘り行けば、之等の犬は馬の脚に咬みつき、如何とも詮方なければ、蒙古人等はその旅行には

必ず杖を携へ、人家に至れる際には、其の杖を揮ひて、群り來る犬を打拂ひ〳〵つゝ進む。又或る者は石を持ち居り、犬の傍に其の石を擲げ付け、犬の驚く隙に其の家に入る。外國人にして蒙古地方を旅行する人は、最も注意を要すべき事なり。此の犬を避くるに最も安全なるは、家に近きたる際、直ちに其の家人を呼びて、犬を見張りせしむる事なり。即ち人家に近かんとする前に當り、大聲を發してノヘウヂーと呼べば、主人出て來りて犬を見張りするなり。之等の犬も其の家人なれば、決して何事もあらず。今迄此の犬に就ては述べざりしが、翁牛特出發以來何れの村落にても、此の事に遭遇せざるなく、此の以後の諸村にても亦同じけれども、一々説明するは餘りに煩はしければ、茲に一言するに止めん。

主人余等を侮る

余等は此の村にて、最も富み且つ大なる家に宿泊せしが、此の家にては牛馬數百頭を飼養し、下男下女等も多くありたり。主人は最初、余等を以て蒙古の事情に通ぜざるものと思ひ、待遇非常に悪しかりしが、余等は彼に諸種の談話をなし、又彼等を叱咤せるより、待遇俄かに改まり、蒙古的の御馳走等を出し非常に優待せり。此の夜蒙古人等の來り話すもの多く、余が種々の調査に取りて便宜を得たる事多かりき。

大巴林の支那化

此の日經過し來れる、チャガンムレン流域地方の村落を見るに、其の家屋の構造は蒙古風漸く衰へ、十中六七は不完全なる支那的家屋にして、蒙古家屋の物置にせられあるをも見たりき。然れども之等支那的家屋の悉く新しきに見れば、此の變化の起れるも最近の事なるが如し。而して其の最も甚しきものに至りては、少しも蒙古風を存せず、全然支那風の建築にして、其の入口に紅紙を貼れるものさへありき。斯の如き狀態なれば、從來蒙古の古風を存し居るを以て有名なりし大巴林も、其の風俗を一變する蓋し近き内ならんか。

興安嶺に入る

本日の溫度朝十一度、正午十八度。

四月十日。 此の村にては牛車の徵發困難なりしかば、即ち前日備ひ來れるものによりて旅程を續く。村を離れてより道を西北方にとり、前日望み見たるダラハン山を左に、アソ山を右に望みつゝ進み行く程に、遙かに西方に當り、克什克騰(Geshikten)方面の高峯、白雪を戴きて聳ゆるを見る。此の山脈は彼の興安嶺山脈の、西南方に走り居るものなり。又余等の此の日及び、前日に於て過ぎり來れる諸山は、興安嶺の一部をなすものなり。即ち余等は既に興安嶺の中に入れるものなるが、彼のシラムレンは此の興安嶺の南方に其の源を發するなり。此の途中は草豐かにして、牛を放ち飼ふもの多し。余等は此の時に至る迄、冬枯れの野をのみ過ぎ來れるが、此處に來りて、小さき若草の芽の二三萠え出でたるを見出し、始めて春らしき暖

若草萠え出づ

かゝる感を惹き起せり。暫らくの間、山と山とに挾まれたる丘陵の上を歩みしが、十清里計りにして、丘陵漸く終りを告げ復び平地に出づ。此の時大巴林の王府を前方に望み得たり。

抑も大巴林王府の位置たるや、北方即ち後方に山を負ひ、前方に當りては、其の東方より流れ來るワンエヌシャブルテコルあり。河を隔てゝ廣漠たる平原を控ゆ。此の平原は草地にして、廣袤東西十五清里、南北十清里あり。蒙古語のワンエヌシャブルテコルを飜譯すれば、ワンエは王爺にして、シャブルは渡るを意味し、テは持ちたるの意にして、コルは河なれば、即ち王爺の渡らるゝ河の意味なり。此の河は西南方に流るゝ事、三十清里にしてチャガンムレンに合す。之に據りて考ふるに、大巴林王府はチャガンムレンの本流及び、其の支流なる此の河に挾まれて、存在するものと言ふを得べし。　斯くして漸く王府に近づき來りしが、前夜一泊せし村落附近より、此處に至る間の途中に於て、石鏃を作れる石屑等を拾ひしが、王府附近の丘陵に於て土器、石器、貝殼等の破片を得たり。

王府に到着せるは午後一時頃なりしが、當時大巴林王は、北京滯在中にて不在なりしかば、此の夜は其の領内の事務を掌り居る役所に泊る事とせしが、此處にても亦役人等の、來訪應接に遑なき程なりき。

一言蒙古王府の狀態を述べんに、王は別に其の住宅を有する外に、其の傍に一の役所を建て、以て其の管轄内の事務を掌らしむ。而して之等の役人は蒙古人にして、一ヶ月交代にて事務に從ふ。

大巴林王府は、丘陵の上に建てられたる、支那風の建築にして數棟に分れ、正面には大なる門を構へ、比較的宏大なり。又其の近傍に大喇嘛廟あり。而して大巴林王は、蒙古の諸王中にありても富み居る方なりと云ふ。

本日の溫度朝四度なり。

四月十一日。は王府に滯在し種々の調査に從ふ。此の日の午前王府内の主なる役人三人來りて、余等の贈物に對する禮を述べたる後ち、明日此の王府を出發するの際は、出來得る限りの便宜を與へんと約し、尙饅飩粉を練りて長方形に造りたるを、油揚にせる菓子を余等に贈れり。午後一時頃雷鳴り小雨降りたるが、夕暮頃にも亦雷鳴及び小雨ありたり。余等の雷鳴を聞きしは此の日を以て最始とす。此の時の溫度は華氏十二度なりき。余等は午前より午後迄讀書し、妻は荷物の整理をなしたりき。此の日余等の爲めに羊一頭を屠りて饗應し、夜はまた白麵に羊肉を添へて出したるが、蒙古の風にては、羊を屠るは御馳走の第一なり。

初めて雷鳴を聞く

本日の溫度は朝六度、正午十二度、夜八度なり。

二、慶州古城に向ふ

四月十二日。 午前八時牛車及び、王府より余等を護衛する爲めとて遣はしたる、騎馬の役人一人を隨へて王府を出發す。北風吹き荒み、砂塵を飛ばす事甚しかりしが、余等一行は風を冒して進む。西北方に向つて進む事三清里にして一小村あり。其の家屋の構造は蒙古風と支那風と相半ばす。之より以後、或は丘陵を登り或は下り、又郊原を過る等、約十七清里計り進みたる後ち、車を停めて牛に草を與ふ。此附近牧草多く一帶に蒙古人の牧場なれども、悉く馬のみにして牛を見ず。此處にて三百疋餘りの馬を見たるが皆能く肥えたり。此の廣さ郊原中一家屋を見たるのみ、こは之等の馬の番人の住む家なり。此の郊原の廣さは東西一百清里餘、南北四十清里餘にして、南北は山を以て劃られ、東は丘陵に接し、西は遙かに克什克腾（ケシケトン）の高山に達す。更に進めば道漸く上りとなる。斯くして王府より三十清里計りにして、ヤマテオーラの山に來る。ヤマは羊、テは持つ、オーラは山なれば即ち羊の居る山の意にして、此の山に羊を放つが爲めに此名あり。此處は峠を爲し居れるが、之よりは道漸く下りとなり、西北に向

百里の草原馬肥えたり

ヤマテオーラ山

つて進む。峠に立ち前方を眺むれば、克什克腾の山及び其の前方に當りて、重疊する幾多の丘陵を見る可く、峠の下にはチャガンムレンの水流る。是に於てか再び同河に會したり。峠を下りてより二十清里にして、午後七時頃チョルチンモト、ヌ、アイラに達す。

此の村はチャガンムレンに近き位地にある大村落にして、家は點々散在し居れども、此の村に屬する戸數一百を算すと云ふ。余の宿泊せる處の如きは十七八戸群を爲せり。此處には蒙古風の家屋少く、多くはバイシンゲル即ち支那風の家屋なり。然れども住民は皆質朴にして且つ禮を知り、余等の宿泊せる家の主人の如きは非常に余等を待遇せり。此の村は大巴林王府を距る事五十清里なり。

チョルチンモトヌアイラと云ふ名の起れる所以は、この木あるが故にして之を意譯すれば即ちチョルチンモトの村と云ふ名にて、モトは木なり。

本日の溫度は朝九度なり。

四月十三日。 午前八時此の村を出發す。天氣暖かにして風少し。前日王府より隨ひ來れる役人は歸り去り。新たに此の村の役人一人隨行す、牛車は三臺にして一蒙古人之を率ゐ、主としてチャガンムレンに沿ひたる道を進みしが、此附近樹木頗る多く、三清里計りの間は殆んど

再びチャガンムレンに會す

チョルチンモト村

大巴林小巴林の境界

楡の林にして、村落處々に散在するを樹間に隱見す。此の附近の井戸は、石を壘みたるものにして家の傍にあり。又た家の構造は悉くバイシンゲルなり。チャガンムレンは此の附近に於ては、三清里の河幅にして土地はマンハなるが、其の丘陵には又遺跡を發見し得べく、余等は鐵片、鎧の破片等を得たり。途中對岸に一村を望めり。十五清里計り進める頃より、道急に東北方に轉ず。之れ河の流に關係するものにして、即ち此處にて河は大屈折を爲すに因るなり。而して此の河の大屈曲を爲す地點の對岸に、一大喇嘛廟あるを見る。廟の附近には戸數四五十の村落あり。又其の後方に當り、蒙古人等のイフオーラと稱する大なる山あり。マンハを進む事少時にして、更にマンハの丘陵を上りしが、牛漸く疲れたれば此處にて暫らく休憩す。

道漸く下りとなり再び平地に出づ、此の附近より復び河に接したる道を進みしが、前岸に當り蒙古人の家の點々存在するを見る、又マンハの道は漸く草の生じ居る處に出でたるが、山は次第に遠ざかり平野は遠く開け行けり。チョルチンモトヌアイラより二十清里の間は、其の左右の山と山との間隔五清里に過ぎざりしが、此邊に至りては山と山と次第に遠ざかり、其の距離百清里計りもある可し。又此の附近より土地の狀態漸々變化し來りぬ。此の變化ある所以は、河の大屈曲迄は大巴林(Yilin Barin)の管轄なれども、大屈曲よりは小巴林(Baglin Barin)の管轄に移れるを以てなり。即ち今余等の進みつゝあるは、小巴林王の地にして、川に沿ひて村落の點々たるを見る。チャガンムレンは沖積層を流るゝを以て其の屈折甚しく、河中に鴨、雁等の群をするを見たり。

旅稼の支那人

余等の進み行く路傍に荷車を停め、鍋を地上に下して飲食しつゝある、一團の支那人を見たり。彼等は西烏珠穆沁に行く途中にして、前夜は此處に露宿し、之より再び發程せんとするものなりき。其の一行は、其の親方と四五人の乾兒とにして、鍛冶を業とする者なり。支那人等は斯の如く四五人を以て一隊をなし、天幕を車に積みて、春の頃より蒙古に入り、秋に至り寒氣を感ずる頃に歸り來るを慣とす。此の日余等の際會せるも即ち之等の一隊なり。余等は此處を通過し、出發以來五十清里にしてウヌテアイラに達し、一泊する事とせるが、時に午後七時なり。

今朝出發せるより二十清里の間に存在する家屋は、バイシンゲル多かりしが、二十清里即ち河の大曲折よりはバイシンゲル漸く少く、多くはモンゴルゲルなり。又大巴林のモンゴルゲルは壁を圍ふに茅を用ゐしが、此の附近にては毛氈を用ゐたり。余等の宿れる家も亦此の毛氈を用ゐたるモンゴルゲルなりき。風俗も亦此處よりは純然たる蒙古風を呈し來り、即ち婦人の

衣服に就て看るも、大巴林にては、東翁牛特にて見たるが如き、袖の長きものを用ゐたりしが、此の邊にては筒袖を用ふ。即ち知るチャガンムレンの大曲折によりて、全然風俗を異にし、一方は漸く支那化せられ、一方は尚ほ稍や古風を存し居るを見る。即ち從來内蒙古の中にても、大巴林は尚古風を存すと稱せられたるも、今や總かに小巴林のチャガンムレン上流地方に、古風を存するのみ。余等の宿泊せる村落は、チャガンムレン河を中心とし、其の左右に散布するものにして、其の前岸に一喇嘛廟あり。地人之をタブンソムと稱し小丘陵の上にあり。又此の丘陵の上に十三オボあり。

小巴林の家屋

次に余等の滯在せる家屋の構造に就て其の概略を語らんに、柳の木を以て作れる高さ一間許りなる、竹矢來の如きもの幾つかを圓形に繋ぎ合せて壁となし、其の上に傘の骨の如きものを付けて屋根とし、此屋根と壁とは凡て蒙古人のウスキーと稱する毛氈を以て蔽へり。天井には室内の煙を放出する爲中央に窓を明け、入口は唯一個にして正面に開き、木にて作れる觀音開きの二枚戸を附し、其前には入口大のウスキーを垂る。蒙古人は之を稱してウードと云ふ。ウードには駱駝の毛の糸を以て、諸種の蒙古風の刺繍を施せり。又室内の有様は、其少し左に寄れる奥の方に佛壇を安置し、左右の壁側には箪笥を置き、彼等の衣服を藏するの用に供す。

右方入口に接したる處は、其の炊事場にして、鍋、桶等を此處に置き、家の中央には爐を作りて、物を煮燒し、又暖を取るには此の中に牛糞を燃し之を便ず。佛壇と爐との間には、毛氈を敷き詰め以て座席となせるが、此の毛氈の下には小さき板を敷き、支那人の如く椅子を用ゐず、趺座するを常とす。

大巴林の順禮

本日の溫度は朝十二度、正午十六度。

四月十四日。 朝余等の茶を飲み了りたる際、此の家の門に大巴林の順禮來れり。彼は主人の好みに應じ、ホーレーを彈きつゝ唄を歌ふ。此の家の主人は余等一行の旅情を慰せんとて、此の順禮に命じ其の樂器を彈きつゝ蒙古の唄を歌はしめたるに、彼は純蒙古謠を知らじと思ひてか、其の歌ふ處は皆蒙古風のものに非ずして、支那風の唄なりしかば、余等は更に純粹の蒙古唄を歌はしめて之を聞けり。主人は彼れの歌ひ終るや、モンゴアムを盆にのせて與へぬ。斯くして余等は愈々此の村を出發せり。

蒙古唄を聞く

余等は牛車三輛、騎馬の役人二人を隨へて出發す。時に午前十一時頃なりき。川に沿へる道を東北方に向つて進みしが、途上點々人家の散在するを見たり。此の附近の家屋はモンゴル、ゲル多くしてバイシンゲル少し。十五清里餘にして一喇嘛廟に達す。其の附近には人家二三

十戸ありてモンゴルゲル、バイシンゲル相混ぜり。此處に至る迄は主として、河の南岸を傳ひ居たりしが、喇嘛廟を北に見て少しく進みたる後ち、渡を渡りて北岸に出でしに、河水濁りて黒色を呈せり。更に進む事暫くすれば恰かも砦の堤の如き形を爲せる丘陵、左方の山脈より出でて右方に延長し、爲めに河水右岸に接近して流るゝを見る。余等は河と丘陵との間の道を進みしが、道狹く牛車の進行頗る困難なり。村人の案内にて漸く此處を通過し、二三丁にしてタービンアイラの民家に達す。此の日の行程二十清里。時に午後二時半なりしが、余は風俗の調査に從へり。此の日は非常に暖く、午前十二時に於ける溫度は華氏二十三度を示し、此に至る迄川ゐ來れる羊毛服を脱ぎたる程なりき。

タービン村

此の村落の名をタービンアイラと稱するが、其は五十村と云ふ意味にして、以て其の人家多きを知るに足らん。其の位置は河に臨み、其の後方には砦の如く突出せる丘陵を負ふ。此の丘陵は高さ六間位、天然の砦を爲すものにして、蒙古人は之を稱してシャラホショーと云ふ。余は其の下に於て土器等の破片を得たり。以て古代に於て人の棲息せると、其の武備的の目的に用ゐられしものたるとを知るに足らん。而して此の丘陵は、南方に向ひて長く堤の如く突出しあるを以て川は南岸に沿ひて流る。

シャラホショー

抑もチャガンムレンは黄河に注ぐものにして、古き時代に於て黒水河と稱せるは之れなり。此の黒水河なる名稱の、遼時代に於て盛んに用ゐられたるものなるは、當時遼の上京に旅行せる宋の人の旅行記等に、黒水河を渡る云々と記しあるに見るも明かなり。而して此の黒水河なる名稱は、其の河水の黒く濁れるに起因するものならんが、現今の蒙古人はチャガンムレン即ち白河と稱し居るは頗る興味ある對照と言はざるべからず。此の河は興安の山脈に其源を發し、余等の通過し來れる谷間を流れて、遂にシラムレンに注ぐものなるが、其の流域地方には住民多く、かの大巴林王府の如き、又大板の村落の如き皆此の沿岸に位す。而して其の河口は前に屢々述べたる、ニーマモリ即ち之れにして、此の河は尤も注意を拂ふの價値あるものと云ふ可し。

黒水河一名白河

余等の此の夜宿泊せるは、チャガンムレンの上源地にして、既に興安嶺の山中にあるなり。本日の溫度は正午二十三度なり。

四月十五日。午前九時頃、牛車三輛、騎馬の村人一人を隨へて、タービンアイラを出發す。又チャガンムレンに沿ひて進みしが、右方は丘陵にして、左方に當りてオールチックの山高く聳ゆ。途中モンゴルゲルを處々に見たり。路傍には土器、鐵片等を拾へるが、進む事

白塔子

白河々畔の砦址

十清里計りにして、前方遠く一高塔の聳ゆるを見る、之れ即ちチャガンサバラガ也。チャガンは白にしてサバラガは塔の意なるが、支那人之を支那風に呼びて白塔子と稱す。此の白塔子のある處は、古城址にして塔は其の中に存するなり。蒙古人は此の古城址をチンヂンホトンと稱す。余等のチャガンムレンを遡り來れるも、畢竟するに此のチンヂンホトンを、研究せんが爲めに外ならず。チンヂンホトンはチャガンムレン即ち、古の所謂黑水河の上源地に存在する古城址なり。余等は牛車を降り、白塔子を望みたる景を一枚撮影し、又其の景をスケッチせり。此處に至る途中に存する、マンハの丘陵の頽れたる處には陶器、鐵片等多く存し、又處々に家ありし跡とも思はるゝ敷石の遺れるを見たり。之等の遺物によりて考ふるに前にチャガンムレン沿岸に發見せる遺跡に比し、遙かに近代のものゝ如くなるが、蓋し遼時代のものなる可し。

來る事十三清里計りにして、前日見たるシャラホショーの如く、南より北に向つて延長する砦の如き丘陵に出づ。其の高さは又同じく六間計りにて、只シャラホショーは、此れより南に向つて延長するに反し、此處にあるものは南より北に向つて走り居れり。此處も亦延長せる丘の爲めに、チャガンムレンは北岸に接して流る。此の附近は即ち此の丘陵と河と相接し、其の間狹まれたる道路は甚だ狹し。此の丘陵にも頽れたる處ありたれば、余等は其の上に登り見たるに、果して土器、石器等を發見せり。其の他石器を製造せる跡も多かりしが、稍完全せる石器二三個を得たり。土器は普通のものなりしが、之と共に白き陶器の破片一個を得たり。余等は以前の砦及び此の砦に就て觀察せるに、兩者相對峙するの形を爲せり。若し天然のものとすれば餘りに不可思議にして、人爲のものとせば、其の砦として造れるものなる事明かならん。兩者孰れにせよ、上代に於て敵を防ぐに用ひられたるや、明かなる事實にして、且其上より石器、土器等發見せらるゝにより、その古き時代より用ひられたるものにして、決して新しきものに非るを知る可し。之れより河に沿ひて進む事七清里、チャガンサバラガヌアイラに達し、其の村長の家に一泊する事とす。此の日の行程三十清里なりき。

チャガンサバラガ村

チャガンサバラガ村の地形を概說せんに、北はオルチックの山を負ひ、東はバイン山を控へ、更に其の後方に當り、西烏珠穆沁に接するハルバン山の聳ゆるあり。南はマンハの丘陵にして、西はチャガンムレン河に臨む。又西方遠くイフオーラの山を見るべし。且つ四通八達の地にして各地に達する道路相集まる。即ち東は阿嚕科爾沁(Aru Khorchin)東北方は西烏珠穆沁に至るべく、南方に向つて進めば、小巴林の王府にして、西は即ち克什克騰なり。シャ

ラホショーより、西烏珠穆沁に通ずる路も亦此處を過ぐ。

又、白塔子の古城趾は、後方即ち北方に山を負ひ、東北方亦山を控え、南は低き丘陵にして、チャガンムレンは其西方を流る。チャガンムレンは東北方より來り、古城と一里計り相隔れる地を流れ、幾多の屈曲を經、西方に向つて走り去れり。

地勢前述の如く、最も要害の地なれば、以上砦の趾を存するも間ありと云ふ可し。

此の古城趾は遼史に所謂、慶州城にして、彼の聖宗を葬れるも、遼の行宮のありしも皆之れなり、余は此村に滯在し、此の古城趾に就て調査をなせり。

チャガンサバラガはチャガンムレンを中心とし、古城ある處より、余の宿泊せる南岸に至る迄を、包容せる大村落にして、土地牧畜に適すると、城中に塔及び喇嘛廟の存するが爲め、蒙古人の順禮し來るもの多きとにより、稍や富めるものゝ如し。

本日の溫度は朝十七度なり。

三、慶州古城の調査

四月十六日。滯在、調査す。

四月十七日。亦此村に滯在し、專らチンヂンホトンの古城趾に就て調査せり。以下此の古城に關して聊か述ぶる處あらん。

古城趾の位置は、前回既に說きたる如く、大巴林の北方小巴林の極北部にして、實にチャガンムレンの上源地に位す。而して北は烏珠穆沁（ウヂムチン）に接し、東は阿嚕科爾沁（アルコルチン）、西は克什克騰（ケシケトン）に境す、以上各地間通路の要衝に當ると雖も、地は山間の要害なれば、以上の各地より此城に至る道は頗る困難なり。又其附近を流るゝチャガンムレンは、シラムレンの流に注ぐものにして、遼時代の所謂黑水河之れなり、遼史中、宋大中祥符九年の薛映記に

……三十里度潢水石橋旁有饒州店於契丹嘗置饒樂今渤海人居之五十里保和館度黑水河七十里宣化館五十里長泰館西二十里有佛舍民舍民居即祖州又四十里至臨潢府自過崇信館乃契丹舊墟其南奚地也……臨潢西北二百餘里號涼淀在饅頭山南避暑之處多豐草堀地丈餘即有堅冰。

文中の黑水河と稱するは、乃ちチャガンムレンにして、涼淀とは蓋しこの古城なるべし。遼史に屬々黑山平淀と記する是れならん。此の古城は正に黑水河の上流に位するなり。

古城附近に於ける黑水河、乃ちチャガンムレンの狀態に就て說かんに、水は谷間を流れ、

河床は冲積層を爲して、土地軟かなれば、河流長蛇の如く或は右に或は左に蜿蜒屈曲す。何幅は約三四間ありて水量多く水濁れり。又其の兩岸を爲す山には、今は見る能はざれども、往時は樹木ありしが如し。續史方輿紀要は北邊記事を引用し左の如く記しぬ。

廢慶州——臨潢西百六十里……北邊紀事舊慶州在大寧北六百餘里西南至開平八百餘里地皆大松號曰千里松林明洪武三年李文忠敗元主于應昌窮追至北慶州而還二十年馮勝北征遣藍玉出遵化道松亭關襲敵騎于慶州是也。

之に見るも、當時附近に樹木多かりしを推知し得べし。且つ此地山中に位するを以て、隱塲所にも用ひられし如く、元の王、明軍の追ふ處となり、此處に逃れたる事も、以上の記事に因りて明かなり。

慶州城築造の目的

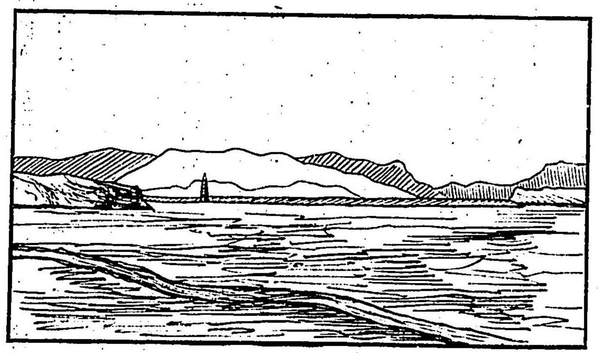
遼の此處に慶州城を築き又後ち行宮とせしも、同一目的に供へん爲めに外ならず。之は今の滿州朝廷が熱河に行宮を置き、平時は夏季避暑の地に當て、一朝事ある際には、其の避難處となすと同一なり。

古城と砦跡

古城の黑水河上流の山中に位置するは、前述の如くなるが、其の西方に當りて、余等の前日經過し來れる二砦を控ゆ。之等の砦は此の古城に對して、最も必要なるものたるべしは明か

城内の白塔

城の構造



第六　大巴林より阿嚕科爾沁

チヤガンムンレンを隔だてゝ遼の行宮古城を望む

なり。現今蒙古人は此の附近に於て、天幕生活を爲しつゝあれども、彼等は此の古城の何れの年、如何なる人の築きしものなるやは全く知らず。只だチンヂンホトンと稱し居るなり。ホトンは蒙古語にて城の意にして、チンヂンは彼の慶州の音と相似るが如きは考ふべき事なり。城中に存する白塔は、現今に於ては寧ろ此の古城よりも有名なるものにして、爲めに蒙古人等は此の古城よりも、チヤガンバラガ即ち白塔の名を多く呼びつゝあり。

此の城は土にて築かれたるものにして、最初先づ土を煉瓦の如く長方形に固め、そをつみ立てゝ城壁となしたるものなり。今日に於ては年を閲する事古ければ、其の築造狀態分明ならず、單に土を盛り上げて築けるものゝ如し。城壁の高さは六

間計り厚さ三間弱なり。城の形状は正四方形にして、其の周圍は我邦の四十八町より五十町の間にあり。蒙古人は城壁の一面は二淸里、乃ち我が十二町ありと稱す。又東西南北の四門あり。而して城壁の中には一般蒙古人の住むなく、只喇嘛廟の存在するあるのみ。

白塔の形式

城中又一塔を存す。形八角にして十三重の煉瓦造りなり。塔の中央に佛體を安置し、佛の兩側には各脇士あり。又其の上には天蓋ありて天蓋の左右に天人を附す。塔の周圍には又佛塔を附せり。此の塔の形式は二喀喇沁附近に存在する遼の中京の古塔（中京城外西南に建てるもの）に似たる所多し。

城内の遺物

尙塔を中心として城内至る處遺跡遺物狼藉たるものあり。今其の重なるものを列擧すれば、碑文石、臺石、石佛、瓦、煉瓦等にして、就中最も吾人の注意すべきは碑文なりとす。今其の形狀、文章等に就て述べんに大畧左の如し。

古碑文

碑文中殊に注意すべきもの二あり。一は普通の事項を記せるものにして、一は陀羅尼を記せるものなり。前者は八角形の大理石にして高さ二尺、碑石處々缺損し、碑文を判讀するに困難なりしが、今其の文字を記せば左の如し。

西北

□直歷□亭　金　□
道蹤於
曹利用□□聖祖宗
　　　　　誓書乞
□□□□□□

東北

成究丘封表域既議□於皇堂衾□旅庭
於喪孝群□□朔贈陳輸會葬之深
皇帝玉覆四方雖居至
長府□　於龍　　　□移斵
北門雀臺□望永

□□於□都□天□□
□□□於庭□德□□
□□□□方固□□□□□
□□□嚴天類二治□乘拱旣
返於帝卿極□在堆徒執書於
大后撫柩銜哀臨朝稱制遺弓有
中宸
□删銀牓以建儲旣安社稷之基遂考
積□以□月十八日扶護御□櫃厝於
政□當因豫親卜岡塋□比象耕遠
□奉遺言躬臨吉□□台□而□典程日
十路日移□於□□□□□□□□由是博

後者も亦八角形の大理石にして、音文字を以て陀羅尼を記し、又石碑の各面に佛像及び臨士を附せり。この陀羅尼は尊勝陀羅尼にして、今殘り居れる文字を示せば左の如し。

成波咀林　……崇重法
地瑟恥□　……功□摩育屣遣
三滿跢鉢哩林弟□薩　……軍□造摩□寶女之
恥□跢□摩賀　……路則萬行薩□嚴宣妙

地薩埵縛野摩賀　……陁羅尼幢一座徵求楚
野□薩□與□敎怛嚴拏加　……摧揰懋禽翻翻而
□縛□□□阿埵也□□傳路　……陁□秘密之文上
佛道媒□□麼訖哩二合娜野麼　……岑結蓮光之印
他婆□□　……瑞氣於重纍靈
誠□成□□怛作地踰　……以悲心擁護如
路迦底□□訖□□童嘛嘛賀跢摩賀冒　……十地塵霑罗
□麼□雁婆麼二合囉吃哩蔗娜野短嚕短嚕羯□
野婆達野摩哩度嚕尼演底摩賀尼演底馱囉馱囉
□捺縛二合□傳□□宏摧左摧尼摩何摩摧阿摩摧□哩□
伊□曳嘛嘛路抳□□縛婆摧摧誡尼□尼蘖捨也你吠
漉尼漉尼蘖捨也慕賀左□尼漉尼□捨也跋魯□□

尚之等碑文以外に、昔時石碑ありしと思はるゝ墓石二非あり。何れも大理石にして、其の一には一對の獅子を彫刻し、其形頗る雄勢なり。而して他は石觀音なるが、その彫刻中々見事にして、今東京帝國大學に保存す。

以上の碑文、墓石等は遺物中の重なるものなれども、其他彫刻せる礎石、瓦、磚等非常に多く、殊に瓦には綠、黃等の着色せるもあり。又石臼、古錢、骰子、メンコ、飾玉、耳飾、陶磁器、金屬類、鎧の破片、鍍金紡綞車等珍奇なるもの尠からず。現今存在する喇嘛廟の如きは、之等彼時の遺物たる煉瓦を利用して建てたるものなり。

城內は今尚ほ昔時の俤を存し、處々高臺の趾とも見る可きものあり。而して之等の高臺中昔時の煉瓦を敷きたる儘を存するもあり。之等の遺跡遺物によりて、朧氣ながらも當時の狀態を推考するを得ん。余等は之等の遺跡遺物を調査しつゝある間に、皇帝の玉座の跡をも確め得たり。

皇帝玉座の跡

余等は此の城內のプランを引くが爲めに二三日を費やしたる後ち、此の古城より西の山に沿ひて行く事、五淸里計りの地に存する、古き建物の跡を調査せり。蒙古人は此處をタルビンフルムと稱す。

第六　大巴林より阿嚕科爾沁

タルビンフルムの城址

タルビンフルムの城壁も、チンヂンホトンと同じく、土を以て築きたるものにして、高さ四尺計り長さ一面百八十歩あり。城壁中又高臺を存し、其の高臺附近には前の古城中に於て發見したると同一なる絲、黄等の瓦を存せり。以て兩者共に同時代の建造なるを知らん。……

又此のタルビンフルムとチンヂンホトンの間に於て、河に面したる地には、處々建物の跡らしきものありたるが、之等にも亦着色せる瓦の散在するを見たり。……

要するにチンヂンホトンの古城を研究せんと欲せば、之等遺跡遺物の全部を綜合して考究せざるべからず。余は之等に就て聊か研究せるも、其の精細は此處に述ぶるを得ず。只此の古城に關し、二三余の考ふる處を述ぶるに止めんとす。

碑文の研究

遺跡中第一に吾人の研究すべきは、前にも既て述べたる八角形の碑文なり。文字磨滅し加ふるに碑石亦處々毀損したる處あれば、辛じて以上記する部分丈を讀み得たるなり。然れども此の碑文は當時の事を考究する上に於て、最も須要なるものなれば、左に少しく余の研究を述べんに、先づ碑文の文中注意すべきは、其の中に「曹利用」なる姓名のある事なり。余の考を以てすれば此の「曹利用」とは彼の澶淵の盟に有名なる「曹利用」なる可し。此の人に就ては宋史卷二百九十「列傳四十九」に記する處に據れば

曹利用

曹利用字用之趙州寧晉人父諫擢明經第仕至右補闕以武畧改崇儀使利用少喜談辯慷慨有志操……と註せり。

即ち碑文中の曹利用は、此の人なるを知りて後ち碑文に注意すれば、其の遼、宋の交渉に於て最も緊要なる、彼の澶淵の盟に關係あるものたるを知るべし。順序として先づ澶淵の盟に就て語らんに。

澶淵の盟

遼は元、景宗の時には宋と通じ居りしが、宋の太宗、大平興國四年、北漢を伐つに及び遼と親しからず、始めて、宋の開戰を見るに至れり。同七年景宗崩じ、其の長子聖宗年十二に、して位を繼ぐや、其の母、蕭太后專ら國政軍事を司れり。宋の眞宗の景德元年、聖宗及び太后は共に入冠し澶州に至る。茲に於て宋は大に驚きたるが、或者の勸めにより眞宗遂に河を渡りて、北城門樓に到り一同萬歳を呼ぶ。聲數十里に聞えしかば遼軍相視て怖駭せり、遼乾杞をして、書を持し、盟を請はしむ、宋は即ち曹利用を遣はし、和を議せしむる事となりしが、利用は契丹に到り地を劃く事無く、銀十萬兩、絹二十萬匹を以て歳幣とし、且つ遼は宋を以て兄とし宋は遼を弟とする事を約して和成りぬ。之を稱して澶淵の盟と云ふ。實に遼の聖宗統和二十二年十一月の事なり。宋にては眞宗の景德元年にして、我國にては一條天皇の寛

弘元年乃ち藤原道長攝政の時に相當す。

碑文中に、「聖祖宗誓書云々」の文字あるは此の事を記せるに非るか、考ふべし。

尙又碑文中「以建儲旣……臨吉□臺」とあるは、彼の聖宗の慶雲山附近に地を卜し「吾萬歲の後當さに此處に葬るべし」と言へる事を記せるならん。又、興宗が「遺命を奉じて永慶陵を建つ、望仙殿、御容殿あり云々」なる文字と此の碑文と全く相照應して見るも、此の碑文は聖宗崩御の後ち、興宗の建てたるものなるが如し。

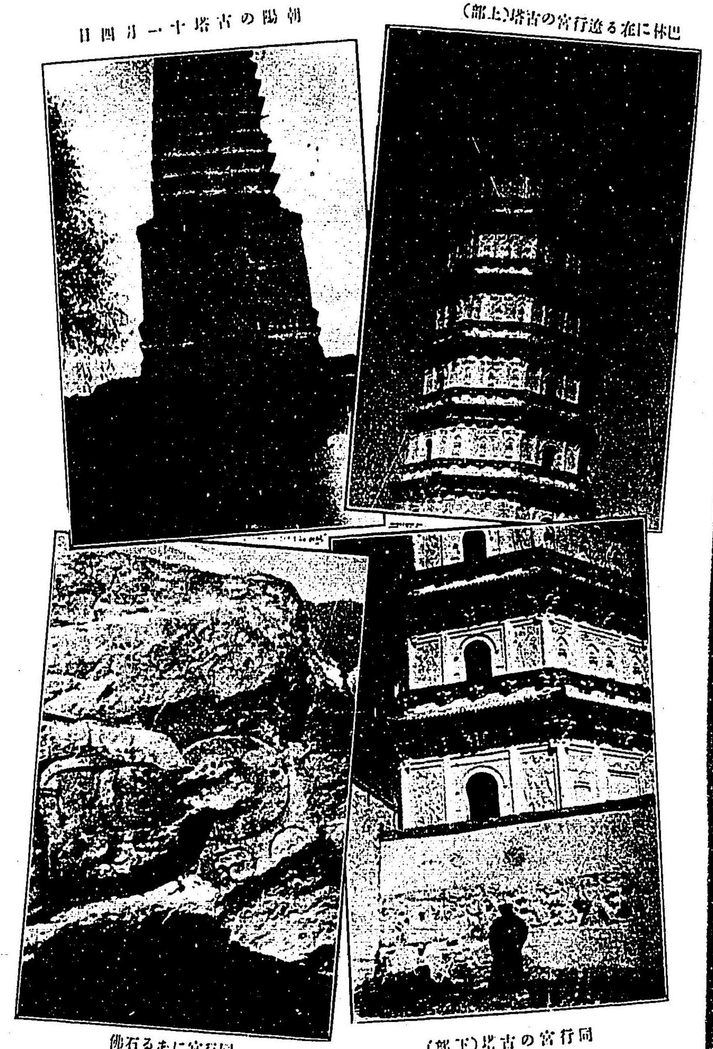
聖宗の遺命を承じて興宗建之

又碑文の「北門崔嵬□望永……」中にある「永」は永慶陵の文字にあらざるか。

又「太后撫柩銜哀臨朝稱制……」と記せる中の太后は、興宗の生母たる法天太后なるべし。

法天太后⑤

法天太后は元、宮人にして訥木錦と稱せしが、聖宗の開泰三年春二月皇子宗眞を生みたる故を以て、上して順聖元妃となす。然るに皇后は子なきを以て、宗眞を養ふて子となせり。元妃性姦惡にして、皇后を讒する事も屢々なりしが、太平十一年聖宗崩じ、皇太子宗眞十五歲にして即位し興宗となりしかば、元妃自ら立つて太后となり、國政を攝し法天太后と稱せり。而して聖宗の后皇たる齊天后を上京に遷し、尙其れにても嫌たらず、齊天后に罪ありと讒奏し、人を遣はして遂に弑せしめたり。時に齊天后、齡五十、後ち追罪して仁德皇后となし「慶陵」に葬る。



朝陽の古塔十一月四日

(部上)塔古の宮行遼る在に林巴

同行宮の古塔(下部)

同行宮にある石佛

る。

齊天后弑せられて後は、法天太后益權を專らにし、景福と改元し、後ち又重熙元年には尊んて法天應運仁德聖皇太后と稱す。重熙三年太后陰かに諸弟を召し、小子重元を立てん事を議せしが、帝の知る處となり、「慶州」の七括宮に遷さる。此は慶陵を守らしめたるものなり。後ち數年を經たる重熙八年、興宗侮ゐて復た后を迎へぬ。

以上に據りて考ふるに、碑文中の太后は明かに、法天太后なるが如くなれども、若し果して然りとせば、此の碑石の建てられたるは、聖宗の崩ぜられし太平十一年(宋天聖八年)より、重熙三年(宋の景祐元年)即ち太后の陰謀露見せし結果、慶州の守陵たらしめられたる五年の間にあるや明かなり。我が邦にては一條天皇の終りより、後一條天皇の始めにして、頼信、頼義等平忠常を平げ、又富士山火ありし際に相當す。

慶州城たるの考證

次に余の述べんと欲するは、此の古城は遼の所謂慶州城なる事なり。

抑も慶州城は何れの時代に築かれしものなるかは、遼史卷之三十七地理志、上京道の處に左の如く記するを參照すべし。曰く

慶州玄寧郡上節度、本、太保山黑河之地、嚴谷險峻、穆宗建城、號黑河州……